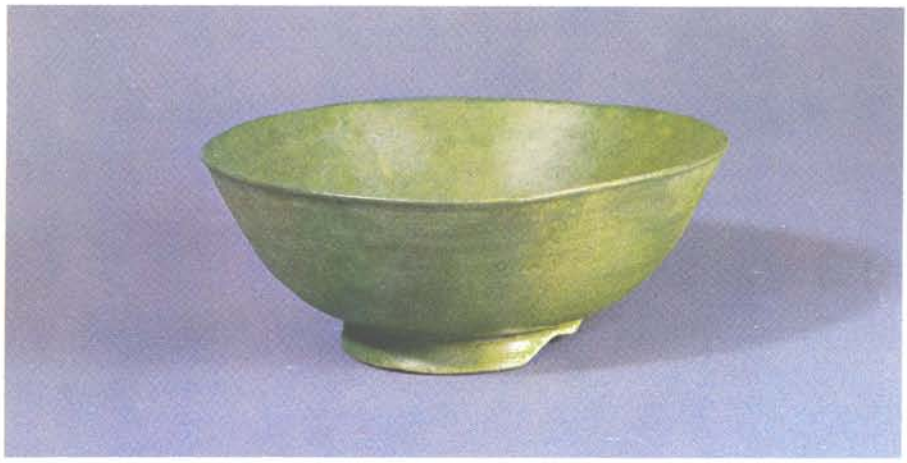
南勢バイパス埋蔵文化財調査報告

1 9 7 3

建設省中部地方建設局
三 重 県 教 育 委 員 会



高向B遺跡出土　緑釉陶器

序

各種開発事業にかかる埋蔵文化財の保護は、この数年来の大きな課題となってきている。埋蔵文化財は、原則としてすべて保存されるべきものであり、その所在地における開発事業の実施にあたっては、つとめて保存するよう要請している。そのため、最近では、事業地内に保存される例も多くみられ、その努力と誠意には、深く感謝している。

今回、ここに報告する南勢バイパス関係の遺跡は、建設計画上、保存が困難となったため、発掘調査したもので、多大の成果を得た。

本書を刊行するにあたり、調査に協力された建設省中部地方建設局・紀勢国道工事事務所、県土木部の関係者をはじめ、地元関係各位に謝意を表するものである。

昭和48年3月

三重県教育委員会
教育長　関　根　則　之

例　　言

1．本書は、建設省中部地方建設局の委託により三重県教育委員会が実施した南勢バイパス道路敷埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．調査した遺跡は５ヶ所で、その経費は建設省中部地方建設局の負担による。

3．各遺跡の報告において使用した地形図は、紀勢国道工事事務所「伊勢北道路改良工事縦断平面図」による。

4．図版に使用した航空写真は、自衛隊明野航空学校の提供による。

5．本書は、下記の分担執筆による。

小玉道明	Ⅰ	調査の概要
山本　威	Ⅱ	遺跡の自然環境
吉水康夫	Ⅳ	大藪遺跡
伊藤久嗣	Ⅲ	遺跡の歴史的環境
	Ⅴ	高向Ａ遺跡
	Ⅵ	高向Ｂ遺跡
	Ⅶ	高向Ｃ遺跡
	Ⅷ	山田遺跡

6．本書の遺構標示は、下記の略記号による。

ＳＢ；竪穴住居址、掘立柱建物址

ＳＤ；溝　　址

ＳＥ；井　　戸

ＳＫ；土　　坑

ＳＸ；方形周溝墓

7.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　調 査 の 概 要…… 1

　1．調査にいたる経過

　2．調　査　行　程

Ⅱ　遺跡の自然環境…… 3

　1．地　　形

　2．地　　質

Ⅲ　遺跡の歴史的環境…… 7

Ⅳ　大　藪　遺　跡…… 11

Ⅴ　高 向 A 遺 跡…… 39

Ⅵ　高 向 B 遺 跡…… 50

Ⅶ　高 向 C 遺 跡…… 57

Ⅷ　山　田　遺　跡…… 75

表

第１表　西南日本地質層序…… 5

第２表　高向Ａ遺跡・掘立柱建物址の規模…… 41

第３表　高向Ｂ遺跡・掘立柱建物址の規模…… 51

第４表　高向Ｃ遺跡・掘立柱建物址の規模…… 59

第５表　　〃　　・土師器杯ＢⅠ～Ⅲの法量 …… 71

第６表　高向Ｃ遺跡・土師器皿ＢⅠ～Ⅲの法量…… 71

第７表　　〃　　・M95地区土師器法量と規格性…… 71

第８表　　〃　　・M95地区土師器数量 …… 72

図　　版

図版１　大藪遺跡　(1)遺跡遠景　(2)調査区全景

図版２　〃　(1)調査区東半部　(2)調査区東半部

図版３　〃　(1)ＳＸ１．２．３　(2)ＳＸ１．２．３　(3)ＳＸ１

図版４　〃　(1)ＳＸ１．２土器出土状態　(2)ＳＸ１．２土器出土状態

図版５　〃　ＳＸ１．２出土土器

図版６　〃　井戸．包含層出土土器

図版７　〃　包含層出土土器．砥石．土錘

図版８　〃　包含層出土土器

図版９　〃　包含層出土土器

図版10　高向Ａ遺跡　(1)全　景　(2)ＳＢ105．106

図版11　〃　(1)ＳＢ101　(2)ＳＢ101カマド址　(3)ＳＢ109．110

図版12　〃　(1)ＳＢ106.107、ＳＤ112　(2)ＳＥ123　(3)ＳＥ122

図版13　高向Ｂ遺跡　(1)遠　景　(2)全　景

図版14　〃　(1)ＳＢ201．204　(2)ＳＢ201　(3)ＳＢ203．207．206

図版15　高向Ｃ遺跡　(1)遠　景　(2)西側全景

図版16　〃　(1)ＳＢ304．ＳＥ315　(2)ＳＥ315

図版17　〃　(1)東側全景　(2)ＳＢ301．302、ＳＥ316　(3)山田遺跡遠景

図版18　高向Ａ遺跡　ＳＢ101カマド址出土土器

図版19　〃　ＳＫ116、包含層出土土器

図版20　高向Ｂ遺跡　包含層出土土器

図版21　高向Ｃ遺跡　ＳＤ313出土土器

図版22　〃　包含層出土土器

図版23　〃　包含層出土土器

図版24　〃　ＳＤ312、包含層出土土器

図版25　高向Ａ・Ｃ遺跡　(1)墨書土器　(2)銅　鏡

図版26　高向Ａ遺跡　(1)青磁・白磁　(2)瀬戸焼

挿　　図

第１図　伊勢市周辺の地形と地質…… 4
第２図　夷勢バイパスと調査遺跡、周辺の遺跡…… 8
第３図　大藪遺跡・立地と発掘区…… 11
第４図　大藪遺跡遺構平面図…… 23
第５図　ＳＸ１．２．３実測図…… 25
第６図　ＳＸ１．２土器出土状態、ＳＥ５実測図…… 27
第７図　ＳＸ１．２出土土器実測図…… 29
第８図　包含層出土土器実測図、拓影…… 31
第９図　平安時代土器実測図…… 33
第10図　鎌倉・室町時代土器実測図…… 35
第11図　鎌倉・室町時代土器実測図…… 37
第12図　高向Ａ遺跡・立地と発掘区…… 39
第13図　高向Ｂ遺跡・立地と発掘区…… 50
第14図　高向Ｃ遺跡・立地と発掘区…… 57
第15図　山 田 遺 跡・立地と発掘区…… 75
第16図　高向Ａ遺跡遺構平面図…… 77
第17図　高向Ｂ遺跡遺構平面図…… 79
第18図　高向Ｃ遺跡遺構平面図…… 81
第19図　高向Ａ・Ｃ遺跡ＳＢ101．102．301．302、ＳＥ123．315．316実測図…… 83
第20図　高向Ａ遺跡ＳＢ101、ＳＫ114．包含層出土土器実測図…… 85
第21図　高向Ａ遺跡ＳＫ116出土土器実測図…… 87
第22図　高向Ａ遺跡ＳＥ122、ＳＫ117．118．121、包含層出土土器実測図…… 89
第23図　高向Ａ遺跡包含層出土土器、砥石実測図…… 91
第24図　高向Ｂ遺跡包含層出土土器実測図…… 93
第25図　高向Ｂ遺跡包含層出土土器実測図…… 95
第26図　高向Ｃ遺跡ＳＤ313出土土器実測図…… 97
第27図　高向Ｃ遺跡ＳＥ315、包含層出土土器実測図…… 99
第28図　高向Ｃ遺跡包含層出土土器実測図……101
第29図　高向Ｃ遺跡包含層出土土器実測図……103
第30図　高向Ｃ遺跡包含層出土土器実測図……105
第31図　高向Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡包含層出土遺物実測図、拓影……107
第32図　高向Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡土器拓影……109

Ⅰ　調査の概要

1．調査にいたる経過

南勢バイパスは、一般国道23号のうち三重県一志郡三雲村小津地先を始点とし、伊勢市中村に至る延長約30.8kmの大規模バイパスである。このバイパスは、伊勢湾沿岸、及び内陸部の総合開発に対し、大動脈的役割を果すと同時に、伊勢・志摩を中心とする南勢地方への観光交通に対処するものとして、計画着工されたものである。（建設省中部地方建設局･紀勢国道工事事務所『紀勢国道』1972．4による。）

バイパス工事着手に先立ち、昭和46年6月には、中部地方建設局・紀勢国道工事事務所長名により三重県知事宛に、一般国道23号（南勢バイパス）改築工事にかかる「埋蔵文化財について」の照会があった。そのため遺跡分布調査が必要となり、昭和46年7月、三重大学歴史研究会に依頼した。当初においては、遺跡の多い多気郡明和町内に、かなりの件数が計画路線内に所在するのではないかとも予想されていた。しかし分布調査の結果、伊勢市磯町地内に、早くから知られている大藪遺跡の他、新に確認されたものとしては、御薗村高向地内に1ヶ所、同長屋地内に1ヶ所が判明した。

これらの結果をもとに、路線内の遺跡の保護措置について協議をすすめ、工事着手前の発掘調査を行なうことになったが、道路建設工程から昭和46年11月にはその早期着手がせまられてきた。しかし、三重県教育委員会としては、年度途中のことでもあり、また、県農林水産部による県営圃場整備事業にともなう緊急発掘調査など、所定の調査計画があり、昭和46年度内には、南勢バイパス関係の埋蔵文化財の調査に応じられない旨、県土木部はもとより、中部地建・紀勢国道工事事務所に申し入れた。

以後、この発掘調査実施の方策について、関係者の間で、再三再四、協議検討され、バイパス工事着手の日程上から、目近に着工を控えた国道165(久居・津バイパス）改築工事および近畿自動車道関・久居線工事等の事業推進の意味もあって、県教育委員会文化課に専任技師の増配置の措置がとられることになった。

昭和46年12月には、南勢バイパス（23号）工事に伴なう埋蔵文化財発掘調査に関する「協定」と「委託契約」を、中部地方建設局長と三重県教育委員会教育長とで締結し、調査に着手することになった。ついで同月、「新設自動車道遺跡調査連絡会」を開催し､紀勢国道工事事務所､日本道路公団名古屋支社津工事事務所および県土木部用地対策課に、それぞれの工事概況の説明を求めるとともに、関係教育事務所、市町村教育委員会に対し、調査実施にあたっての協力を要請した。

2．調　査　行　程

調査は、つぎの態勢のもとに、昭和46年度、47年度にわたっておこなった。

調査委託者　建設省中部地方建設局

調 査 主 体　三重県教育委員会

調査担当者　小玉　道明（三重県教育委員会文化課主事）

下村登良男（　　同　　上　　）

山沢　義貴（　　同　　上　　技師）

谷本　鋭次（　　同　　上　　）

伊藤　久嗣（　　同　　上　　）

吉水　康夫（　　同　　上　　）

中村　行信（三重県立博物館学芸課長）

調査協力機関 紀勢国道工事事務所、県土木部用地対策課、同中南勢道路用地対策事務所、南勢志摩教育事務所、伊勢市教育委員会、御薗村教育委員会、御薗中学校

調査協力者　伊勢市磯町 西河吉男、度会郡御薗村高向 森北利助、北村源八

昭和46年度の調査は、昭和47年１月から３月まで、伊勢市磯町・大藪遺跡、御薗村大字高向・高向遺跡の発掘調査と、同村大字長屋・山田遺跡の試掘調査をおこなった。このうち山田遺跡は、約16,000m²以上の広範囲な規模のものと考えられたがすでに農林省東海農政局による宮川用水事業によって攪乱されたのか、遺物、遺構ともみとめられなかった。当初計画では、つづいて昭和47年度に本調査をすることになっていたが、試掘調査だけにとどめた。一方、高向遺跡では、調査中において東方約180ｍと約360ｍの２ヶ所に新に遺跡の所在することがわかり、これを高向Ｂ遺跡、高向Ｃ遺跡として昭和47年度に調査した。現場発掘調査は、昭和47年８月で終了し、以後出土品の整理と、報告書の作成にあたった。この間、調査をすすめるにあたり、紀勢国道工事事務所建設監督官西口久郎氏、同建設技官山下正一氏には、何かとご配慮たまわった。また、発掘調査中および調査後の出土品整理については、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長坪井清足氏、三重大学教育学部教授服部貞蔵氏、名古屋大学考古学研究室助教授楢崎彰一氏のご指導を得た。

II　遺跡の自然環境

――伊勢市周辺の地形と地質――

1．地　　形

伊勢市周辺の地形は、南部山地、中部平地及び北部の海岸地形によって構成されている。

(1) 南　部　山　地

伊勢市南方に東西に連る山地及び丘陵地は、紀伊山脈の主脈の最東端に位置し、山地の主峯は鷲嶺（544m）、前山（528.8m）、朝熊山（558m）等である。一般に500m余りの高度を示す比較的起伏に富んだ東西性の山系で、谷はV字形となり、壮年期の山容を呈している。この山地を解析して南北に流れるのが宮川及び五十鈴川である。このため山地は分断され、支稜線は南北方向に走る場合が多い。山地の北方に続く丘陵地は高度200m～300mで、最高は鼓ヶ岳の355.2mである。これより北側は河川の侵蝕による浅い谷を隔てて、100m前後の前山的な独立丘陵に続いている。高倉山（115m）、八幡山（50m）、貝吹山（90m）を含むそれぞれの丘陵地は、中央構造線と直交する弱線によって地塊化されたものである。谷密度は比較的高く、主に南北方向に発達して、谷底平野は樹枝状に分布している。

(2) 中　部　平　地

丘陵地より海岸までは広い平地を形成しているが、宮川西部の明野は台地となり、その他は低地となっている。明野台地は宮川による扇状地的な洪積世の段丘で、高度は5m～20mを示し、伊勢湾に向って次第に低くなっている。従来殆んど畑地であったが、宮川用水路設置後急に開田が進み、現在は水田もかなり広い面積を占めている。宮川低地は、宮川及び五十鈴川によって作られた沖積世の平地で、両河川にはさまれた地帯及び明野台地の東北端に展けている。古くは流路も多岐に亘り、多数の三角州が存在していたが、盛土、埋立て等によって平地として利用されている。現存する自然提防も中州起源のものがかなりあり、宮川分流の馬瀬川は大部分埋立てられている。高度は5m以下で0m地帯もある。

(3) 海　岸　地　形

本地域の海岸線は志摩半島南部のリヤス式海岸とは極めて対称的な単調な直線型で、前者の沈降海岸に対して隆起海岸である。砂州や砂堆が海岸に平行して発達している。所によっては10m弱の砂丘もみられる。細粒の砂浜が大部分で一部礫浜、磯浜となっている。河口附近は0m以下の地域もあり、湿地帯や、潮汐平地が存在する。

第1図　伊勢市周辺の地形と地質

2．地　　質

西南日本の地質は、中央構造線を境にして内帯と外帯に分けられる。本地域は両帯にまたがっているが、外帯は長瀞変成岩類、御荷鉾緑色岩類等が表れているに対し、内帯は洪積層、沖積層が分布するにすぎない。内帯特有の岩石はこれらの下にもぐっているものと考えられる。全体の層序を示すと次のとおりである。

時代		地層
新生代	沖積世	沖積層
	洪積世	段丘層　上位層 下位層
	第三紀 中新世？	第三紀層
古生代		御荷鉾緑色岩類
		長瀞変成岩類

第１表　西南日本地質層序

(1)　長瀞変成岩類

中央構造線は、大規模な断層による破砕帯で、高見峠から粥見を通り伊勢市に向っているが、当地域では砂礫層におおわれ不明である。この構造線に接して南側に分布するのが長瀞変成岩類である。激しい動力変成作用の結果、著るしい褶曲構造を示している。岩石は石英片岩、黒色片岩、緑色片岩、砂岩片岩、石灰岩等であるが、これらが相互に入り混っていることが多い。本地域では、南部の山地及び丘陵地の骨格を形成し、全体としては黒色片岩地帯であるが、緑色片岩が走向に平行してレンズ状にはさまっている。走向は北70°東前後で一般に北に傾斜している。

(2)　御荷鉾緑色岩類

全体としては、長瀞変成岩類の南部に帯状に配列するのが御荷鉾緑色岩類であるが、当地域では途中にはさまれて分布する。前者に比較して変成の程度は低く、角閃岩と、断層の弱線にそって迸入したと考えられる斑糲岩及び橄欖岩よりなっている。朝熊山は主として斑糲岩で構成されているが、この地域は角閃岩が主要な部分を占めている。高倉山丘陵と二見丘陵に分布し、暗灰緑色の塊状か、灰緑色の片状である。基性凝灰岩が動力変成をうけて出来たものとされている。

(3)　第　三　紀　層

外宮西方に僅か分布している。化石が発見されないので時代は確かでないが、岩相は一志層群下部層に類似している。新鮮な面は灰青色で、層理は明らかでなく、粗粒砂に領家帯由来の小礫を含んでいる。

(4) 段　　丘　　層

当地域には大別して二つの段丘層がある。上位段丘層は、南部山地とその北方の独立丘陵の中間にあり、高度は20m～40mである。結晶片岩、チャート、砂岩等の亜角礫を含み、普通5cm～6cmであるが、大きいものは25cmに達する。表層部は赤褐色の土壌でおおわれている。下位段丘層は明野台地と、宮川の河岸に分布している。宮川両岸のものはチャート、砂岩等の礫を主とするが、明野台地のものは、領家帯由来の礫が多く、チャートを僅に含んでいる。高度はいずれも20m以下である。明野地域は扇状地起源の段丘礫層と考えられるが、本層の上には赤褐色土と黒色土が厚くおおっている。

(5) 沖　　積　　層

平地は一面に沖積層が分布している。内宮から大湊にかけての五十鈴川沿岸低地は、殆んど氾濫平野と三角州である。表面は砂層又は黒色土であり、その下は普通砂礫層となっている。明野地域では、1cm内外と小礫を含む赤褐色土が60cm～80cmあり、その上に黒色土壌が40cm～60cm堆積している宮川河口の三角州は厚い砂層で一部は潮汐平地となっている。

Ⅲ　遺跡の歴史的環境

――宮川流域の歴史――

紀伊半島の屋根である大台山系に源をもつ宮川は、上流域に大杉谷の渓谷を形成し、多気・度会両郡を東北に貫流して伊勢湾の南部に注ぐ南勢屈指の大河川である。

この宮川を生活の糧としてきた人々の足跡は、数万年以前の先土器時代から辿ることができる。それらの遺跡は、上・中流域の河岸段丘上に集中し、北方の櫛田川流域に分布する遺跡をも含めると、三重県内の先土器時代遺跡の約三分の二を占めている。そのほとんどが先土器時代後期の所産であるが、関東・中部地方と瀬戸内地方との間に位置する関係上、両地方の特色が混在することが確認されている。[註1] しかしながら、全て表面採集資料であるため、将来の層位的究明がまたれる。

縄文時代の遺跡も、河岸段丘上に散在し、時代が下るにつれて、次第に下流域へ展開していく。前代の先土器時代遺跡と重複する場合も多く、大小の両規模の遺跡が近接することも興味深い。なかでも下久具遺跡[註2]、佐八遺跡[註3]は、遺物が豊富であり、文化伝播のルートを解明する上で看過できない遺跡である。

宮川流域における水稲耕作の始りは、なお明らかにはされていないが、弥生時代中期以降から遺跡の数が漸増してきている。今回調査を実施した大藪遺跡をはじめ、中楽山遺跡[註4]、小社遺跡[註5]などがあり、いずれも河岸段丘や低丘陵の先端部に住居址、方形周溝墓などがある程度のまとまりをもって形成されている。出土遺物では、中・後期の弥生式土器が割合に豊富で、伊勢湾沿岸に特徴的なＳ字状口縁をもつ甕形土器の存在など、この頃には小規模な農業共同体の形成が次第に進行していたことがうかがえるのである。

宮川流域の古墳時代を語る時、前期・中期の大型古墳が存在していないことを見落すことができない。このことは北方の櫛田川、雲出川流域に前・中期古墳が順次形成されていったこととくらべて、在地勢力の急激な成長がなお未発達であったことを暗示するのかもしれない。一方、志摩、鳥羽地域には鳶ケ巣古墳、泊古墳など前方後円墳が造営されており、すくなくとも５世紀後半には古式横穴式石室として著名なオジョウカ古墳が造営されているので、今後宮川流域においても同時期の古墳の発見が期待される。

玉城町東南部、伊勢市周辺部に後期の群集墳が形成されていくのは、ほぼ６世紀後半から７世紀以降にわたっている。ほとんどが小規模な円墳で、横穴式石室も多い。なかでも、７世紀前半に造営されたものと考えられているのが、巨石の横穴式石室をもつ高倉山古墳である。

外宮神域の最高所にある高倉山古墳は、神宮の成立と変遷にとってなんらかの関連があること

第２図　南勢バイパスと調査遺跡、周辺の遺跡

１．佐八遺跡	４．六軒屋遺跡	７．向山遺跡	10．うるし原遺跡	13．車塚古墳群	16．蓮台寺址	19．雨堤古墳群
２．小杜遺跡	５．袴田遺跡	８．離宮院址	11．小町塚経塚	14．虎尾山古墳群	17．風呂山古墳群	20．丸山古墳群
３．中楽山遺跡	６．尾野畑遺跡	９．経塚古墳	12．高倉山古墳	15．旭 経 塚	18．洞ヶ崎古墳群	21．菩堤山経塚

は古くから考えられており、ほぼ在地の土豪で外宮祭祀の主掌者である度会氏一族の有力者の墳墓と考えられている。[註6] 一方、高倉山古墳に後続する古墳群は、いずれもせいぜい10数基以下の小規模なものであり、古墳群相互が密集していない。文献上では、既に7世紀に神宮の国家神としての変貌が着々と進行していたことがうかがえるが、このことをただちに前述の高倉山古墳に後続する古墳群の実態と重複させ難い点もある。神域に近接するという環境が、高倉山古墳以降の古墳造営に一定の規制を与えた可能性や、度会・荒木田両氏の構成の究明と古墳群の様相との究明も今後の課題であり、古墳時代の祭祀遺跡の究明もまたれるものである。

一方、旧宮川の流路の一部は外宮北側に接していたと思われるが、現在の伊勢市の主要市街地の大半が標高0m前後の低地に展開している。この地理的環境は、古墳群の分布にも反映していたと考えて差支えなければ、古墳時代の可耕地はデルタ地域の中央部へ進出していたとは考えられず、むしろその縁辺部が主要な可耕地であったと推定されよう。むしろ同じ頃に宮川左岸、玉城町、外城田町一帯がより早くから開拓が進み、政治的にも優位な位置を保ちえたのではないかとも考えられる。

奈良時代以降、神宮に対する律令体制への再編など天皇制支配による国家神への転換と整備[註7]に伴ない、広範な地域が神宮領に吸収されるに至る。同時代の寺院跡は、太神宮寺として蓬鹿背(おうがせ)廃寺址[註8]、平安時代の蓮台寺址が知られるのみである。一方、平野部には条里遺構が残るが、宮川以東では内宮北方の伊勢市楠部、神田地区に小規模にみられる。さらに宮川と櫛田川をはさむ地域、とりわけ櫛田川流域には条里遺構が良好に残り、平安時代には東寺領の川合荘・大国荘が著名である。また、平安時代の霊山信仰と弥勒信仰や浄土思想の混融した普及によって、朝熊山(あさまやま)経塚・菩提山経塚・旭経塚・小町塚経塚など旧伊勢街道から朝熊山頂まで点在して造営されている。

これまで述べてきたように、宮川下流には、平安時代までの遺跡は河岸段丘上、丘陵部に集中する傾向があるが、沖積平野にはみられない。現在まで平野部には中世土器が散布する個所はあるものの、古墳時代以降の集落遺跡などは未確認であった。このことは遠く紀和県境の豪雨地帯に源をもつ宮川と、さらに南方の勢田川や五十鈴川などが下流地域にもたらした度重なる氾濫と流路の激しい変化が、沖積平野に生活の場が拡大することに制約を与えていたものと思われる。

さらに平安時代以降、荘園制度下における神宮の東国への経済的進展につれて、伊勢湾沿岸の港湾集落が急速に繁栄していく。神宮に経済的基盤をもった商業活動の発展、それ自体神宮の質的変化の表われでもあったが、神宮の外港として著名な大湊港、鎌倉時代から栄えた神社(かみやしろ)港など、近くは渥美・知多半島からの物資の輸送、また、神宮の経済的基盤である御薗、御厨の東方への拡大などにとって、この宮川が果した役割はきわめて多大であったといえよう。

以上簡単に宮川流域の歴史的環境を述べたが、今回の大藪遺跡・高向遺跡の調査は、宮川デルタ地域へ初めて考古学的調査の鍬を入れたものであり、重要な資料を提供することとなった。

註

1．奥　義次氏の御教示による。

2．岡田　登「下久具万野遺跡とその遺物」（『歩跡』第２号　皇学館大学考古学研究会）1972

3．前川　順「伊勢市佐八町の縄文遺跡概要」（『歩跡』創刊号　皇学館大学考古学研究会）1970

4．1973年三重県教育委会により調査実施

5．村山邦彦「小社遺跡」（『歩跡』第２号　皇学館大学考古学研究会）1972

6．岡田精司『古代王権の祭祀と神話』塙書房　1970
神宮成立時期にも諸説あるが、５世紀後半の雄略朝（岡田説）、６世紀前半（直木説）が代表的なものである。

7．藤谷俊雄、直木孝次郎『伊勢神宮』　三一書房　1960
直木孝次郎『日本古代の氏族と天皇』　塙書房　1964

8．松永恵一「蓬鹿背廃寺」（『歩跡』第２号　皇学館大学考古学研究会）1972

Ⅳ 大藪遺跡

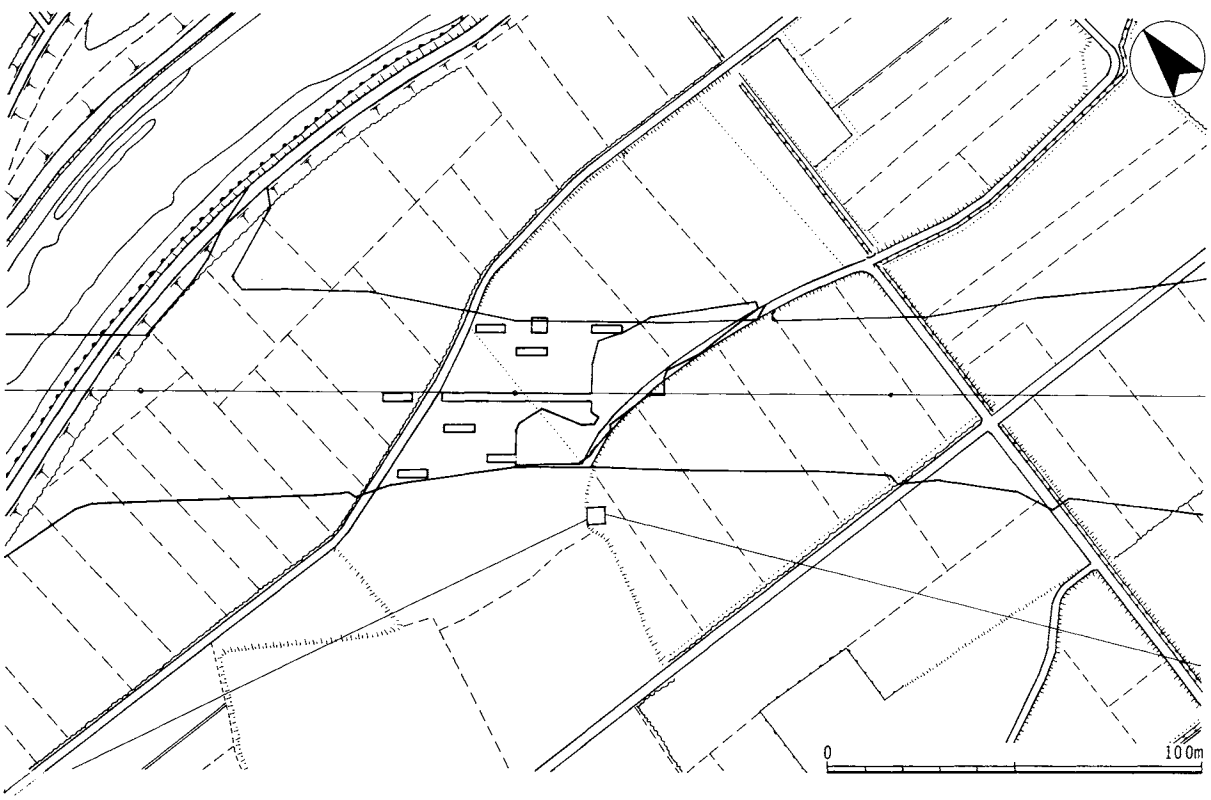
1．調査の経過

大藪（おおやぶ）遺跡は伊勢市磯町に所在し、すでに昭和35年度の遺跡分布調査（三重県埋蔵文化財包蔵地調査）において須恵器・土師器の散布を確認し古墳時代の遺跡として知られていた。その後、南勢バイパスの路線決定に伴い再度遺物の分布範囲の確認を行ない、周囲の水田と約１ｍの比高をもつ帯状の高い部分が遺跡の範囲であり、そのうち約 2,400㎡が路線敷にかかることが明らかとなった。

発掘調査は、昭和47年２月８日より２ｍ×８ｍを基本とした試掘坑を各所に設定し、遺跡の範囲を追求した。

その結果、当地域の東南部の耕土下、黒ぼくと呼ばれる黒色土が見られる部分では遺構が認められたが、北西部については耕作土の天地返しによって地山まで攪乱されており遺構の存在は認められないため、東南部の約 800㎡についてのみ調査を行なった。

調査の過程において、遺物の出土状態、地山面での遺構の様相などから遺構の上面は黒色土層中に存するものかとも考えられたが、土層の区別は全く不可能であるため地山面で遺構の追求を行なった。



第３図　大藪遺跡・立地と発掘区

その結果、弥生時代後期の方形周溝墓３基、平安時代の井戸、鎌倉時代の井戸、平安時代から鎌倉時代の建物址や柱穴、溝などの遺構や、縄文時代から室町時代に至る各種の土器などが出土し、３月28日調査の全てを完了した。

２．位 置 と 地 形

大台ケ原（標高 1,695m）に源を発し伊勢湾に流れる宮川と、小河川ではあるが水量が多く、玉城町より東流する外城田川との河口より上流４km、両河川が最も近接した部分の間に大藪遺跡は位置し、現在の近鉄小俣駅の東0.5kmの畑地である。

遺跡の所在する地城は、周囲の水田に対して比高差１ｍで外城田川と並行にのびる帯状の高みを形成しており、外城田川によって形成された自然堤防であり、その上に集落が営まれたものではないかと思われた。

しかしながら付近の地形や、調査によって黒ぼくが見られるなどの土層の状態などからこの地域は、玉城町大仏山から東にのびる低い段丘の先端であると考えられる。

この付近は宮川をひかえ、南に広大な伊勢平野を望み、古くより良好な生活条件をもつためか、外城田川をはさみ弥生時代から古墳時代にわたる多くの遺跡が知られている。

これまで本格的な発掘調査の行なわれた遺跡は無いが、当遺跡の他、茶屋前遺跡、下稲場遺跡、東遺跡、万城遺跡、うるし原遺跡、袴田遺跡と半径２kmの範囲に７ヶ所が知られている。

又、古墳も数ヶ所知られており、一般には円墳とされているが、地元の人々の話によると以前は比較的大きな前方後円型の墳丘を有したのではないかと考えられる経塚古墳（丁塚古墳）が北東１kmに所在する。

その他狐塚古墳、中塚古墳、カンジョ塚古墳等が知られている。

３．遺　　構

弥生時代後期の方形周溝墓３基の他平安時代の井戸１ヶ所や土坑、鎌倉時代の井戸、柱穴や溝等が検出された。しかしながらこれらの遺構の多くは比較的浅く、遺物も黒色土の浅い位置からも多く見られること、地山の削平や黒色土の攪乱などは考えられない、などのことからこれらの遺構の多くが黒色土中から掘り込まれたものと考えられる。

A　弥生時代の遺構

(1)　方 形 周 溝 墓（図版３～５、第４・５図）

ＳＸ１　規模は溝の外端で8.1m×8.4m。各溝は巾約0.6m～１ｍ、深さは20cm前後である。南隅で溝は跡切れており、ＳＸ２と切り合っているがその前後関係は不明である。

北東の溝の中央に壺１個が出土した他、南東の溝中より甕１、壺２、小型壺１、器台１、高杯１等がいずれもほぼ完形で出土し、他の部分ではほとんど遺物は見られなかった。

ＳＸ２　一辺は 9.2ｍ他辺は調査地区外のため不明である。溝巾は0.8ｍ～ 1.0ｍ、深さは40cm～70cmである。溝は北溝でＳＸ１と、東溝でＳＸ３と切り合っているがいずれも前後関係は不明である。ＳＸ１との切り合い部分付近で壺の上半部が口縁部を下にして出土した他、小型無頸壺と高杯の破片が各１個出土している。

ＳＸ３　東西の長さは攪乱のためあまり明確ではないが 8.5ｍ×７ｍの長方形をなすものと思われる。溝巾は40cm前後、深さ20cm前後である。南西隅でＳＸ２と切り合っているがその前後関係は不明である。出土遺物は土器の細片が若干出土したのみである。

(2)　土　　坑

ＳＫ４　直径約 1.4ｍの不整な円形で、深さは約30cmであり底はほぼ平らである。出土土器は若干の細片を得たのみであり時期は不明である。

Ｂ　平安時代の遺構

(1)　井　　戸（図版３、第６図）

ＳＥ５　ＳＸ１の東隅を切って掘られている。上部では直径約 1.8ｍの不整形の円形であり、底部付近では一辺約１ｍの方形で、深さ約 1.8ｍの掘り方を持つ。底面の四隅には柱の痕跡が見られたため、各隅に柱を建てそれぞれの間に板を入れ一辺約60cmの方形の井戸枠を設けていたものと思われる。又上面の周囲には４個の柱穴が見られ、その中には底面に石を敷いたものが１個見られることなどから、井戸の覆屋か、つるべ様の上部構造があったものであろうか。

(2)　土　　坑

ＳＫ６・７・８の３個の土坑を検出した。

ＳＫ６は２ｍ×1.2ｍ、深さ約50cm、ＳＫ８は2.6ｍ×1.2ｍ、深さは10cmたらずの楕円形である。ＳＫ７は直径約2.5ｍのほぼ円形であり、深さ約15cmである。いずれも遺物の量は少なく、性格も不明である。

(3)　掘立柱建物址

ＳＢ９　３間（柱間1.7ｍ）×２間（柱間1.6ｍ）であり、柱穴は直径25cm～40cm、深さ15cm～40cmと不ぞろいで、柱通りもわるい。

Ｃ　鎌倉時代の遺構

(1)　井　　戸

ＳＥ10　直径約2.8ｍでほぼ円形の堀り方を持つ。埋没土の状態などから攪乱されたものか比較的新しい時期に埋められたものかと考えられたため完掘できず、詳細な規模、構造等は不明である。遺物は鍋を中心に比較的多量に出土した。

(2)　土　　坑

ＳＫ11　3.4ｍ×２ｍの長方形で、深さは10cm～15cmほどである。中央はやや高くなっており、

底面は凹凸がひどい。北東隅と南東隅には4個ずつの河原石が見られた。遺物は鎌倉時代のものばかりでなく、平安時代の土器の混入も見られたが、この遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

(3) 溝　　址（図版2）

ＳＤ12　調査区の南端を東西に走るもので、ほぼ直線であるがやや南にわん曲する。巾は約60cm前後、深さは20cm～30cmを測る。遺物の出土量は比較的少なく、又弥生前期の土器をはじめ他の時期の土器も若干ながら混入している。

ＳＤ13　調査区の東半部にあり北西を角にしてほぼ直角にまがり、ＳＤ12、ＳＤ14とで約15m×11mの長方形の区画を形成することも考えられるが、２本の溝に比して掘り方、底面共粗雑である。巾は１m前後、深さは10cm～40cmと凹凸がひどい。遺物はあまり多くないが比較的幅の広い時代の土器が見られる。

ＳＤ14　巾40cm前後、深さは約10cmほどである。ＳＤ15と並行して南北にのびているが地山面の傾斜と共に消滅する。遺物は少ない。

Ｄ　その他の遺構

ＳＤ15　巾約40cm、深さ５cm～15cmの溝でＳＤ14と並行して南北に走り、ＳＤ12の付近までのび、ほぼ直角を形成する。遺物はほとんど見られないため時期は不明である。

ＳＢ16　２間（柱間1.2m）×３間（柱間1.3m）の掘立柱建物と考えられ、柱穴はいずれも直径20cm～30cm、深さ10cm前後と規模は小さく浅いためか検出できなかった柱穴もあり、柱通りもわるい。時期は不明である。

その他多数の柱穴を検出したが、いずれも建物としてはまとまらず、大半は時期も不明である。

４．遺　　物

遺物の出土量はあまり多くはないが、時期的には縄文時代早期、弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代と多様な時期の遺物の出土を見た。しかしながらその多くは黒色土中より出土したものであり、遺構との関連の明確なものは少なかった。又、黒色土中より出土の土器の中に比較的復元の可能なものが少なからず含まれるため、黒色土中から遺構が掘り込まれていたことも考えられよう。

Ａ　縄文時代の遺物（図版６、第８図）

早期の土器（53～56）いずれも格子目押形文の施された小片で黒色土中より出土した。厚さは７mm前後である。口縁部の小片で表裏とも施文されたもの（53）も見られる。

晩期の土器（57．58）　条痕の施されたものである。口縁部の１片は風化がひどく明確ではないが、口縁端上面に刺突が見られ、口縁端外側に大きな刻みをほどこした凸帯をめぐらし、その下に条痕を施した例（58）が見られる。

Ｂ　弥生時代の遺物

(1)　前 期 の 土 器（図版６、第８図）

壺（15．59）　口縁部に１孔１対と思われる紐穴を有し、頸部では肩部をていねいにヘラ削りし段を形成したのみのもの（15）と頸部に２本のヘラ描き沈線を施し、その下端から肩部にかけてヘラ削りして段を形成した小片（59）とがある。

甕（16．60～63）　口縁部はややうすくなって外反し、全く無文のもの（16）と、口縁端に刻みを施し、三条のヘラ描き沈線を施したものとがある。

蓋（14）　風化のひどい小片であるが、砂粒の混入の多い胎土などからこの時期のものと思われる。形状は傘形のもので頂部に１孔の中心紐穴を有している。端部を欠損しているため大きさは明らかではないが直径10cmほどの壺用蓋形土器であろう。

(2)　後 期 の 土 器

１　方形周溝墓の土器（図版４．５、第７図）

ＳＸ１（１～10）

壺（１．２）はいずれも東溝より出土したものである。壺は球形の体部に外反する比較的小さな口縁部と不安定な底部とを有するものである。(1)は肩部に縦方向で４本原体の櫛による３条の波状文と、３本原体の櫛による２条の波状文が各１対の計４ヶ所に施されている。高さ29cm、最大径25cmを測る。

（２）は肩部をこまかい刷毛でしあげ、最大径部分で横方向、腹部で縦方向にヘラ削りによってし上げられたものである。

器台（３）は上部で径19cm、底部で径20cm、高さ19cmを測る。比較的高い位置で大きくひらく受け部と、なめらかにひらく脚部をもつ。端部は受け部、脚部共１条の凹線が施されている。

小型壺（４）　高さ12cm、最大径12cmのものである。作りはややいびつであるが、ソロバン球形に近い体部と、比較的安定し、厚みのある、突出した底部を有したものである。

高杯（５）　丸みのある杯部とそれに比してやや小さい脚部とを有する。口縁部外側で横方向、それ以下で縦方向にていねいなヘラ削りがなされている。杯部で径11cm、高さ９cmを測る。

甕（６）　するどく外反する口縁部をもち、その端部は比較的角ばっている。内側は板状のものでナデられ、外側腹部は縦方向にヘラ削りがなされている。底部を欠損しているためその形状、高さは不明である。径は約17cmである。

その他東溝では甕の脚台部や長頸壺の口縁部の小片等が出土している。そのうち甕脚台部の１個（７）はこまかい刷毛によってていねいに調整されており、下端部の径12cmと非常に大型のものである。

又、北溝では単独に壺が出土している。この壺（10）は最大径23.5cm、高さ25cmを測る。比較的高い位置で大きく張った腹部を有する。

頸部は短いが垂直に立ち、口縁部は外へひらく。口縁端は細い竹管状のもので刺突した列点が施されており、口縁部内側にヘラによるV字形のマークが1個見られる。肩部ではこまかい刷毛による調整が見られ、腹部中位であらい刷毛、下位は縦方向のヘラ削りがなされている。底部は非常に安定している。

SX2（11～13）

壺（11）　ほぼ垂直に立ち上る頸部から大きくひらく口縁部を有し、肩部は丸みをおびた比較的大型の壺である。口縁部内側には8本原体の櫛による扇状文を施し、頸部は刷毛によって調整している。頸部つけ根は断面三角の凸帯をめぐらし、その上下に原体3本の櫛による刺突が見られ、以下8本原体の櫛による直線、波状文、直線、波状文、波状文と施されている。

高杯（12）　杯部のみの破片で径12cmを測る。丸みをおびた杯部で外側はヘラ削りによってていねいに調整されている。

無頸壺（13）　小片である。口縁径で約10cmを測る。無文であるが器表はベンガラの塗付が見られる。

2　その他の後期の土器（第8図）

壺（17．18）　（17）は比較的厚手の口縁部破片で、口縁端には羽状文が施されている。（18）は頸部のくびれた部分からすぐ外反して口縁部となる。頸部よりやや下に2本原体の櫛による波状文がめぐっている。口縁部で径 9.5cmと比較的小型の壺である。

高杯（19．20）　いずれも杯部のみで脚台部の形状は不明である。下底部と口縁部との間にするどい稜線が入り、（19）は厚くやや外反する口縁部を有し、無文で内外面共にていねいにヘラ磨きで仕上げている。（20）は口縁端と稜線との中間でうすくなり、口縁部外側に4本原体の櫛による波状文が施されている。下底部は内外面共にていねいなヘラ磨きがなされている。

その他櫛描きの波状文や直線文などを施した壺の小片（64．65．67）、ヘラ削りのみられる甕の脚台部（24）、比較的厚手の底部片などがある。

C　古墳時代～奈良時代の土器（図版6、第8図）

杯蓋（25）　天井部は平らで、ヘラ削りは大きく、粗雑である。口縁部との境界には稜線や凹みは見られない。口縁端は丸みをおび、比較的単純に終る。天井部内側にはタタキによる同心円文がみとめられる。口縁部の直径15cmを測る。

（27）比較的ていねいな作りで、口縁端部はやや内傾し、中央にわずかに凹みを有する。天井部部にはカキ目が施されている。天井部中央は欠損しているためつまみを有するものかどうかは不明である。

杯身（26）たちあがりは低く、丸みをおび、内傾している。胎土は砂粒が目立つ。口縁部の小片であるため底部のヘラ削り等については不明である。口縁部での径は約16cmを測る。

短頸壺（28）　丸みのある口縁端を持つ短い頸部がほぼ垂直に立つもので、肩部はよくはっている。体部はナデて仕上げている。最大径11cmと小型のものである。底部は欠失しており不明である。

長頸瓶（29）　長い頸部の上方で外へひらき、段を有する。口縁端はやや外弯するように上方にのびている。胎土は黒い斑点のある灰白色を呈する。器面は自然釉の付着が多い。

杯蓋（31～34）　（31）～（33）はいずれも端部を欠失し、(34）はつまみ部分を欠失している。（31）のつまみはやや退化し平らなものであるが、（32）のそれについては比較的整った宝珠形をしており、かえりを持ったものと思われ、（31）についてもかえりを持つ可能性のあるものと考えられる。（33）については、ほぼ扁平なつまみを有するものである。（34）は比較的うすい器壁を持ち、口縁端はかえりがなく、下方へ折りまげたのみである。

杯（35．36）　直径12cmと小型のもので、作りはていねいにナデて仕上げられている。体部と底部との境界に明確な稜線が入る。高台は外にはり、しっかりしている。

D　平安時代の土器

(1)　井戸（ＳＥ５）出土土器（図版６．７，第９図）

須　恵　器

壺（74）　焼成は良好であるが、胎土中の成分によるものか器壁はあずき色を呈している。底部から比較的高い位置までヘラ削りされている。高台はやや外にはり出し、比較的しっかりしている。

杯（75）　比較的うす手の器壁をもち、短く外反する口縁部を有する。口縁端はやや角ばっている。器表はナデて仕上げられている。底部は欠失しているため不明である。

土　師　器

椀（77～79）　口縁部から丸みをおびたまま底部に達している。口縁部と底部との中間には指ナデによる凹みがめぐっている。口径と深さの比は約４対１であるが、その大きさはまちまちである。

杯A（76．80）　口縁部から体部は丸みをおび椀に近いが、底部はわずかに内弯している。（76）は内側に暗文がみられ、口縁部付近から底部にかけては斜目方向で比較的密であり、底部付近では螺旋状になっている。直径約19cmを測る大型のものである。（80）口径約12cmと小型であり作りはやや粗雑である。

杯B（84～91）　ほぼ平らで、口径に比して比較的大きな底部を有する類で、口縁部と底部との境界には不明確ではあるが稜線を有する。口径は18cmを測る大型のもの、12cmとやや小型のものをのぞいていずれも14cm前後となっている。又（84）（86）（88）など口縁部中位でわずかに外反する例が見られる。

皿（81～83）　短い口縁部と平らな底部との境界に比較的明確な稜線を有する。（81）の口縁部は短く、わずかに外反している。（82)(83）は口縁端でやや内側に丸みをおびて終る。

甕A（92）は外面はほぼ縦方向に、内面は横方向に比較的こまかい刷毛によって調整されている。口縁部は横ナデされ、するどく外反し、端部はわずかに立ち上っている。肩の張りの少ない胴長の体部を有するものと思われる。

甕B（93～97）　口径約18cmほどのもの（93）（97）と15cm前後（94)～(96）とがある。外面はあらい刷毛目が縦方向に見られ、(93)（97）は内面に横方向のこまかい刷毛目が見られた。口縁はやや短く、外反し、横ナデされている。端部は甕Aと同様にわずかに立ち上っている。

(2)　土坑出土土器（図版7，第9図）

杯（98）　ＳＥ５出土の杯Aに類するものと考えられる。調整等は風化がひどく不明である。口径13cm、深さ約2.5cmを計る。ＳＫ６より出土。

皿（99）　ＳＫ７より出土したものである。（99）は大きい底部から丸みをおび、短く上る口縁部を持つ皿である。口径17cm、深さ約１cmを測り器壁は厚手である。

甕（100）　口径28cmを測る。胴長の体部をもつと思われるものの口縁部小片であり、体部外側はこまかい刷毛目が見られ、口縁部は横ナデされ、大きく外反する。端部は上下に丸くふくれて終る。

(3)　その他の平安時代土器（図版７，第９図）

杯（101）　ＳＥ５出土の杯Aに類するもので、口縁部内側には稜線を有し、端部は丸みをもつ。（102）口縁部と底部との境界は丸みをおび、底部は平らではなく、やや下方にふくれている。口縁部は厚みがあり、わずかに角の張る端部を有する。

甕A（103～105，108）　ＳＥ５の甕Aに類するもので形態、手法はほぼ同様である。口径は28cmを測るものから20cmほどのものまで様々である。

甕B(106.107.109)　ＳＥ５出土の甕Bに類するものである。(106）は肩部の張りが非常に少なく、口縁部は端部にかけてうすくなっている。口径14cmと小型である。(107）はやや肩が張り、外側は肩部から底部付近までややあらい刷毛目が見られ、底部はこまかい刷毛で密に調整されている。内側は胴腹部は横方向の刷毛目が見られ、底部はナデ仕上げがなされている。(109）は内側は不明であるが、ほぼ同様のものと思われる。

高杯（110．111）いずれも脚部のみの破片である。(110）は風化がひどく詳細は不明であるが脚柱部は面取りがされており、断面８角形になるものと思われる。大きく外にひらきややうすくなって脚端部に至る。(111）は刷毛様のもので縦方向になでられて、わずかに面に近いものを感じられるが、ほぼ断面円形である。脚柱部の小片であるため、脚端部など全体の形状については不明である。

E　鎌倉時代の土器

(1)　井戸（ＳＥ10）出土の土器（図版９，第10図）

鍋Ａ（115～119）短い口縁部と口径に比して浅く、丸底の鍋である。口径は小さいもので23cm、大きいもので36cmと様々である。口縁端部は非常に特徴的で、内側に折り曲げ、波状の段を形成する。体部上半は刷毛目が見られ下半部と内面下半部はヘラ削りをしている。胎土は砂粒を多く含む。外面は厚く煤の付着が見られる。

羽釜（120）　口縁部のやや下に巾約３cmの鍔をめぐらせたもので、鍔はわずかに上向きである。口縁端は段を形成してほぼ内側にのびる。口縁端と鍔との間には横方向の刷毛目があり、体部も斜め方向に刷毛目が見られる。底部はヘラ削りされている。

(2)　ＳＫ11出土の土器（第８，10図）

杯（50）　口径11cmを測る杯で、全体に丸みをおび、口縁部は稜線を有する。

鍋Ａ（121）口縁部の小片である。器壁は比較的厚く、口縁部はゆるやかに外反する。端部の折り返しは短かく丸みをもつ。肩はよく張り外側は縦方向、内側は横方向の刷毛目が見られる。胎土は砂粒を多く含む。

(3)　ＳＤ13出土の土器（第10図）

鍋Ｂ（122）体部は丸みをおびているが胴の張りが少なく、下半部のヘラ削りは斜方向に削っている。

(4)　その他の土器（図版８．９，第８．10．11図）

鍋Ａ（112～114）　器壁が厚く、口縁部の折り返しの短いものである。

（112）　頸部のくびれがゆるやかで、比較的細長い体部を有するものと思われる。口縁部はていねいに横ナデされているが、肩部には指による圧痕が見られ、体部全体に凹凸がひどく作りは粗雑である。煤の付着は見られない。

（113）技法的には（112）と類似しているが、体部はほぼ球形に近いものである。体部上半は凹凸がひどいが、下半部はヘラ削りが見られる。

（114）短かく折り返した端部と、ゆるく外弯する口縁部を有し、肩が張り、明確ではないが肩部に稜線を有する。胎土は砂粒を多く含み、体部は風化のため不明確であるが、手づくねのままである。煤の付着は見られる。

鍋Ｂ（123～127）　形態はＳＥ10出土の鍋とほぼ同様である。大きさは口径46cmから29cmまで様々である。口縁部はほぼ直線的なものと、中位に稜線を有するものとがあり、端部の折り返しも短く厚手のものと、うすく波状になるものとがある。胎土はいずれも砂粒を多く含み、煤の付着していないもの（127）が１例見られる。

鍋Ｃ（128．129）　口縁部は鍋Ｂと同様であるが胴の張りがなく、浅い円筒状の体部を有するものである。外側胴部には刷毛目が見られ、底部はヘラ削りがなされている。胎土は砂粒を多く

含む。

鍋D（136～138）　体部は鍋Bとほぼ同様の形態を有するものである。口縁端の折り返しは上方がやや内側に向って立ち上り断面三角形となっている。胎土は精良で、砂粒をあまり含まない。

羽釜（130～134）　大きさは口径34cmから20cmと様々である。口縁端部は内側にのびて巾 1.5～2cmの平面をめぐらせている。(131）の1例は端部で内外に肥厚させたのみである。

壺（135）　口縁部の小片であるが、ほぼ球形に近いと思われる体部に、やや内傾した口縁部の付くものである。肩部には比較的こまかい刷毛目が見られる。口径約14cmを測り、胎土は鍋Dと類似し、砂粒は少ない。

甕（139～141．145）（139）は肩の張りは比較的高位置にあり胴長の甕で口頸部を欠失している。肩部にはヘラ描きによる蓮弁文が施されており、腹部はあらい刷毛目様の調整がなされている。最大径は38cmを測り、高さは約46cmほどになるものと思われる。渥美窯の製品であり、平安時代末～鎌倉時代初頭のものと考えられる。

（140）　大きく張る肩部を有し、頸部はほぼ垂直に立ち、短く外反する口縁部を有する常滑焼のものである。肩部には2個1対の粘土紐を貼り付けた耳を有する。最大径40cm、高さ約39cmを測る。

（145）肩の張りは比較的なだらかで、口縁部はわずかに外反して立ち上る。肩部に3個の押印文様が見られる。焼成はやや不良である。最大径36cm ,復原高37cmを測る。

（144）最大径22cm、高さ17cmを測る小型のもので、底面が広く安定している。胴部の張りは大きくないが、ややするどく、口縁部の折り返しは上下に突出している。鎌倉時代中葉に属するものかとも思われる。

（146）口径28cm、深さ8cmを測るねり鉢で、口縁部はナデ仕上げされているが、体部は凹凸が目立つ。内面は使用による摩耗が進み非常に滑らかである。

山茶椀（37～40）　37．38は比較的高く、しっかりした高台を有し、杯部は直線的である。

39．40は高台が低く退化し、糸切痕を有し底部から杯部にかけてゆるやかに湾曲する。（39）はＳＥ10）から出土したものである。

F　室町時代の遺物（図版6，第8．11図）

椀（41～43）　41は糸切り底に高台を貼り付けたもので、体部は丸みをおび、口縁端はわずかに外反する。内面及び外面上半は緑色の灰釉が施されている。

42は貼り付けと思われる安定した高台を有し、器壁は比較的厚い。内面と外面上半に灰釉が施されている。

43は削り出し高台の底部破片である。内面のみ灰釉が見られる。

小皿（45～48）　いずれも口径10cm前後のもので、口縁部には灰釉が施されている。底部はいずれも糸切りである。(45）は内面底部にヘラによって格子状の刻み目を施している。

片口（49）　短く外反し、端部がわずかに立ち上る口縁部を有するもので、片口で中空のとってを１個有する。焼成過のためか表面の灰釉はボロボロになっている。

土師器皿（51．52）　手づくねで小型の皿である。

51は器壁は厚手で、不整形である。口縁部のやや下に爪で押えた痕跡が見られる。

52は非常にうす手のものである。口径 7.5cmを測る底部に指先で押えた跡が見られる。

甕（142．143）　142は、口径40cmを測る常滑焼の口縁部である。口縁部の折り返しは退化した様相を示す。焼成は不良で黄白色を呈している。

143は、口径22cmを測る口縁部片で、折り返しは退化がはなはだしく、ほとんど肥厚させたのみである。焼成は良好である。

折口深皿（147～151）　径約30cm前後のもので、口縁部は外側へのび１～２cmの平面をめぐらせている。（147）は胎土中に砂粒を多く含み、上半部は横ナデされており、施釉は見られない。内面下半は使用によるものか摩耗が見られる。（148～151）は上半部に施釉が見られる。

G　その他の遺物（図版７，第８図）

椀（44）　口径約10cmを測る。糸切りで厚い底部を有するもので、上半部は内外面共鉄釉が施されている。桃山時代のものであろう。

土錘（69～73）　いずれも黒色土中から出土したもので、時期は不明である。大きさは、長さ６cm、直径４cmのものから、長さ3.5cm、直径0.7cmのものまで様々である。

砥石（152．153）　土錘と同様黒色土中より出土し、頁岩製であるが時期は不明である。よく使用されており、石質から考え鉄製品に使用したものと思われる。

５．結　　語

今回の大藪遺跡の調査は南勢バイパスという限られた範囲の中での調査であり、その調査区域の中でも天地返しなどの攪乱のため一層不明確なものとなった。出土遺物は縄文早期から鎌倉時代、室町時代に至る多様な土器が出土したにもかかわらず、遺構ではこれらの遺物に即応するだけのものは検出し得なかった。以下不十分ではあるが、今回の調査の結果によるいくつかの私見を述べて結語としたい。

まず縄文時代について考えてみると、宮川流域には古くから縄文時代の遺跡が知られており、その数は20ヶ所に近い。しかしながらそれらはすべて当遺跡からはるか上流に位置し、最も下流に位置する佐八（そうち）遺跡までが約６kmと距たっており、当遺跡の周辺では全く知られていなかった。今回発見された縄文式土器は遺構との関連を持つものではなく、又少量の破片ではあるが、早期に属するものである押型文土器と、晩期のものである条痕文土器であるところから、これら両期を含め縄文時代各時期の遺跡がこの付近に存在することが十分に考えられ、弥生前期の土器の存在することを考え合わせ、縄文文化から弥生文化への移行の問題、条痕文土器と遠賀川式土器と

の関連等様々の問題を蔵した地域であるといえよう。

次に弥生時代前期についても、縄文式土器と同様に、遺構に伴うものは見られなかった。

遠賀川式土器の伝播ルートについては、鈴鹿市上箕田遺跡の報文をふまえ、一志郡三雲村中ノ庄遺跡調査報告において、中ノ庄遺跡を中心とした地域を、北進・東進の分岐点としてとらえられており、鳥羽市答志島おばたけ遺跡においても第Ⅰ様式新段階の土器片が見られることなどから、当遺跡が東進ルート上の一点であるといえよう。

又、弥生後期方形周溝墓については、県下におけるほぼ同時期のものとして金剛坂遺跡のものが知られている。中期前半以后各時期のものを含むが、方向性のまちまちな点、部分的に切り合っている点などで当遺跡のそれと類似した在り方を示すものである。このような在り方は、鈴鹿市東庄内Ｂ遺跡などにおいて見られるような、一溝を接するか又は共有するといった計画的・継続的な築造形態とは異るものである。伊藤禎樹氏はこのような部分的に切り合ったり、重複した在り方について意識的なものとして推定されている。今回の調査ではなおその意識性の当否は不明であるが、東大阪市瓜生堂遺跡の調査例によって方形台状部の盛土の存在の可能性がより強くなり、当遺跡の例も又他の多くと同様埋葬施設の無いことなどから、これらについても盛土の存在が十分に考えられる。又各周溝墓間にさほど長期の時期差の考えられないことから、後者の築造に際して前者はなお盛土を遺存しているものと思われ、それにもかかわらず部分的切り合いが行なわれていることは世帯共同体の連続性の墓制面での現出がうすれ、周溝墓を築造するといった墓制の形骸化を示すものであろうか。

次に平安時代については、井戸から出土した土器について平安時代前期に位置付けられるものと思われるが、それらのうちの杯、皿類について見ると、いずれも口縁部付近のみがナデによる整形がなされ、底部は不調整のものばかりであり、短時期に集中したものであると思われる。

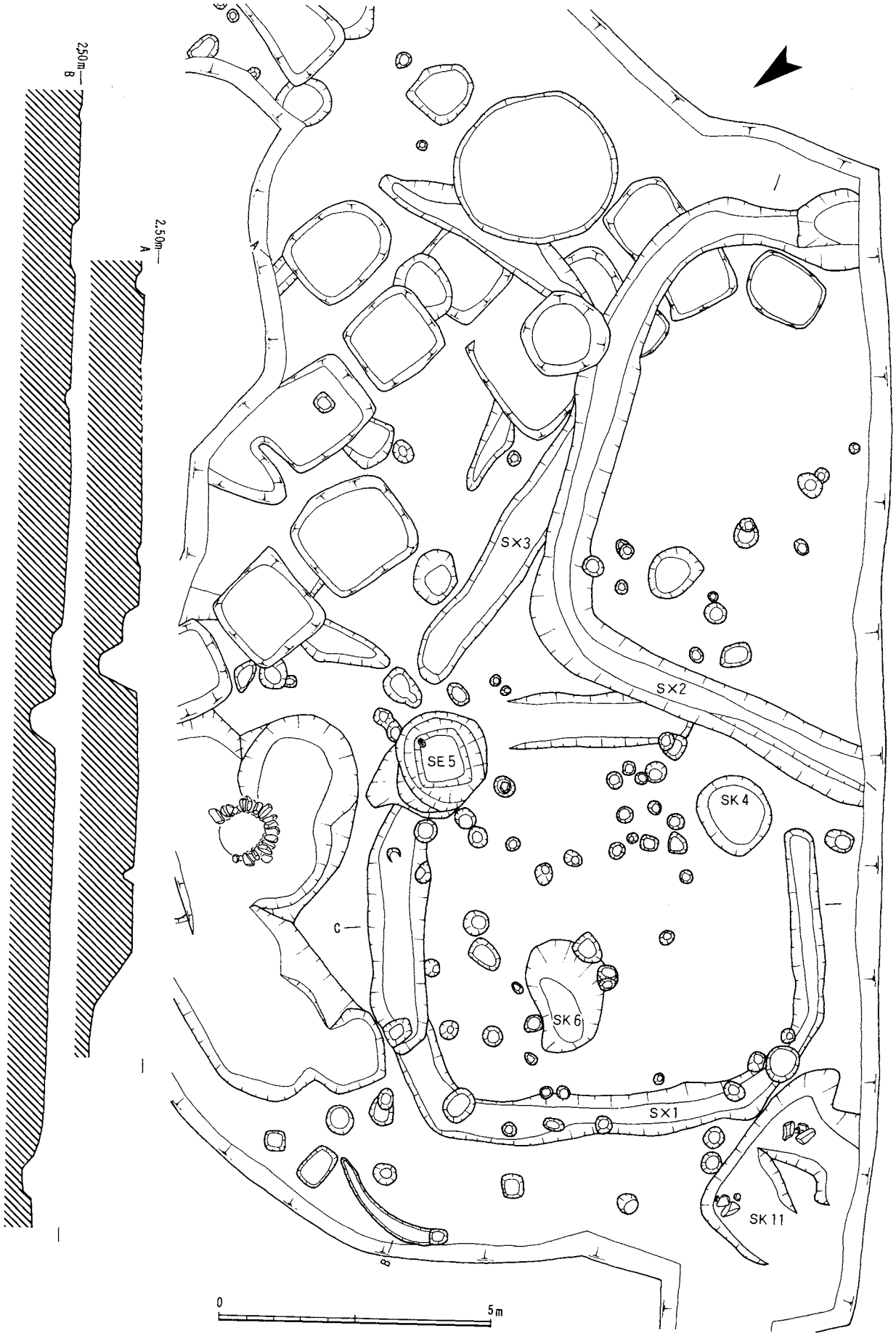
鎌倉・室町時代については、柱穴群の大半がこの時期に属すが、いずれも不明確なものであり、比較的小規模の集落であったかと思われる。又遺物についてはその中心的存在である鍋は、時期的にはＡ→Ｂ・Ｃ→Ｄといった変遷をたどるものと思われ、煤の付着状態等から口縁部の折り返し部分の内側に入る木蓋を有して使用されたものと考えられる。

参　考　文　献

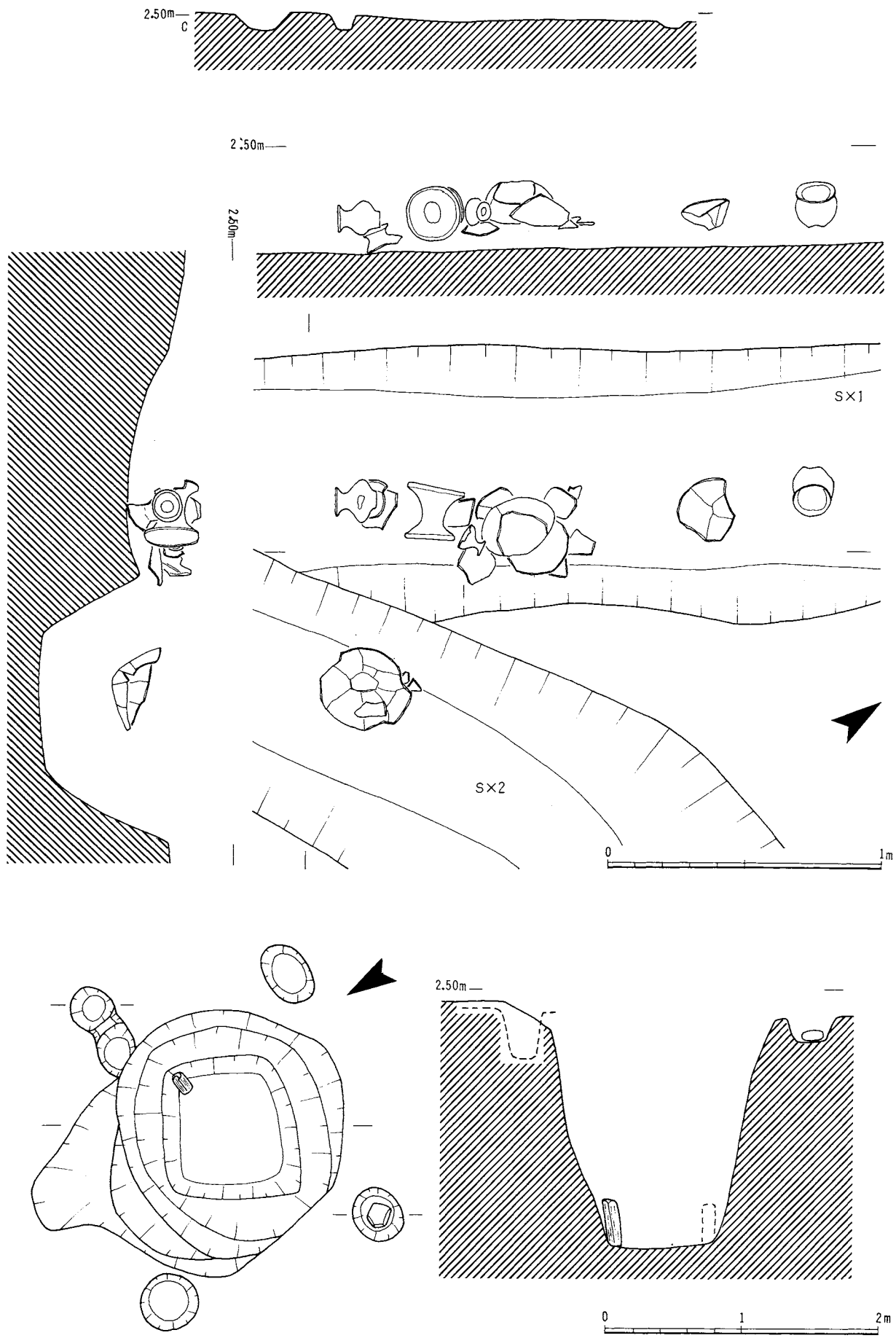
- 『歩跡』第２号　皇学館大学考古学研究会　1972
- 井上光夫「一色山遺跡」(『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会)　1970
- 谷本鋭次「東庄内Ａ遺跡」(『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会)　1970
- 仲見秀雄、真田幸成、大場範久『上箕田』鈴鹿市教育委員会　1967
- 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1972
- 下村登良男、村上喜雄『おばたけ遺跡発掘調査報告』鳥羽市教育委員会　1972
- 山沢義貴、谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会　1971
- 小玉道明、山沢義貴、谷本鋭次「東庄内Ｂ遺跡」(『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　三重県教育委員会) 1970
- 伊藤禎樹「伊勢湾周辺の弥生時代の墓制」(『信濃』第25巻第１号) 1973
- 田代克己他『瓜生堂遺跡』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会　1971
- 都出比呂志「農業共同体と首長権」(『講座日本史』１　東京大学出版会) 1971

SD 15
SD 14
SD 12
SD 13
SB 9
SK 8
SB 16
SK 7
SE 10
SX2
SX3
SE 5
SX1
SK 4
SK 6
SK 11
0
5
10m

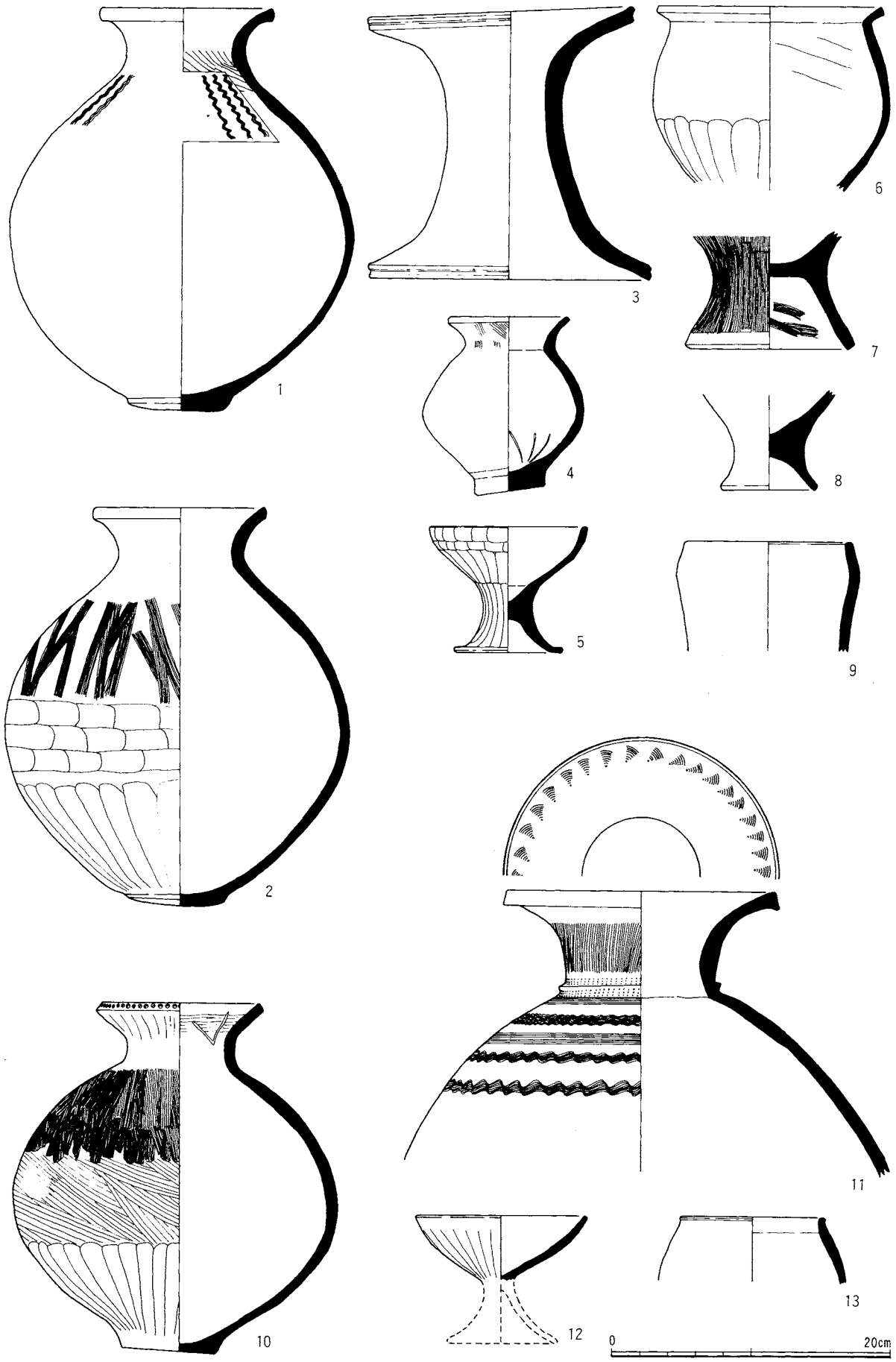
第4図 遺構平面図



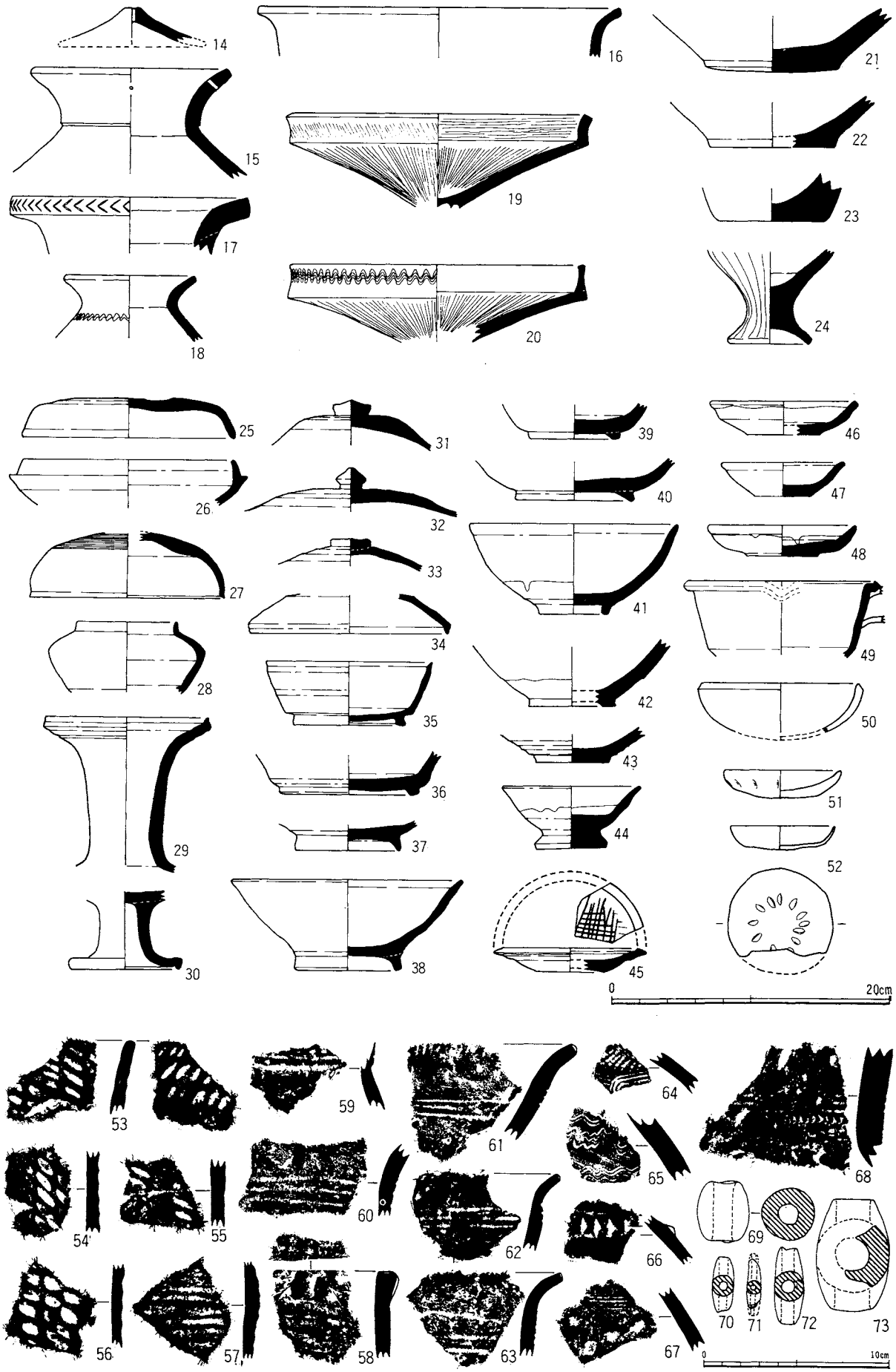
第5図　ＳＸ１・２・３実測図



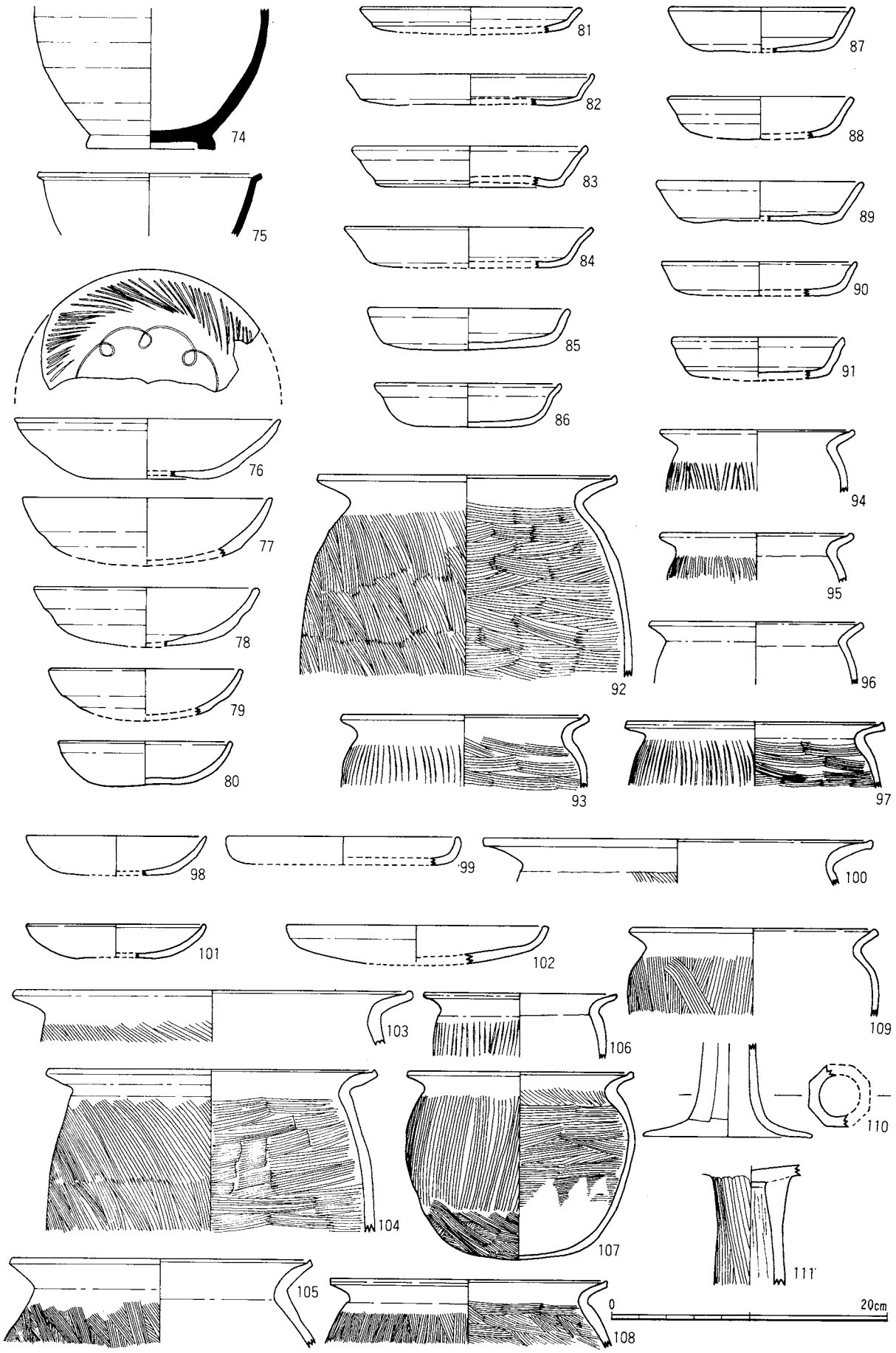
第６図　ＳＸ１・２土器出土状態、ＳＥ５実測図



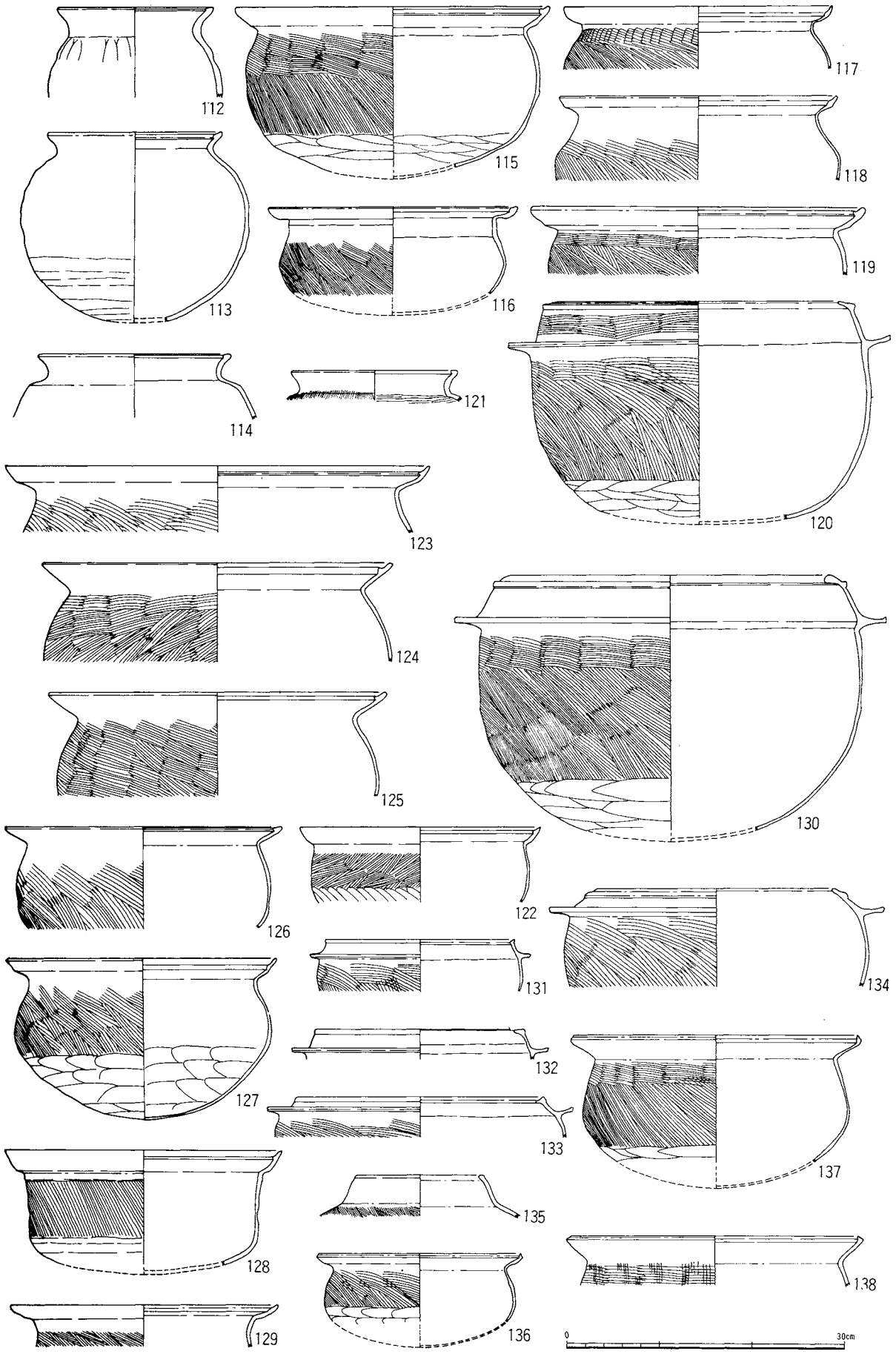
第７図　ＳＸＩ・２出土土器実測図



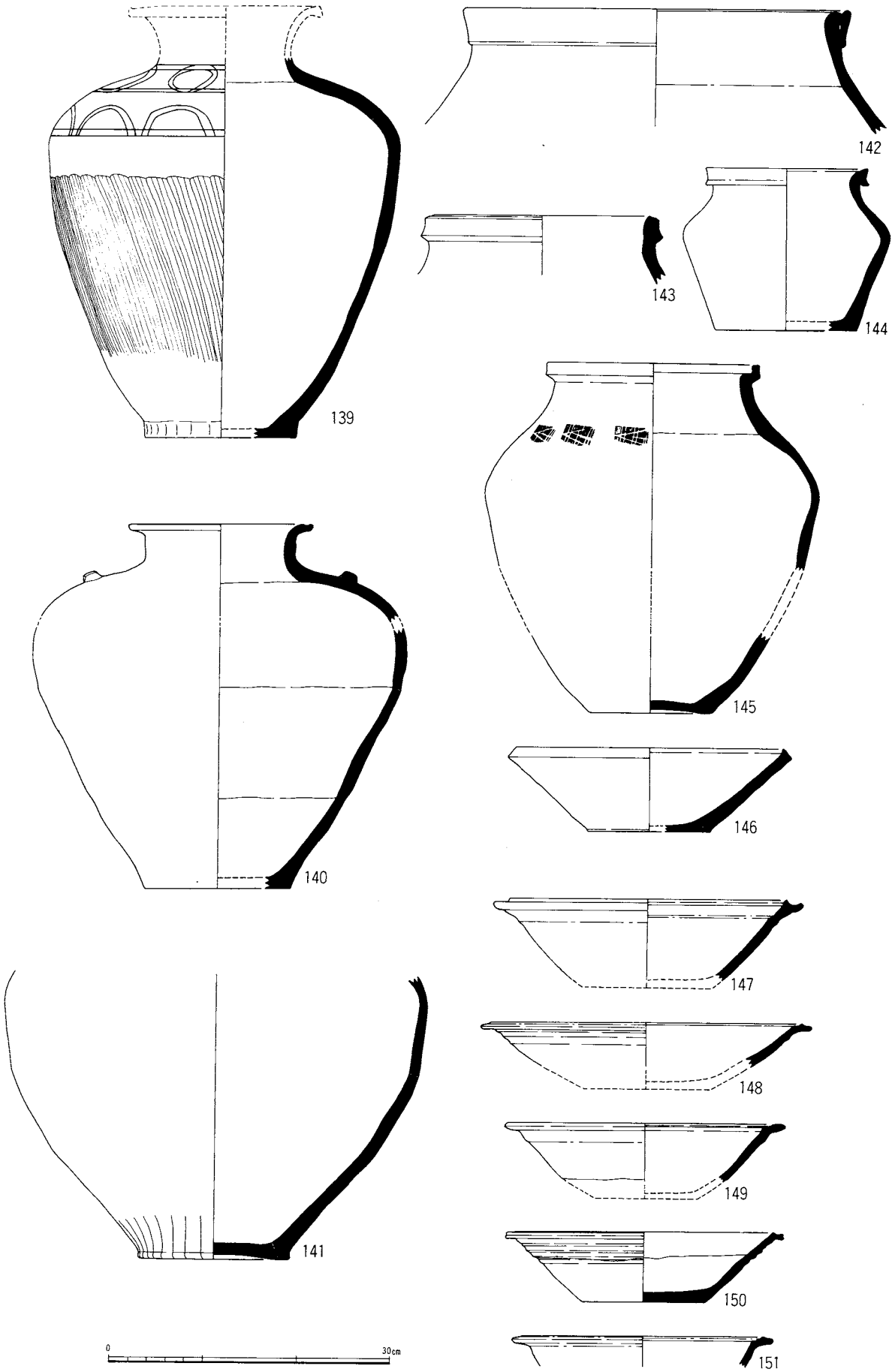
第8図　包含層出土土器実測図、拓影



第 9 図　平安時代土器実測図



第10図　鎌倉・室町時代土器実測図



第11図　鎌倉・室町時代土器実測図

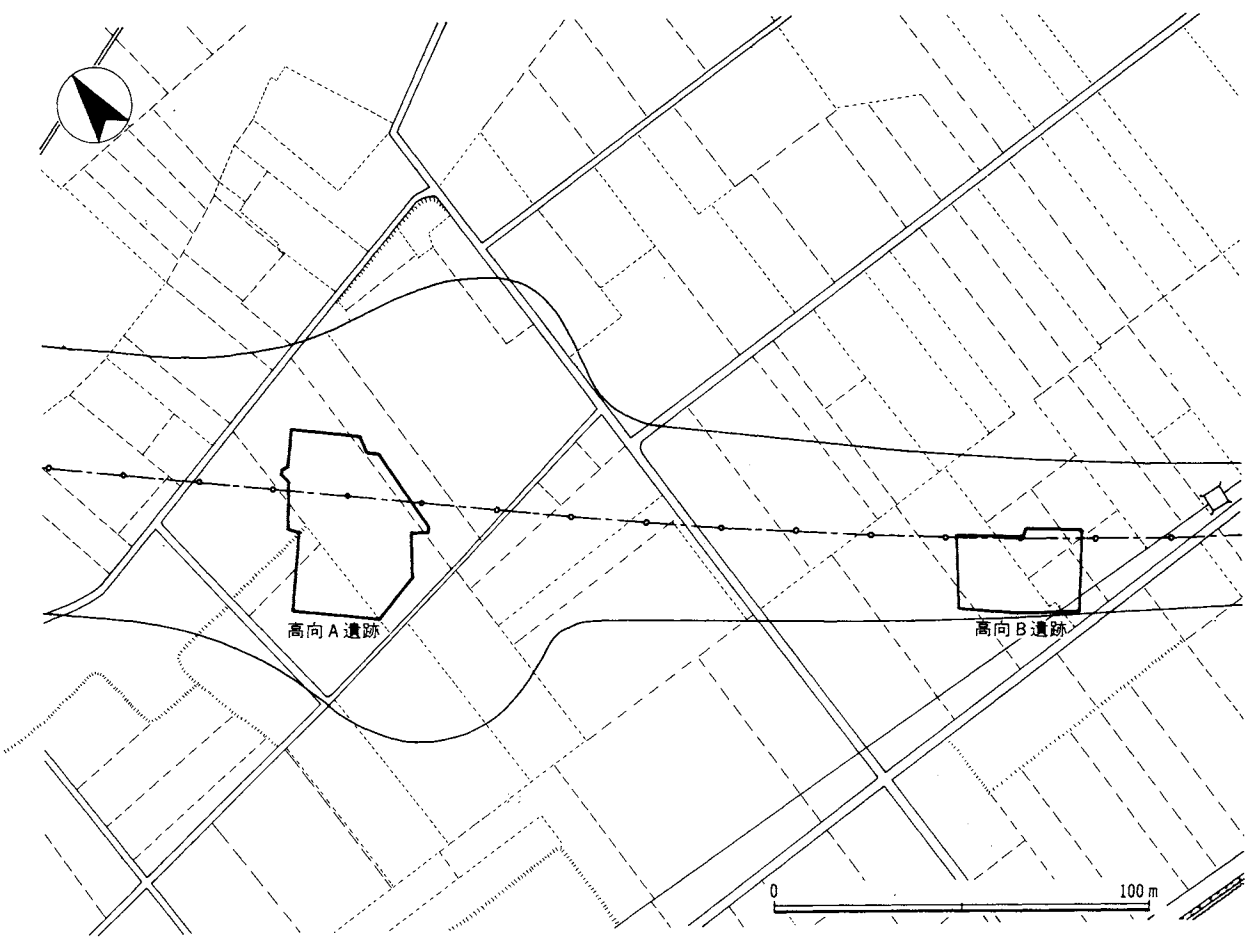
V　高向A遺跡

1．調査の経過

高向A遺跡は、三重県度会郡御薗村大字高向にある奈良時代から室町時代にかけての集落址である。調査は、バイパスのセンターライン杭を測量基準点とし、先ず長さ８ｍ、幅２ｍのトレンチを各所に設定した。次いで試掘調査の結果に基いて調査範囲を設定し、調査の進捗に伴ないできる限り拡張した。試掘調査の結果、Ａ・Ｂ・Ｃ三遺跡ともに地表下１ｍまでは無遺物層であることを確認したので、ブルドーザーを導入し地表下約80cmまでを除去することにした。調査期間は、昭和48年１月から３月までである。

2．位置と地形

高向A遺跡は、高向集落の北方と宮川右岸の堤防とのほぼ中間部に位置する。現在は大半が畑地であるが、西から東へゆるやかに傾斜し、北と南へも傾斜するほぼ中央部の微高地で、旧宮川



第12図　高向A遺跡・立地と発掘区

が形成した段丘上にあたり海抜約３ｍを測る。行政的には度会郡御薗村大字高向字上万條145～～154に属する。調査地域は、南勢バイパス御薗インターチェンジのほぼ中央部で、分布調査では地表に多量の中世土器が散在していた場所である。バイパスのセンターラインNo.62～No.64の間、南北約50ｍ、東西約40ｍの地域で、面積約2,000m²である。なお、調査地域の北側へ遺構が延長することを確認したが、水田として一段低く拓かれているため既に遺構は攪乱されていた。

層位は、第１層表土（約15cm）、第２層シルト混りの灰褐色砂質土（約80～90cm）、第３層シルト混り茶褐色粘質土（約20～30cm）、第４層灰褐色砂質土で地山である。第２層までは無遺物層で、宮川の氾濫による堆積層である。第３層は全体に細い炭化物が混る遺物包含層で、乾燥すると非常に固くしまる土層である。

遺構は第３層の下方で検出したが、時期の異なる遺構が近接していても層位を識別することは困難であった。

３．遺　　構

遺構は、奈良時代竪穴住居址２、平安時代掘立柱建物址、同土坑３、同溝１、鎌倉～室町時代井戸２、同土坑のほか、時期不明の柱穴、ピットなど多数を検出した。

A　奈良時代の遺構

(1)　竪穴住居址（図版11，第16．19図）

ＳＢ101　東西3.7ｍ、南北3.5ｍのほぼ正方形で、掘り方は約30cmを測る。床面は平坦で、柱穴は床面にも掘り方外側にもみられない。東辺の南寄りの部分に、東西0.8ｍ、南北0.6ｍのカマドが作り出されている。カマドには、炭化物が薄く層をなしてのこり、中央部に細長い河原石を支柱として立てている。遺物は、土師器、須恵器がカマド内に一括して出土したほか、床面上に若干出土している。なお、床面中央部と東北隅、北西隅部に掘立柱倉庫址（ＳＢ109･110･111)の柱穴が後で切りこまれている。

ＳＢ102　ＳＢ101の西辺の北方延長上に東辺を置くもので、東西2.2ｍ、南北3.0ｍ、掘り方約15cmを測る。柱穴は、床面にも掘り方外側にもみられない。東辺の南寄りの部分に、東西0.9ｍ・南北0.8ｍのカマドを作り出している。遺物は、カマド内に土師器小片が若干出土したのみである。

B　平安時代の遺構

(1)　掘立柱建物址（図版10～12，第16．19図）

高向Ａ遺跡で最も多く検出された遺構で、方形の倉庫址以外は、柱間４間×３間、４間×２間、３間×２間の規模である。相互の柱穴の重複関係から若干の時間幅があるが、柱穴内出土の土師器小片から、ほぼ平安時代に営まれたものであることを確認した。

ＳＢ103　調査地域北端に位置し、東西棟４間(6.5ｍ）×３間（4.6ｍ）の建物である。北側梁

名称 (SB)	規模 (間)	桁行 (m)	梁行 (m)	棟方向	柱間寸法(m)		備考
					桁行	梁行	
103	4×3	6.5	4.6	N78°W	1.6	1.5	
104	4×3	6.8	5.0	N81°W	1.7	1.65	SB105と重複(古)
105	4×2	7.8	4.5	N86°W	1.95	2.25	SB104と重複(新)
106	3×2	4.8	3.8	N1°E	1.55	1.9	SB107と重複
107	3×2	4.6	3.8	N1°W	2.2	1.9	SB106と重複
108	(2)×3	(4.5)	5.0	N5°W	2.15	1.6	
109	2×2	3.8	2.8	N3°E	1.9	1.4	束柱あり
110	2×2	2.75	2.4	N7°W	1.35	1.18	束柱あり
111	2×2	3.6	3.25	N9°W	1.8	1.6	束柱なし

第2表　高向A遺跡・掘立柱建物址の規模（　）は以上

行の柱列は、北側の田圃下にあるため未検出である。柱穴をほぼ確認しえた唯一の建物であるが、柱穴は方約70cmで、掘り方は長方形のものが多い。なお、南側桁行の南方に東西約5m、南北1.4×3.2m、深さ約10cmの細長い土坑状の掘り込みを検出したが、建物址に附属する施設と思われ、この建物が南面していたことを推定せしめる。

SB104　SB103の南側桁行の東方延長上に北側桁行を置くもので、東西棟4間（6.8m）×3間(5.0m）の建物である。柱穴は、方80cm、深さ40cmである。南側に接するSB105との柱穴の重複関係からSB105より古いことを確認した。

SB105　北側桁行の一部がSB104と重複するもので、東西棟4間（7.8m）×2間（4.5m）の建物である。柱穴は方80cm、深さ60cmで、高向A遺跡で最大の規模をもっている。

SB106　SB101の南西部に位置し、南北棟3間（4.8m）×2間（3.8m）の建物である。東南部隅柱は室町時代のSK120に切られているが、SD112を切って建てられており、柱穴は方70cm、深さ35cmである。

SB107　SB106に重複するもので、南北棟3間（4.6m）×2間（3.8m）の建物である。東側の南第2柱穴はSK120に切られている。SD112を切って建てられているが、SB106との先後関係は明らかでない。柱穴は、方80cm、深さ25cmである。

SB108　SB106の西側に位置し、北西部は未掘であるが南北棟2間以上（4.5m以上)×3間（5.0m）の建物で、柱穴は方70cm、深さ30cmである。

SB109　SB101の北辺を切り、2間（3.8m）×2間（2.8m）の建物で、柱穴は方60cm、深さ40cmである。南北側柱列は等間ではないが、桁行に通る東柱のうち、北側寄りの柱穴が短い方の桁行と等間で、残る束柱は長い方の桁行柱間のほぼ半分の長さである。倉庫址であろう。

SB110　SB109と重複する倉庫址で、北西部隅柱は不明である。南北棟（2.75）×2間(2.4

m）で、中央に束柱をもち、柱穴は方60cm、深さ40cmである。

この地域は、他の掘立柱建物にくらべてやゝ小規模の柱穴が集中し、２回以上倉庫が継続的に建てられたと思われる。

ＳＢ111　ＳＢ101を切るもので、東西棟２間（3.6m）×２間（3.25）の倉庫址であるが、中央の束柱はない。柱穴は方60cm、深さ30cmである。

(2)　溝　　址（図版12，第16図）

ＳＤ112　掘立柱建物ＳＢ106.107に切られている小溝で、幅70cm、深さ10cmあり、北方都はやや西へ蛇行しながら続くと思われ、南端はＳＢ107の南で終っている。埋没土は、包含層と同じ茶褐色粘質上で、滞水の痕跡はなく、平安時代の土師器小片が出土したのみである。

(2)　土　　坑（図版12，第16図）

ＳＫ113・114・115いずれも不整形の土坑で、調査地域の南部に片寄って検出された。ＳＫ114が最大で、東西2.3m、南北2.2mの楕円形を呈し深さ35cmで底面は平坦である。埋没土は茶褐色砂質土で、やゝ炭化物の量が多いが、焼面はない。遺物は、土師器、須恵器が少量出土した。

Ｃ　鎌倉・室町時代の遺構

この時代の遺構には、土坑、井戸のほか、直径約20cmの扁平な河原石が調査地域の南半部に散在している。河原石は、小規模な建物などの根石とも思われるが、企画性は認められない。土坑と井戸は南半部に片寄るが、東側と西側に偏在する。

(1)　井　　戸（図版12，第16．19図）

ＳＥ122　東側にある素掘りの井戸で、直径4.2mの円形で深さ2.5mを測り、壁面が急傾斜な大型の井戸である。廃棄後に土器類、礫などが多量に投棄してあり、内部構造や上部施設は不明である。

ＳＥ123　西側にある石組式の井戸である。外側の掘り方は直径３mの楕円形で、石組のため一辺約1.2mの方形掘り方を掘るが、深さは1.4mまでを確認したのみである。石組は一部崩落しているるが、上部に大石を組み、八段目まで残存している。やゝ内側へ傾斜をもつが、胴膨れか否かは湧水が激しいため確認しえなかった。

(2)　土　　坑（図版12，第16図）

大小の土坑が散在するが、遺物整理の段階で明確に時期が判明したもののみを取上げる。

ＳＫ116　直径2.20mの楕円形で、深さ1.35m、壁面の周囲が焼けて固くしまり、底面は中央部がやゝ深い。坑内に多量の木炭を含み、粗製土師質甕(鍋)、山茶椀のほか、鉄滓５個が出土した。

ＳＫ121　直径2.8m×1.5m、深さ30cmの楕円形で底面は平坦である。

ＳＫ120　ＳＫ121の北に接するもので、直径3.5m×2.7m、深さ60cmの楕円形で、底面は平坦である。

ＳＫ117　調査地域の南端にあり、直径1.2m、深さ30cmの楕円形で、底面は平坦である。

ＳＫ118　ＳＥ122の南3.5mにあり、直径3.9m×3.8mの不正形で、深さ20cm、西側の上辺と南部の上面に河原石が散在する。

ＳＫ119　ＳＥ122の西2.5mにあり、直径3.7m×３m、深さ40cmの楕円形である。

4．遺　　物

遺物には、奈良時代・平安時代・鎌倉時代～室町時代のものがある。平箱約120箱のうち約８割が包含層出土で、鎌倉～室町時代に属する。土器には、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶椀・山皿・常滑・古瀬戸・青磁・白磁があり、その他土錘・砥石・鉄剣・鎹・銅鏡がある。

A　奈良時代の遺物

(1)　ＳＢ101出土遺物（図版11．18，第20図）

東辺のカマド址からまとまって出土している。土師器には、杯・椀・蓋・皿・甕・高杯・竈があり、須恵器には甕がある。

土　師　器

杯ＡⅡ(8)　口径16.2cm、高さ3.2cm、口縁部が開いた器形で、磨滅しているが、口縁部内外面を横なでし、底部は指おさえのあとなでつけている。やゝ厚手で、胎土は精良である。

椀ＢⅠ(4)　口径13cm、高さ2.2cm、口縁部がゆるやかに外弯する器形で、口縁部内外面は横なでし、底部外面は不調整のままで、内面はなでつけている。灰白色を呈し、やゝ厚手で胎土に砂粒を多く含む。

蓋Ａ(10)　上面中央をわずかにふくらませたつまみのつく頂部から、丸味を帯びて縁部に続く器形で、縁端部は欠失する。つまみ上面は、中央を横に細くヘラみがきし、さらに周縁にそって丸くみがく。縁部は、つまみを中心にして細いヘラみがきを５度連続させ、縁部も右まわりでていねいにみがく。内面は指なでのままで、胎土は精良である。

皿ＡⅢ（６、７）　口径21～20cm、高さ3.4～2.8cm、やゝ厚手で口縁部がゆるやかに立上り、端部を丸くつくる。磨滅しているが、口縁部内外面は横なでし、底部はヘラ削りする。胎土精良。

皿ＡⅣ(9)　口径17cm、高さ2.4cm、やや小形の浅い器形で、なだらかに立上る底部から口縁部に続き端部を丸くつくる。口縁部内外面を横なでするが、内面のなで幅がひろい。底部外面は、口縁部との境目に指おさえ痕跡があり、他は中央を横位でていねいにヘラ削りし、その周囲を円周に沿ってヘラ削りする。内底面は、横なでの上を二段の螺旋状暗文をつけるが、図示しえない。

高杯Ａ(5)　脚径12cm、筒部はヘラで９角形に面取りし、全体に磨滅しているので調整は不明である。

甕ＡⅡ(11)　口径20cmの口縁部破片である。口縁部は短く外反し横になでつけ、丸い体部の内外面は刷毛目をつけ、内面の刷毛目は断面を見透して右から左へ向う。口縁部外面は明橙褐色であ

るが、全体に灰色で砂粒を多く含み、付煤している。

甕BII(2)　口径27cmの大型甕で、短く外反する口縁部に中膨れの長い体部をもつ。口縁端部は角状で稜をつくり、内面の端部はわずかに立上る。巻上げの痕跡があり、口縁部内外面は横なで、体部外面の細い刷毛目は斜目の刷毛目が後でつけている。内面は、体部を縦に、頸部直下は横にヘラ状工具でカキ取るように削っている。

鍋AII(1)　口径24cm、口縁部が外反し端部は角状をなし、体部がやゝ深く、把手をつけた器形である。

磨滅しているが、内外面に細い刷毛目がつく。胎土に細い砂粒を含み、灰褐色を呈する。

竈(3)　口径21.5cm、高さ35.7cm、巻上げ技法による截頭砲弾形の円筒の側面を大きく切取り、その周囲に幅広の庇を取りつけ、両側面のやゝ手前に角状の把手をつけた器形である。上部の平坦面と、上部の屈曲部の下方、庇の端部内外面は横なでするが、他は粗い刷毛目をつける。焚口の側端部と裾部の下端部は、粗くヘラ削りする。胎土は細い砂粒を含む精良土で、灰褐色を呈し、内面と庇の外面に煤がわずかに付着している。

須　恵　器

甕（338）　カマド内の中央東端部の焼土上面に水平に置かれていたもので、底径40cmに近い底部の大形破片である。内面は、成形時の粘土紐巻上げのツギ目を円周に沿って指でおさえ、その上をろくろか回転台によって横なでする。外底面はやゝくぼんでおり、焼成時の固定台の痕跡と思われる直径25cmの円い色の変化がみられる。外底面には、大きな木葉５～６枚の痕跡があるが、乾燥時に置いた木製台上に敷かれていたものである。木葉は、落葉樹のカシワである（三重大学農学部　矢頭献一教授の御教示による。）須恵器生産時の季節を窺う上で貴重な類例である。

B　平安時代の遺物

掘立柱建物の柱穴出土土器は小片のみで、土坑と包含層出土土器が少量あるにすぎない。

(1)　ＳＫ114出土遺物（第20図）

土師器は甕と皿がある。甕ＣII(13)は、口縁端部が丸くおわり、細い刷毛目を体部内外面につける。皿ＡIII(15)は、口径17cm、高さ2.6cmで、口縁部内外面を横なでし、底部は不調整である。須恵器は杯ＢII(16)のみで、底部外面をろくろ右まわりでヘラ削りする。

(2)　包含層出土遺物（図版19，第20．21図）

土師器は甕と杯がある。甕ＣII(14)は、やゝ大形で口縁端部がわずかに立上る。体部はやゝ粗い刷毛目をつけ、底部内外面をヘラ削りする。杯Ｂ(12)は、掘立柱周辺部で出土が多い。

須恵器は、甕Ａ(28)、杯ＢＩ(23)、壺（24，26）、盤(25)があり、奈良時代のものもここにまとめた。

C　鎌倉・室町時代の遺物

土坑、井戸と包含層出土の遺物がある。なかでも、土坑出土の土師質鍋は、精粗二様があり、

しかも包含層から多量に出土しているため形式的に把握しやすく、山茶椀を伴出するものとしないものとに分類でき、時期差を明瞭に認めうるものである。

(1) ＳＫ116出土遺物（図版19，第21図）

粗製土師質鍋（27～29、39）口径17～32cm、大小二種類がある。外反する口縁部を内側に折返しておさえが内側に小さな段がつくのが特徴的である。頸部はく字状のものが大半で、体部は最大幅が高さの半分位にあり、やゝ扁平な球形につくられる。胎土に粗砂が多く含まれ、体部外面は粗い刷毛目の上をヘラ削りし、内面下半部もヘラ削りして器壁を薄く仕上げる。外面全体に厚く付煤している。（大藪遺跡出土――鍋Ｂ）

山茶椀（31～37） 口径約16cm、高さ約６cm、口縁端部を外反気味に丸くおわらせた器形が多く、糸切り底に小さな貼り付高台をもつ。高台のないものや、高台にモミ痕をのこすものもある。約60個出土のうち、胎土、色調などの異なるものもあるが、渥美半島で生産されたものである。

羽釜(38) 口径20.4cm、高さ約11cm、口頸部が直接的にやゝ内反し、上端面を平坦につくるもので、短い鍔をもつ。体部下半から底部にかけてていねいにヘラ削りし、内面も鍔の内側から底面にかけて粗くヘラ削りする。胎土に粗砂・小石を多く含む。

練鉢(30) 口径34cm、高さ11.5cm、行基焼の練鉢で、梯形の低い高台がつき、片口がつくものと思われる。底部以外は水びき成形で、体部下半の凹凸をヘラ削りする。内面は使用のため滑らかである。

土師器皿（40、41） 口径約８cm、高さ約1.8cm、口縁部の外側を直立気味に指なでしたもので、山皿の形状に近い。底部が内へくぼんだものもあるが、全体に胎土に粗砂、小石を含むものが目立つ。

(2) ＳＫ117出土遺物（第22図）

粗製土師質鍋（59） 口径27cm、口縁端部を内折するが、断面は梯形に近い。体部は粗い刷毛なでのあと、下底部を粗くヘラ削りし内面下半もヘラ削りする。外面に厚く煤がつくが頸部直下約４cmの間は煤が薄く、煮沸時の様子がうかがえる。（鍋Ｂ）

山茶椀（57） 口径14cm、高さ５cm、断面三角形の小さい高台を貼付けたもので、口頸部の外反が鋭いものが多い。

山皿（58） 口径８cm、高さ1.5cm、口縁部端面をやゝ内反させている。

(3) ＳＫ118出土遺物（第22図）

粗製土師質鍋（55、56） ＳＫ116、117、ＳＥ122出土のものと比べて全体に薄手のものが多いが、胎土は砂粒を多く含む。55、56の口縁端部は、折返しておさえるが薄く作られ、器高が低くなり体部の張りが強くなることなど、室町時代への過渡的様相を示すものである。（鍋Ｂ）

山茶椀（53） 口径15cm、高さ5.2cm、体部の凹凸が著しく、内底面を横なでして高台は小さく

モミ痕がつく。全体に灰白色で砂粒が露出し、焼きは固い。瀬戸地方の製品で、鎌倉時代末頃のものである。

土師器皿（54）　口径8.4cm、高さ0.8cm、口縁部の凹凸が目立つ。底面中央は突出するが、平坦なものもある。胎土はやゝ砂粒を含む。

(4)　ＳＫ121出土遺物（第22図）

精製土師質鍋（60）　口径19cm、高さ7.2cm、口縁端部を折返しておさえる。体部の調整は粗製甕と同じであるが、薄手作りである。口径25cm以上のものもあり、口縁端部が三角形状につまみ上げられたものが多い。全て体部外面に付煤している。（鍋Ｄ）

精製土師質鍋（63）　口径25.8cm、体部は凹凸が目立つ。底部は平底になるもので、外面に細い刷毛目をつける。焼成良好で、薄手作りであることも60と同じで、付煤している。（鍋Ｄ）

羽釜（61、62）　62は63の鍋に似た体部に鍔をつけた器形で、粗製鍋に伴出した羽釜と同形である。61は体部が大きく外膨する器形で、口縁端部を外へ折返しておさえる。ともに胎土は精良で薄手作りで、この二形態が鎌倉、室町時代を通じて併存している。

土師器皿　70と同じもので、薄手作りで胎土は精良である。

瀬戸焼（64）　椀と折口深皿がある。64は底部に糸切り痕をとどめ、淡灰緑釉が口縁部内外面にかかる。

(5)　ＳＫ120出土遺物（第22図）

精製土師質鍋のみが多量に出土した。65は口径29.2cmの大型例で、外面の刷毛目は細く、内面はヘラ削りで器壁を薄くする。（鍋Ｄ）

(6)　ＳＥ123出土遺物（第32図）

精製土師質鍋・山茶碗・山皿のほか、常滑焼の破片が多いが小破片であり、甕には口縁部をＶ字状に折返したものもある。体部に菊花文の叩目を付したものもある（337）。

(7)　ＳＥ122出土遺物（図版19，第22．23図）

粗製土師質鍋（51～52、75）　口径26～33cm、口縁端部を内側に折返しておさえて肥厚させた器形である。75は口縁端部が立上るもので、体部はほぼ直線的に続くなど若干器形が異るが、成形技法、胎土などから前代の鍋との過渡的様相を示すものかもしれない。（鍋Ｂ）

山茶椀（46、47）　口径14cm、高さ５cm、約70点出土しているが、高台がやゝ退化したものが多くモミ痕をのこすものも若干ある。46は常滑地方の製品で、鎌倉時代末頃のものである。

山皿（48、49）　口径７～８cm、高さ約1.7cm、口縁部をやゝ直立させたもので、糸切り底である。49には、底部に判読不明の墨書銘がある。

羽釜（42）　口径15cm、直立する口頸部の上端を肥厚させたもので、太目の鍔をつける。厚手の破片も多く、鍔以下は横にヘラ削りする。

土師器皿（43、44）　43は口径11～12cm、高さ２cm、口縁部は丸味をもって直立させたもので、

灰白色の薄手のものである。44は口径８cm、高さ1.4cm、口縁部がやゝ肥厚して端部は立上り厚手である。小形皿が量的に多く、内底面から口縁部に煤がつき灯明皿として用いられている。

常滑焼壺（50）　口縁部と体部下半が欠失する。横に強く張った体部から直立気味の頸部が強く上方で外反する器形である。体部外面は、粗くヘラ削りした上を細い刷毛でなでる。

青磁椀（45）　口径14cm、ゆるやかに外反する体部に蓮華文をめぐらし、全面に淡灰緑色釉がかかる。越州窯の製品である。

(8)　包含層の出土遺物（図版19．25．26，第20．22～24，31図）

土器・陶磁器には、土師質鍋・仝蓋付壺・羽釜・山茶椀・山皿・土師器皿・常滑焼・瀬戸焼・青磁・白磁がある。このほか砥石・土錘・銅鏡・刀子・貨幣などがある。

土師質鍋（76）　精製例が圧倒的に多く、口径30cmの大型で、粗製にくらべて器高が低く、体部の張りが強い。（鍋Ｄ）

土師質鍋（79、93）　79は口径28cm、高さ13.6cmの大型土器である。体部上方は指ナデによる凹凸がめぐり、細い刷毛目をつけたのち底部をていねいにヘラ削りする。内面は上半を横なでし、下半は細い刷毛目をつける。調整・胎土とも63と同じであるが、体部の傾斜の違いが時期差を示すかは明らかでない。なお、体部に中空の棒状把手をつけ、片口を作る浅い器形の鍋も少量ある。

93は口径8.4cm、高さ４cmの小型で、口縁部が強く外反し、平底で胎土は粗砂を含む。（鍋Ｃ）

土師質蓋付壺（78、77）　78は口径14cm、口縁部は内傾して立上り、球形の体部の上半に楕円形の把手がつく器形である。口縁端部が平坦なものと、やゝ内傾する二種類があり、体部内外面に細い刷毛目をつけるものが多い。胎土は精製のものが多いが、粗製も若干あり、口縁部の立上りが３cmと長いものは薄手精製品に多い。いずれも体部は付煤している。

77は落込み式の蓋で、直径15.2cm、高さ1.6cm、皿の上部中央に小さい把手がつく。上部のみ付煤している。この蓋付壺は、古里遺跡（多気郡明和町）で数多く出土しており、渥美半島の豊橋市東脇貝塚[註1]では同形で体部下半に鍔をつけ環状把手をつける外耳付鍔付土釜が出土している。同系統のものであろう。

羽釜（74）　精製で最大のもので、体部が張る。

山茶椀・山皿（66～68）　山茶椀は土坑出土例と同規で、山皿は口縁端部を斜目につくるものが多い。

土師器皿（69～72）　69は体部に焼成後に１小孔を穿つ。71はやゝ厚手で砂粒を含む。

常滑焼（73、94）　73は口径34cmの大甕で、外面は暗緑色釉がかかり、内面は褐色を呈する。口縁部をＮ字状に折返し、やゝ内傾する頸部から大きくふくらむ体部に続く。鎌倉時代中期。94は片口練鉢で、内面にヘラ描刻線が交叉する。

瀬戸焼（80、81、85～88）　鉛釉と鉄釉の二種類がある。鉛釉には浅鉢・折口深鉢・椀・卸目皿・小皿がある。淡緑色釉がかかり、露胎部は灰白色を呈する。

80は口径23cm、高さ6.4cmの浅鉢で釉は全面にかかる。81は折口深鉢で、土師質鍋と同形である。85は口径14.5cmの椀で、口縁端部に小さな片口を作り、底部は欠失するが削り出している。

86は口径14cm、高さ3.7cmの卸目皿で、糸切底である。口縁部内面に小さな片口をつくり、内底面にヘラ描刻線を細く入れ、釉は口縁部のみにかかる。87・88は小皿で、87の底部は削り出し高台で、体部外面もヘラ削りする。88は糸切り底である。

鉄釉陶磁器（82～84、89）　小形天目椀と小皿がある。天目椀には、口縁端部が短く外反するものと口縁部がゆるやかに内弯するものがある。体部はヘラ削りし、底部はヘラで切り起し、中央部がくぼんだいわゆるジャノメ底もある。胎土はにぶい白色で焼きは固い。

82は口径11.4cm、高さ6.4cm、高台脇0.4cmで黒褐色釉がかかり、内面は鹿子状を呈している。

83は口径11.6cm、高さ6cmで、高台脇は小さく茶黒色釉がかかる。84は口径11cmで光沢をもつ茶色釉がかかり、口縁端部のみ茶黒色を呈す。89は口径9.1cm、高さ2.3cmの小皿で、口縁端部と内面上半に茶色釉がかかり糸切り底である。

青磁（17～21）　椀・皿の破片約70点がある。胎土は堅緻で灰白色を呈し、光沢がある淡緑色～淡青色釉が全面にかかり、高台と底部が露胎のものもある。

椀（17、18、20、21）　21は底部破片で、底部は一部露胎でヘラ削りする。内面は刷毛状具による横位の流水文様をめぐらし、底面に柳葉状文を描く。越州窯の製品か。17は龍泉窯の製品で体部に蓮弁を浅くめぐらし、淡青緑色釉がかかる。

小皿（19）　口径9.6cm、高さ2.7cmの台付小皿である。

白磁（90～92）　椀の底部2と小皿1がある。高台は削り出した輪状高台で、釉は内面と外面下半までかかり、他は露胎のままである。90の底部には墨書記号文があり、91の底部にも花押状の墨書がある。92は口径10.4cm、高さ1.8cmで底部はわずかに内弯する。

土錘（304～308）　長短二類があり、両端部をヘラ切りしたものもある。灰褐色～赤褐色で胎土は精良である。

砥石（95～96）　95は長さ9cm、厚さ2.2×2.3cmで、中央部が磨り減ってバチ形を呈し、6辺ともに研ぎ跡がある。粘板岩。96は長さ11.6cm、幅2.8cm、厚さ0.9cmで、上端は折れている。表裏と二側面、下端面に研ぎ跡がある。粘板岩。他に角の丸い河原石を砥石としたものも数点ある。

双雀波文鏡（300）　直径9.2cm、縁高0.4cmの銅製円鏡で、外傾式の厚縁をもつが鏡胎は薄い。鈕は円錐形で、鈕座に細い列点がめぐる。鏡面はわずかに内弯するがほとんど平面で、一部に和紙が付着している。鏡背一面に文様が鋳出されており、鈕を中心に流水やモミヂの葉、双雀に活発な動きが見られる。双雀はやや小さく、全体に写実的であり、ヘラ跡の線にしまりがあって藤原鏡の文様ではあるが、鎌倉初頭とみるべきであろう。縁に近い部分に直径0.5cmの円孔が一対あり、御正躰として懸けられたもので、鏡面に付着した和紙も使用状況を暗示している。[註2]

刀子（301、302）　ともに錆ついて原状を留めないが、302は刀身部28.2cm、幅2.8cmで茎の基

部は折れている。

貨幣　乾元重寳１（唐粛宗乾元２年（759）鋳）、開元通寳１、治平元寳２（北宗英宗年間（1064～1067）鋳）、永楽通寳１、寛永通寳１などがある。

５．小　　結

高向Ａ遺跡は、奈良時代から室町時代に至る複合遺跡である。平安時代の掘立柱建物址群についてみると、建物相互が一定の規格性によって営まれたものであることを推定させる。すなわちＳＢ103とＳＢ104の柱列が平行関係にあることや、ＳＢ105とＳＢ109も同じ関係にある。

ＳＢ103が南面する可能性を考慮すると、これら一群の建物群は若干の時代差が存在するにしても、南側に空地が開けた場を占めていたことになる。しかも、ＳＢ109・110・111など倉庫址が近接して営まれているので、数棟の建物と倉庫が一定のまとまりをもって機能していたのではないかとも考えられよう。ただ平安時代の井戸はこの地域に検出していない。

また、南端が終る小溝ＳＤ112を南北方向に検出したが、滞水の痕跡がないことから、これらの建物群の一端を画するものかもしれない。

鎌倉・室町時代の土坑群についても、出土遺物の相違を確認した結果、両時代を通じて大きく東西の二群に分けることができそうであるが、河原石の分布状態が不明瞭であるので余り強調できない。ただ、各群に井戸ＳＥ122・123があることは、今後同時代の遺跡を究明する上で一つの課題となろう。出土遺物のうち、土師質鍋に精粗二種類があるが、山茶椀、山皿などは粗製に伴出するものであることを確認できた。

註

１．伊藤　悳「東脇貝塚」（『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書』第２集　豊橋市教育委員会）　1970

２．三重県文化財専門委員森田利吉氏の御教示による。

Ⅵ　高向Ｂ遺跡

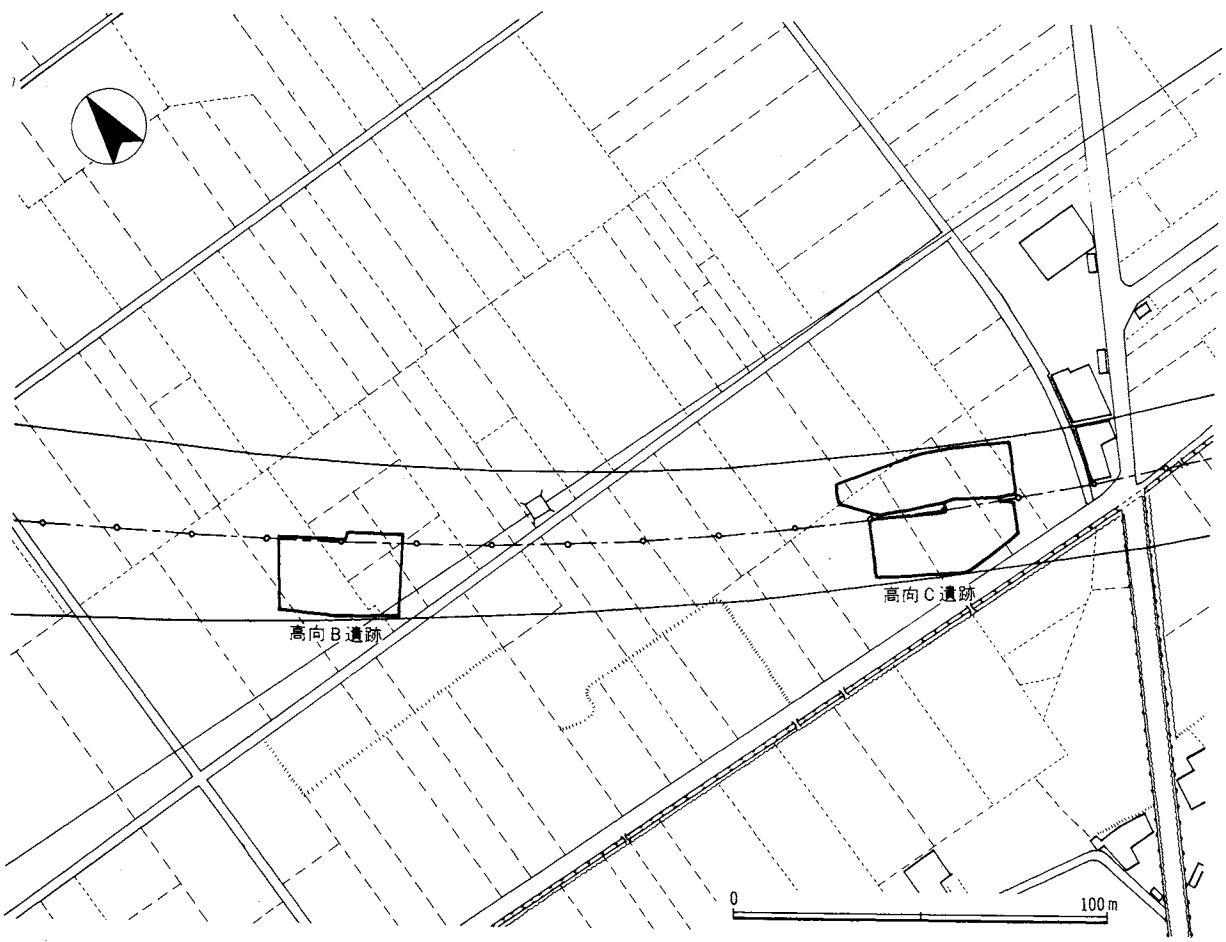
１．位置と地形

高向Ｂ遺跡は、Ａ遺跡の東方約180ｍに位置し、海抜約3.2ｍの畑地にあたる。Ａ遺跡のような微高地ではないが、全体に北西部へ傾斜する地形であり。行政的には、度会郡御薗村大字高向字下万條211～226に属する。

調査は、バイパスセンターラインNo.71～No.73の間、南北約40ｍ、東西約20ｍ、面積約 800㎡である。なお、西側路線調査と並行して、東側路線地域の試掘を進めたが、遺物、遺構はなんら出土しなかった。層位は、Ａ遺跡と同じであるが、包含層上面はやや深く、遺構は包含層である第３層のシルト混り茶褐色粘質土の下方に掘り方上面をもつ。

２．遺　　構

遺構は、平安時代掘立柱建物址６のほか、多数の柱穴を検出したが相互の関連は不明である。



第13図　高向Ｂ遺跡・立地と発掘区

掘立柱建物址（図版13. 14，第17図）

ＳＢ201　調査区の西端に位置するもので、南西部隅柱は路線外にあり東西棟３間（4.5ｍ）×３間(3.9ｍ）の建物である。梁行の東第１側入柱の通る部分に、他の柱穴上面から約50cm上方で径50cmの扁平礎石がすえられている。同じ礎石は梁行西側の柱穴上部にもあり、北東部隅柱内には底面に接して置かれていた。この他桁行北側柱穴にも河原石の埋込みがある。扁平の礎石がすえられた高さが異るのは、同一柱穴を用いて二回建替が行なわれたものであろう。柱穴は方80cm、深さ40cmである。

ＳＢ202　東西棟３間（6.6ｍ）×３間（5.7ｍ）の南廂付建物である。柱穴は方80cm、深さ30cmである。廂部分の中央柱穴は小さい。

ＳＢ203　ＳＢ202の東側にあり、東西３間（5.7ｍ）×３間（5.1ｍ）の西廂付の建物である。柱穴は方25cm、深さ70cmである。東側柱穴と周辺部に炭化物・焼けた円礫が集中するので、火災を受けたものかもしれない。

ＳＢ204　ＳＢ201の北側にあり、東西棟２間（3.7ｍ）×２間（3.1ｍ）の建物である。柱穴は方60cm、深さ30cmである。中央に束柱があるので倉庫址であろう。北西部隅柱はＳＢ 201の東北部隅柱と重複するが、前後関係は不明である。

ＳＢ205　ＳＢ202の南側に重複するもので、東西棟３間（3.5ｍ）×２間（2.8ｍ）の建物である。柱穴は方50cm、深さ40cmである。北側桁行の柱穴は、一部検出できなかった。

ＳＢ206　調査地域の南端にあり、一部は路線外にあり未掘である。３間以上（3.9ｍ以上）×２間（4.2ｍ）の建物であろう。柱穴は方60cm、深さ40cmである。

ＳＢ207　ＳＢ203に重複するがＳＢ207の方が新しい。南北棟４間（6.5ｍ）×２間（4.15ｍ）の建物である。柱穴は方90cm、深さ35cmである。

名称（ＳＢ）	規模（間）	桁行（ｍ）	梁行（ｍ）	棟方向	柱間寸法(m)		備考
					桁行	梁行	
201	３×３	4.5	3.9	N 86°W	1.5	1.3	礎石4個あり、ＳＢ204と重複
202	３×３	6.6	5.7	N 71°W	2.2	2.15	南廂付建物、ＳＢ205と重複
203	３×３	5.7	5.1	N 72°W	1.9	1.65	西廂付建物、ＳＢ207と重複(新)
204	２×２	3.7	3.1	N 64°E	1.8	1.55	束柱あり、ＳＢ201と重複
205	３×２	3.5	2.8	N 86°E	1.15	1.4	ＳＢ202と重複
206	(３)×２	(3.9)	4.2	N 11°E	1.25	2.1	
207	４×２	6.5	4.15	N 20°E	1.6	2.05	ＳＢ203と重複(新)

第３表　高向Ｂ遺跡・掘立柱建物址の規模　　（　）は以上

3．遺　　物

遺物は平箱約50のうち大半が包含層出土のもので、掘立柱建物址柱穴から少量出土している。土器には土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器があり、大半が平安時代に属し、型式的に奈良時代のものも一括して記すことにする。なお、土器のほか土錘が少量ある

土　師　器（図版20，第24図）

杯・皿・鍋・甕・高杯・甑・粗製鉢があり、土器のうち9割以上をしめている。

杯AⅢ（106）　口径13.2cm、高さ3.4cm、口縁部がゆるやかに外反する器形で、口縁部と体部上半を横なでし、底部はヘラ削りする。やゝ厚手で胎土は精良である。出土量はすくない。

杯BⅡ（108.109）　口径14.5cm、高さ3cm、口縁部内外面を強く横なでしたため強く外反する器形。底部は不調整で、薄手で焼きが固く淡灰褐色を呈する。杯B類で出土量が最も多い。

杯BⅢ（107．110）　杯BⅡにくらべて器高が大きく、口縁部内外面を横なでするが余り外反しない。薄手で淡灰褐色を呈し、底部は不調整である。

杯CⅡ（114～116）　口径16～16.5cm、高さ3.6～4.5cm、杯Bとくらべて口径と器高が大きい土器で、口縁部がゆるやかに外反する器形である。口縁部内外面を横なでし、外面は横なで以下から底部全面に指おさえの凹凸がのこる不調整のもので薄手のものが多い。114は内面に螺旋状暗文が残るが、放射線状と螺旋状の暗文を組合せたものもあり、厚手で器高の大きいものが多い。

胎土は精良で、明橙色～淡灰橙色の土器が多い。

杯D（105）　口径18.8cm、口縁端部が外反し、椀形の杯部に高台を貼付けた器形であるが、高台は欠失しており、底部に接着のため粗いヘラ描刻線が斜格子状にのこる。明褐色を呈し胎土精良であるが磨滅している。

皿BⅠ（111．112）　口径13.3～15.5cm、高さ2cm、口縁部内外面を横なでし、端部が強く外反する。内面はなでつけ、底部は不調整であり、薄手で淡橙灰色を呈する。

皿BⅢ（113）　口径15.6cm、高さ 2.4cm、口縁部内外面を幅狭く横なでするが、口縁部はゆるやかに外反する。底部は不調整のままで凹凸が目立ち、淡灰褐色を呈する。出土量はすくない。

鍋BⅠ（120）　口径22cm、高さ約 9.3cm、口縁端部を折返しておさえて内外面を横なでし、体部の粗い刷毛目を下部で横にヘラ削りする。内面は指なでのままで、底部はやゝ上げ底になる。明橙色を呈し、胎土は精良である。

鍋BⅡ（121）　口径18cm、口縁端部を折返して肥厚させた器形で、口縁部内外面を幅広く横なでする。体部外面の細い刷毛目の下半はヘラ削りし、内面もわずかにヘラ削りの痕跡がある。全体に薄手で凹凸が目立ち、胎土は精良で淡灰褐色を呈する。

甕AⅠ（97．100）　97は甕Bに似て口縁部が長い器形で、口縁端部が平坦な面をつくる。口縁部内外面を横なでし、体部は細い刷毛目をつける。体部と口縁部内面に煤が付着する。100は口縁端部を折返し、肥厚部上面を平坦につくる器形で、出土量が多い。

甕BⅠ（99）　口径約37.5cmの大形甕で、外反する口縁端部は指でつまみ上げる。体部内外面に粗い刷毛目をつける。口縁部外面は刷手目の上を横なでし、内面も刷毛目の上を指でなでつける。外面は付煤し、胎土に小石を含むが精良土である。

甕CⅡ（98．101．102）　口縁部の形態で細分しうる可能性があるが、特に口縁端部を折返して平坦な肥厚面をつくるものが多い。刷毛目には精粗二類があるが、粗いものが多い。

高杯A（104）　脚部の破片のみで、ヘラ削りと指なでによる細い面取りがあるが、指おさえのままの方が多い。内面に粘土紐巻上げ痕がのこり、裾部上面は横なでする。

甑（103）　口径約23.8cm、直線状に立上る口縁端部を折返しておさえた器形で、体部外面に粗い刷毛目をつける。内面は粘土紐巻上げ痕があり、指でなでつけている。把手は欠失する。

粗製鉢（122）　口径15.5cm、高さ 5.5cm、粘土紐巻上げによる体部は直立ないしやゝ内傾し、口縁端部がやゝ内傾して丸く終る器形で、厚さ1cm前後であるが 1.6cmのものもある。底部の完存例はないが、約 0.4cmと薄い。出土量はすくないが、体部内に刷毛目をつけたものもあり、胎土に多量の石粒を含むことが特色である。付煤例はないが、体部外面に火熱を受けて赤化したものが多く、製塩土器であろうか。

黒　色　土　器（第24図）

椀の破片約40点がある。貼付高台をもつ椀は口縁部が明らかでないか、3点のみで他は高台のない器形である。内面が黒色のA類が大半で、内外面が黒色のB類は2点のみである。大半が小破片で磨滅するものが多いが、体部内面を細かくヘラ磨きして光沢をもつものには、螺旋状暗文がみられる。

117は口径18.4cm、高さ 4.9cm、外面全体に横位で粗くヘラ削りする。 119は口径17cmで、外面が暗灰褐色を呈し、口縁部は横なでし以下は右から左へヘラ削りする。内面は横位の細いヘラ磨きののち、二段の螺旋状暗文をつける。

118は口径16cm、高さ4.2cm、外面は部分的に口縁部直下まで黒変するが、他は淡橙色へ淡黄色を呈する。123は口径17cm、高さ4.4cm、口縁端部がゆるやかに外反し、口縁部外面を横なでし、以下は右から左へヘラ削りする。内面は横位の細いヘラ磨きののち、螺旋状暗文をつける。 124は断面梯形の貼付高台で、黒色の内底面を横にヘラ磨きし連孤状暗文をつける。なお、他の高台は断面三角形である。

須　　恵　　器（図版20，第25図）

杯・杯蓋・壺・甕・鍋・平鉢があり、出土量はすくない。

杯B（132）　口径11.9cm、高さ3.2cm、底部は右まわりろくろでヘラ削りする。

杯C（133．134）　口径14～15.7cm、高さ4cm、底部はヘラ削りのあと指なでし、体部の稜に近く短い輪状高台をつける。

杯蓋A（131）　口径14.3cm、高さ2.9cm、平坦な宝珠形のつまみをつけ、天井部は右まわりろ

くろでヘラ削りする。口縁端部は断面三角形で、内面は指なでする。なお、内面に重ね焼による色の変化がのこる。

壺A I（135） 口頸部は欠失するが、体部が張り上方に稜をつくる器形で、やゝ外へふんばる梯形の高台がつく。水びき成形で、体部下半は右まわりろくろでヘラ削りし、底部下面はヘラ削りの上を指なでする。稜以上に暗緑色の自然釉がかかる。

壺A II（136） 135とくらべて体部の稜が強く張ったもので、水びき成形する。体部下半は左まわりのろくろでヘラ削りし、底部もヘラ削りし、高台の周囲を指でなでつける。稜以上に淡灰緑色の自然釉がかかり、突出した内底面にも釉がのこる。

小形壺A（126） 丸い体部に外へ強くふんばった高台をつけた器形で、短頸壺である。底部内面に粘土紐巻上げ痕跡がある。体部外面から底部にかけてヘラ削りし、底部にヘラ描記号がある。体部上半に灰緑色の自然釉がかかる。

壺B（129） 口径29.8cmの広口壺で、口縁端部は上下に肥厚し稜をつくる。両面に暗緑色釉がかかり、胎土は灰白色で縞文様が走る。水びき整形で、猿投窯の製品である。

甕A（128） 口径33.3cmの大形甕で、屈曲する短い頸部から丸い体部に続く器形である。口縁部内外面は横なでし、外面に平行叩目文、内面に同心円文の叩目がつく。

甕B（125．130） 口径20～25cm前後で、口頸部が大きくひろがり口縁端部は肥厚する。口頸部は横なでし、体部外面に格子目文、内面に同心円文の叩目がつく。

瑞（127） 外へふんばった高台をつけ、水差口の基部が突出する器形である。内面に水びき痕がのこり、体部下半と底部はヘラ削りする。

平鉢A II（137） 口径26.5cm、高さ8.7cm、口頸部が直線的に外反し、底部中央が突出する器形である。口縁部外面に二条の凹線を入れ、底部は大きくヘラ削りする。胎土は粗砂を含み軟質で、焼成は悪い。

灰 釉 陶 器（図版20，第25図）

椀・皿・蹄脚付皿・段皿・耳皿・平瓶があり、出土量は須恵器よりやゝすくない。

椀（138～141） 口径13.5～19cm、高さ4.1～6.1cm、138は口縁端部を丸くつくり、高台は梯形でしっかりしている。139～141は口縁端部を外側へつまみ出し、高台はすべて貼付により、139では外へふんばる梯形のもので、140、141では下端部をやゝ内弯するのが特徴である。底部に糸切り痕がのこるものもあるが、ほとんどヘラ削りしそのあとを指でなでつける。138、140、141の体部外面はヘラ削りしている。体部内面の重ね焼部分をのこし淡灰緑色釉がかかるが、141は外面にも刷毛塗している。

皿（142．143） 口径13.8～14.3cm、高さ3cm、142は外へふんばった梯形の高台がつき、全面に灰緑色～灰青色釉がたっぷりかかる。143は口縁端部が外へつまみ出され、三角形に張り出す高台がつき、全面に淡灰緑色釉がかかる。このほか高台が内湾するものも若干あり、全面に淡灰

緑色釉を刷毛塗りする。

蹄脚付皿（144）　口径18.3cm、高さ3.3cm、口縁端部約1cmを水平に折曲げた浅皿の底部に、ヘラで縦に12面を削り出した小さい蹄脚をつけた器形である。破片であるが蹄脚は3ケ所につけたもので、底部はろくろでていねいにヘラ削りしている。内面全体と口縁外面、脚部外側に淡灰緑色釉がかかる。底部中央はわずかにくぼみ、底部に重ね焼による釉着がのこる。

段皿（145～148）　口径14.5～17.8cm、高さ2.8～3.2cm、145、147は短く外へ張った高台をつけ、体部外面はていねいにヘラ削りする。145は内面全体に淡灰緑色釉がかかり、トチ跡がのこる。147は内面の段から上に釉がかかり、内側はヘラ先状の工具でていねいに磨いており、底部は糸切り底である（334）。146、148はやゝ内湾する高台をつけ、外面にも内面の段と平行してゆるやかな段があり、底部はヘラ削りの上を指なでする。全体に淡灰緑色釉がかかるが、148は刷毛塗である。

耳皿（149、150）　149は短い梯形の高台がつき、底部に糸切り痕がわずかにのこる。上面全体に灰緑色釉がかかる。150は高台のない粗い糸切り底で、釉はかからない。

平瓶　幅3.5cm、厚さ0.6の把手破片がある。全体をヘラ削りし、淡灰緑色釉がかかる。

緑　釉　陶　器（巻頭図版，第25．32図）

椀、輪花椀、皿、壺、壺把手があり、ほとんど破片で約70点ある。胎土は灰白色で堅く焼き締ったものと、白色で軟質の二種類が等量である。

椀（151．152．154．157．158）　151は口径18.3cm、高さ6.4cmで全面に緑色釉がかかる。口縁端部はわずかに外へつまみ出されており、外へふんばった貼付輪状高台がつく。体部外面の下半と底部はヘラ削りする。胎土は緻密で灰白色を呈するが、高台はやゝ軟質である。底部内外面に三ケ所のトチ跡がつく。

152は口径18.6cmで体部両面は施釉前にていねいにヘラ磨きする。胎土は堅緻で灰白色を呈し、全面に淡緑色釉がかかる。猿投窯の製品である。154はやゝ軟質の底部破片で、トチ跡がつく。淡緑色釉の施釉前にていねいに両面をヘラ磨きする。短く外へふんばった貼付輪状高台がつく。なお、他の底部破片も、全て貼付輪状高台がつく。

157、158は小破片であるが、口縁部がやゝ直線状の器形である。体部内面に半截花文の印刻文様がある。なお、同様の花文の印刻文様は、椀の内底面にもあるが、数はすくない（326～333）。

輪花椀（155）　唯一の輪花椀である。施釉前に体部外面をヘラ削りし、内面はヘラ磨きする。胎土は灰色で堅緻であり、器壁が薄い。全面に濃緑色釉がかかり、釉の内部に細いヒビが走る。篠岡窯の製品である。

皿（156）　口径14.8cm、高さ 2.9cm、口縁端部を外へ折返しておさえたもので、外へふんばる貼付輪状高台がつく。両面をていねいにヘラ磨きし、緑色釉がかかる。胎土は灰色で堅緻である。皿にはこのほか体部外面に稜をつくるものも少量ある。

壺、壺把手　小片のため図示しなかったが、壺は水びき成形で、胎土は灰白色で堅緻である。猿投窯の製品である。なお、他の多くの破片は、猿投窯、篠岡窯の製品であると断定し難く、畿内地方から搬入された可能性もある。

土錘（第31図）　311は大型例で、1点のみである。他は細長いもので大小二種類あり、両端部をヘラで切るものもある。精良土を用い、淡灰橙色を呈する。

4．小　　結

高向Ｂ遺跡は、奈良時代後期から平安時代前期を中心とした頃の集落址で、掘立柱建物群が数回にわたって営まれていた。とりわけ廂をもつＳＢ202・203、礎石を用いたＳＢ201などの在り方は、多くの緑釉陶器の出土とあいまってＡ遺跡とはやゝ性格的に異ることが想定される。また、調査地域の東側には建物址は検出されず、むしろ、路線外の西側に集落の中心部が続くものと思われる。遺物では、前述した緑釉陶器のほか黒色土器も多い。灰釉陶器も形式的に若干の幅がみうけられるが、多量に出土した土師器杯、皿などの調整手法、形態など同一の範疇にあるものと考えられるので、相互の編年的位置づけを探る上で重要な資料を得ることができた。

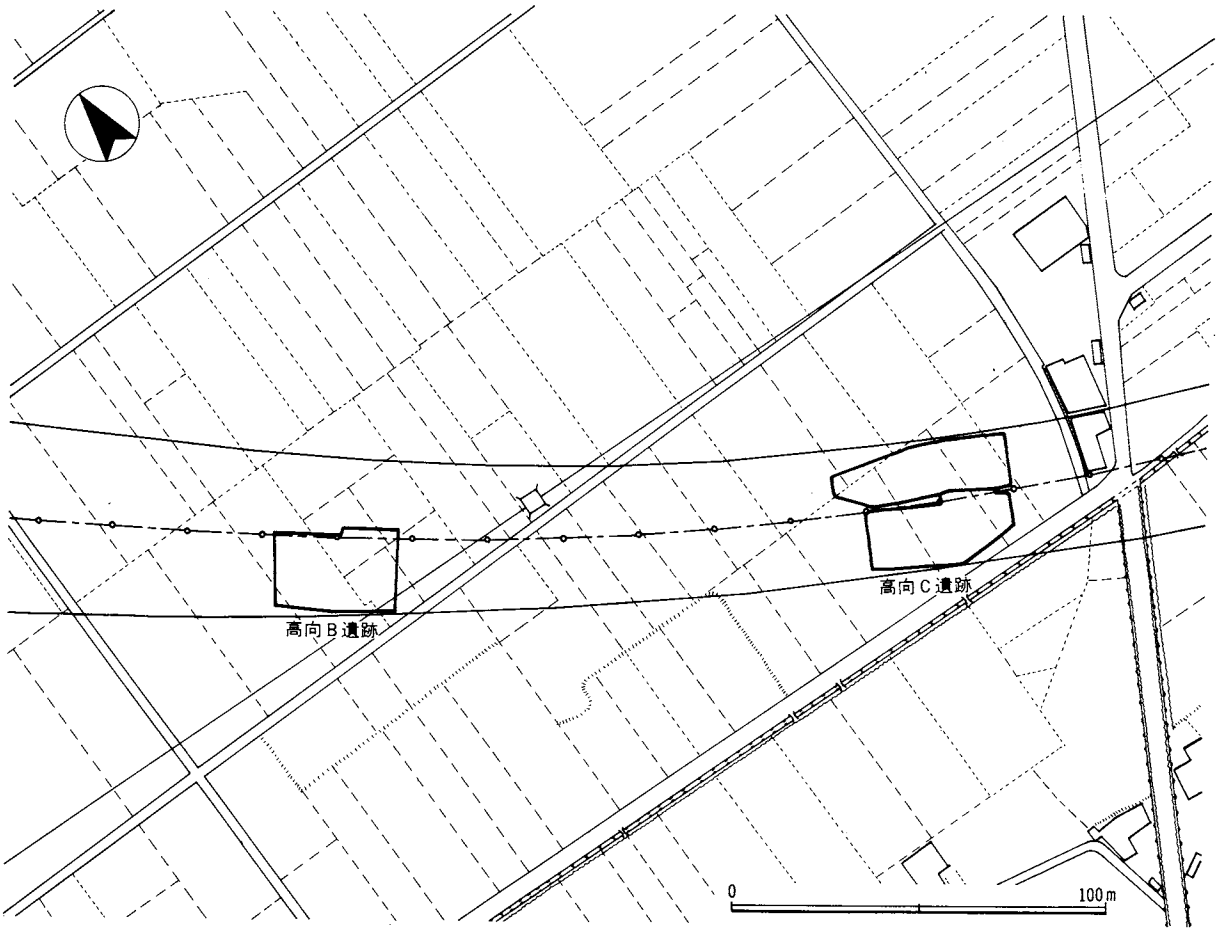
Ⅶ　高向Ｃ遺跡

１．位置と地形

高向Ｃ遺跡は、Ｂ遺跡の東方約180ｍに位置し、海抜約３ｍの畑地にある。Ｂ遺跡と同じく全体に北西部へ傾斜する地形である。行政的には、度会郡御薗村大字高向字下方條275～281に属する。

調査地域は、バイパスのセンターラインNo.79～No.81の間、南北約40ｍ、東西約35ｍ、面積約1,400㎡である。当初西側路線部を調査の結果、遺構がさらに東側へ続くことを確認し、梅雨開けを待って東側路線の上面にブルドーザーを入れ、調査の進展に従って時間の許す限り北側へ拡張した。

層位はＢ遺跡とほとんど変らないが、包含層は約40cmと厚く、遺構は包含層の下面で検出することができた。なお、大溝（ＳＤ312)は、当初西側路線部では検出できず、梅雨開け後に東側で検出したものであるが、その時には既に西側は仮設道路による埋戻しが完了していたため、西側延長部は遺憾ながら未掘に終った。



第14図　高向Ｃ遺跡・立地と発掘区

2．遺　　構

遺構は、飛鳥時代溝址１、奈良時代竪穴住居址４、同溝址１、平安時代掘立柱建物址６以上、同井戸２のほか、時期不明の柱穴、土坑など多数を検出した。

A　飛鳥時代の遺構

(1)　溝　　址（図版17，第18図）

ＳＤ312　調査地域の中央部をゆるやかに蛇行して西から東へ向う幅２～2.5ｍ、深さ１ｍ、断面Ｖ字形の大溝である。埋没土は少量の炭化物を含む茶褐色混り粘質土の単純層であり、底部から約５cmほどはレンズ状にやゝ黒味がかった滞水を示す茶褐色土が堆積している。

出土遺物は、少量の土師器破片のほか、ＳＫ314の西側約１ｍのところで、上面から約20cmの深さでほぼ完形の須恵器平瓶１点が出土したのみである。なお、ＳＫ314の時期は不明である。

B　奈良時代の遺構

(1)　竪 穴 住 居 址（図版16．17，第18．19図）

ＳＢ301　ＳＤ312の南側にあり、西隅部はＳＥ316に切られている。東西3.8ｍ、南北3.3ｍのほぼ隅丸長方形で、掘り方は約15cmである。床面は平坦で、直径20～30cm、深さ６～10cmの小さい柱穴があるが柱筋は通らない。東辺隅部に70×50cmのカマドを作るが、若干の炭化物以外に土器は出土していない。

ＳＢ302　ＳＢ301の両側にあり、東西3.1ｍ、南北2.5ｍの楕円形で、掘り方は約15cmである。床面の中央やゝ東寄りに直径70×90cmの焼面があり、東辺に東西60cm、南北110cmのカマド址がある。床面は平坦で、柱穴はない。南辺部上面に直径28cm、深さ４～20cmの小さい柱穴が２個相対している。出入口の施設であろうか。

ＳＢ303　ＳＢ313の南側にあり、東西2.1ｍ、南北3.5ｍの長方形で、掘り方は約15cmである。床面は平坦で、柱穴、カマド址はない。

ＳＢ304　ＳＢ301の南側にあり、東西3.5ｍ、南北4.7ｍの不整形で、掘り方は約30cmである。床面は平坦で、中央やゝ東寄りに70×50cmの円形のカマド址がある。

(2)　溝　　址（図版17，第18図）

ＳＤ313　調査地域の北側を西から東へ向う小溝で、ＳＤ312よりも新しい時期のものである。幅約１ｍ、深さ30cmの浅いＵ字溝で、埋没土は茶褐色砂混り粘質土の単純層で、底部に滞水の痕跡がある。溝内からはかなりの量の土師器・須恵器が出土しており、若干時期の古いものも含まれるが、奈良時代後期の一括資料として重要である。

C　平安時代の遺構

(1)　掘立柱建物址（図版15～17，第18図）

ＳＢ305　東西棟３間（5.65ｍ）×２間(4.3ｍ)の建物で、柱穴は方90cm、深さ65cmである。

ＳＢ306　ＳＢ305の南に近接するもので、東西棟３間（6.3ｍ）×２間（3.95ｍ）の建物である。桁行の中央柱間がやゝ狭い。柱穴は方70cm、深さ40cmである。

ＳＢ307　ＳＢ306の西南側にあり、東西棟の建物であろう。柱穴は方80cm、深さ40cmである。

ＳＢ308　東西棟３間（5.25ｍ)×２間（４ｍ）の建物で、ＳＢ304よりは新しいがＳＢ309との前後関係は不明である。柱穴は方80cm、深さ60cmである。

ＳＢ309　東西棟３間（７ｍ）×２間（4.4ｍ）の建物で、ＳＢ304よりも新しい。柱穴は方80cm、深さ40cmである。

ＳＢ310　ＳＢ306に隣接する倉庫址で、東西２間（3.3ｍ）×南北２間（3.7ｍ）で、中央に束柱をもつ。柱穴は方70cm、深さ40cmである。

ＳＢ311　東西２間（3.8ｍ)、南北２間（3.8ｍ）の倉庫址と思われるが、桁行柱列と束柱は検出できなかった。柱穴は方80cm、深さ45cmである。

名称（ＳＢ）	規模（間）	桁行（ｍ）	梁行（ｍ）	棟方向	柱間寸法(m)		備考
					桁行	梁行	
305	３×２	5.65	4.3	N71°W	1.85	2.15	
306	３×２	6.3	3.95	N77°W	2.1	2.0	梁行柱間は一定しない
307	(3)×(2)	(4.4)	(2.4)	N79°W	2.05	2.0	
308	３×２	5.25	4.0	N81°W	1.75	2.0	ＳＢ309と重複
309	３×２	7.0	4.4	N80°E	2.3	2.2	ＳＢ308と重複
310	２×２	3.7	3.3	N13°E	1.85	1.6	束柱あり
311	２×２	3.85	2.95	N15°E		1.45	

第４表　高向Ｃ遺跡・掘立柱建物址の規模　　（　）は以上

(2)　井　　戸（図版15～17，第18．19図）

ＳＥ315　ＳＢ304の南側にある素掘りの井戸で、底面に大木の挎抜枠を置き、内部中央に桧材の曲物を二重に納めた形式である。掘り方は東西５ｍ、南北3.8ｍ、深さ2.6ｍである。掘り方上面から約１ｍ下の部分を上面として、下方は底部まで挎抜枠の周囲を青灰色粘土で裏込めして補強している。挎抜枠は、欅と思われる一木を３枚に分割し、直径１ｍ、高さ60cm、厚さ10cmに整形したもので、継目部の外側に枘穴を上下にもつ板をあてて補強している。

埋没土には多量の土師器と、少量の須恵器、灰釉陶器が出土し、中央の曲物内からは墨書銘をもつ土師器杯が出土した。このほか枠内底部に下駄が片方出土した。

ＳＥ316　ＳＢ301の西辺を切って掘られた井戸で、直径1.8m×1.5mの楕円形を呈する。底面は湧水が激しく未掘に終った。遺物は、上層から土師器小片が少量出土したのみである。

３．遺　　物

遺物は平箱で約200があり、飛鳥時代・奈良時代・平安時代に属するが、量的に平安時代のものが最も多い。そのうち溝址、井戸から出土した一群と包含層出土土器は、よく遺構の年代差を示している。土器は土師器が９割をしめ、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器がある。その他包含層から土錘・石帯・帯金具・鎹と井戸から曲物、下駄が出土した。

Ａ　飛鳥時代の遺物

(1)　ＳＤ312出土遺物（図版24，第30図）

須恵器平瓶１点のほか、土師器小片が若干出土したのみである。

平瓶（275）　口径7.2cm、高さ13.8cm、体部最大幅15.8cm、底径9.6cmで、ほぼ完形である。体部の上方を強く張り、外反する口頸部に浅い一条の沈線をつけた器形で、体部の最大幅の部分と下部をヘラ削りする。形式的に愛知県高蔵寺３号窯出土の平瓶に類似する。

Ｂ　奈良時代の遺物

(1)　ＳＤ313出土遺物（図版21，第26図）

土師器は、杯・皿・椀・甕・鍋・高杯があり、須恵器には杯・杯蓋・壺・甕がある。

土　　師　　器

杯ＡⅢ（164）　口径12.4cm、高さ3.4cm、やゝ厚手で口縁部内外面は横なでし、内面を指なでし底部はヘラ削りする。胎土精良で明褐色を呈する。

皿ＡⅡ（168、169）　口径19cm、高さ2.2～2.8cm、やゝ厚手で口縁部がゆるやかに立上り、端部を丸くつくる。口縁部内外面は横なでし、底部は不調整のものが多いが、169はヘラ削りする。

椀ＢⅠ（165～167）　口径12.2～14cm、高さ3.6cm、口縁部はゆるやかに外反し、端部内側は横なでによって浅い沈線が入る。底部は不調整であるが、165は部分的にヘラ削りする。胎土は精粗二類あり、灰褐色を呈する。

甕ＢⅠ（159、160）　159は口径23.8cm、高さ約43.4cm、円筒状の体部をもつ長甕で、口縁端部をつまみ上げている。口縁部内外面は右まわりで一気に横なでし、体部内外面は底部から口縁部に向って大体右まわりで細い刷毛目をつける。内面下半は、刷毛目の上を底部から口縁部に向ってヘラ削りする。外面全体に付煤し、胎土に小石を含み淡灰褐色を呈する。

160は口径約44cmの大形甕で、体部内面は刷毛で削るように強くなでている。

甕ＣⅡ（161）　口径16cm、口縁端部はつまみ上げる。口縁部内外面は横なでし、体部に細い刷

毛目をつける。

鍋AII（163）　口径27cmの把手付鍋で全体に磨滅するが、体部内外面に細い刷毛目をつけ内面は刷毛目の下方は粗くヘラ削りする。胎土は精良で明褐色を呈する。

高杯A（162）　口径22cm、高さ9.2cm、横なでによって口縁端部をわずかに外反させ斜目の面をつくる杯部に、巻上げ成形した裾のひろがる脚部をつけている。全体に磨滅するが、杯部外面に細い刷毛目をつけ、脚部は指おさえの上をなでつけ、裾部内外面は横なでする。杯部外底面に、脚部接着のための粗いヘラ描刻線がめぐる。胎土は精良で明褐色を呈する。この他の脚部破片では、上から下へ14面をヘラ削りした短脚もあり、杯部内底面に螺旋状暗文をつけるものもある。

須　恵　器

杯D（173）　口径11.4cm、高さ4cm、内反する短いカエリをもち、内底面は幅広くなでつける。形式的に7世期後半に属するもので、SD312の平瓶と同時期と思われ、混入したのであろう。

杯A（176、177＝335）　176は口径13.7cm、高さ3.2cm、底部を右まわりろくろでヘラ切りし、内底面は指なでする。

177は口径11.4cm、高さ4.1cm、底部を右まわりろくろでヘラ切りし、内底面は指なでする。176とともに胎土に石粒を多く含む。

杯BI（178）　口径17cm、高さ5.6cm、底部をヘラ削りする。

杯C（179）　口径15.8cm、高さ3.4cm、底部をヘラ削りし、体部の稜に近い部分に梯形の短い輪状高台をつける。

杯蓋AII（174）　口径15cm、高さ3.9cm、天井部が高くなだらかに外側に小さな段をつくる端部へ続く。天井部は宝珠形のつまみをつけたあとから、右まわりろくろでヘラ削りする。

杯蓋B（175）　口径14cm、高さ2.8cm、天井部が低く、わずかに外延する端部を垂直に折り曲げたもので、天井部は右まわりろくろでヘラ削りする。

壺AII（172、180）　頸部と体部の破片で、水びき成形による。180は体部に稜をつくり灰緑色自然釉が外面にかかる。灰白色で堅緻である。

甕BII（170、171）　170は口縁部を欠くが、体部が丸く張り外面に斜行叩目文をつけたあと幅広く指なでで消している。内面は細い同心円文の叩目がわずかにのこり、下半は下から上へ大きくヘラ削りする。底部は径10,5cmの円形の生焼け部分があり、焼成台の痕跡と思われる。

171は口径24.1cm、外反する口縁端部を上下に肥厚し、頸部下方をヘラで横におさえている。体部外面は斜行叩目文、内面は細い同心円文の叩目をつけるが、指なでで消している。

(2)　SB301～304出土遺物

土師器は杯・皿・甕・鍋があり、須恵器は杯・杯蓋・甕がある。少片で図示しなかったが、土師器の杯・皿には底部をヘラ削りするものがあり、A遺跡のSB101出土土師器に類似する。

C　平安時代の遺物

(1)　ＳＥ315出土遺物（図版23．25，第27．32図）

挎抜枠内部に置かれた曲物内一括遺物と掘り方出土遺物がある。土器には土師器・須恵器・灰釉陶器があり、他に土錘・曲物・下駄がある。

曲物内の遺物

土　師　器

杯ＢⅡ（186）　口径14.2cm、高さ3.4cm、やゝ厚手で内面中央にヘラ先端による沈線を１本描き、口縁部から底面にかけて３本単位の木葉状文様を底面の沈線をはさんで対称的に二ヶ所に描く。口縁部内外面は横なでし、底部は不調整である。

杯ＢⅢ（187、188）　口径14～15cm、高さ2.8～3.3cm、口縁部内外面は横なでし、底部は不調整である。188の外底面には、形状不明（ヒトガタ？）の圧痕文が右まわりにめぐる。調整の際に指にあてたものに文様が刻まれていたもので珍しい（325）。なお、ともに口縁部周辺が付煤している。

甕ＣⅡ（189～191）　口径16.1～21cm、口縁端部を内折しておさえたものが比較的多い。

灰　釉　陶　器

壺（182）　口径19.1cm、口縁端部が肥厚する器形で、内外面に淡灰緑色釉がかかる。

木　製　品

曲物（192、193）　破損しているため全形は不明であるが、直径の異る三種類がある。大形と中形は入れ子にして底面中央部にすえている。小形は、井戸枠の内部下方にめりこんで出土した。

193は大形で、直径56.6cm、厚さ0.4cmの桧薄板で一段の高さ18.5cmを測る。重ね合せ部分は15cmあり、向って右端を外側とし外端部の４個所を幅１cmの樹皮を用いて縦にとじ合せるが、樹皮は残らず破損が目立つ。内面は１～1.5cmごとに縦刻線を入れ、その上に２～2.5cmごとに交叉する斜目の刻線を入れ、曲げやすいようにする。

192は小形で、直径40cm、厚さ0.3cmの桧薄板で下端は破損する。重ね合せ部分は13cmあり、向って左端を外側とし外側の板上部約５cmを斜めに削り取り、上端と側端を小さく削って面取りする。外端の近くと約10cm右側の２個所で、幅0.8cmの樹皮で縦にとじ合せている。内面に刻線はない。この他底板をとりつけた木釘孔をもつ曲物もあり、内面を焼いて曲げやすく工夫したものもある。

底板（194）　直径12.5cm、厚さ0.5cm桧柾材の円板で、側面に４本の木釘孔をもつ。

下駄（195）　長さ21.8cm、幅９cm、厚さ1.7cm、杉の柾材を用い、上方に鼻緒孔があるが下方にはない。裏面は前歯にあたる部分中央のやゝ下方を幅４cm深さ0.4cmに袂り、幅3.5cmの後歯を斜めに削り残し、下端は厚さ１cmに削る。全体に腐蝕するが、歯はすり減っている。

掘り方の遺物

土　師　器

杯ＢⅠ・ＢⅡ・ＢⅢ、皿ＢⅠ・ＢⅡ、甕ＣⅡ、鍋ＢⅠ、粗製鉢があるが、小片が多い。杯の底部に墨書銘をもつもの（200、201）があり、「主□」「主」と読める。この他井戸址周辺部の包含層出土の土師器杯ＢⅡ・ＢⅡ・ＢⅢ（196～198、202、203）、灰釉陶器椀（199）の底部に「主」を墨書したものが多い。これらは人名とするよりも、むしろ建物群の名称を示すものかもしれない。

須　恵　器

壺ＡⅠ・杯Ａ・杯ＢⅡ・杯Ｃがあるが、小片が多い。

壺ＡⅠ（181）　外へふんばった輪状高台をつけ、体部は右まわりろくろでていねいにヘラ削りする。

杯ＢⅡ（185）　口径11cm、高さ４cm、水びき成形で、底部は右まわりろくろでヘラ削りする。

杯Ｃ（184）　口径12.8cm、高さ3.6cmで短い輪状高台をつける。

灰　釉　陶　器

小皿（183）　口径14.3cm、高さ2.7cm、口縁端部を外へつまみ出し、やゝ内弯する短い輪状高台をつけ、底部はヘラ削りする。内面は重ね焼した中央部をのこして淡灰色釉がかかる。この他高台が短く内反しない底部破片もあり、判読不能の墨書銘をのこすものもあり、すべて灰白色を呈する。

土　製　遺　物

土　　錘（第31図322～324）

３点のみで、322、324は、両端をヘラで切る。淡灰橙色で、胎土は良い。

(2)　ＳＥ316の出土遺物

土師器は杯ＢⅠ・ＢⅡ・ＢⅢ、甕、粗製鉢があり、須恵器は杯蓋のみで、他に細長い土錘があるが、すべて小破片で図示しなかった。上層のみに出土している。

(3)　包含層の出土遺物

土　師　器（図版22．23，第27～29図）

土師器は杯・蓋・皿・台付皿・椀・壺・甕・鍋・甑・高杯・粗製鉢があり、杯・皿が圧倒的に多い。

杯ＡⅠ（245）　口径22.3cm、高さ4.6cm、ゆるやかに外反する口縁端部をやゝ内折し、横なでによって内側に浅い凹線が入り、内面に放射状暗文をつける。磨滅しているが、底部はヘラ削りしたもの、不調整のものもあり、体部をていねいになでたあとをヘラ磨きするものが多い。

杯A II（246）　口径18.6cm、高さ3.8cm、口縁部内外面は横なでし、それ以下と底部の間はヘラ削りし、底部両面をていねいになでつける。

杯A III（247）　口径14.8cm、高さ3.1cm、口縁部内外面を横なでし、底部はていねいにヘラ削りする。内底面に螺旋状暗文がわずかにのこる。杯A類は厚手で、胎土は精良土を用い明褐色を呈する。

杯B I（248～250）　口径13.8～16cm、高さ2.9～3.5cm、やゝ厚手で、口縁部内外面を幅広く横なでし、底部は不調整である。

杯B II（251～253）　口径13.6～15.9cm、高さ2.9～3.3cm、口縁部を強く横なでしたため頸部に段ができ外反する器形で、底部は不調整である。淡灰橙色のものが多く、胎土は精良である。

杯B III　（254～256）　口径14～15.6cm、高さ３～3.5cm、杯B IIほど口頸部に段をつくらないが、調整などは同じである。

杯C I（257）　口径22cm、高さ6.4cm、口縁部のひらいた深い大形の杯で、口縁部内外面を幅狭に横なでし、外面は全体を左から右へ細くヘラ削りし、下部も同方向で粗く削る。底部は大きく左まわり５回に分けてヘラ削りする。

外面全体をヘラ削りする特徴的な調整は、黒色土器を除けばこの杯１点のみである。内面はていねいになでた上に、放射状暗文を密につける。明橙色を呈し、胎土は精良である。

杯C II（258～261）　口径15.9～16.3cm、高さ3.8～４cm、調整・胎土・色調は杯B、皿Bと類似する。やゝ厚手のものには内面に放射線状暗文、底面に螺旋状暗文がのこるものが多い。

杯D（226）　口径15.6cm、高さ４cm、須恵器杯Cに似た器形で、外へふんばる三角形の高台をつける。

杯E（221）　口径18.8cm、高台は欠失する。杯部は深目で、体部内外面は指おさえのあとを幅広に横なでし、外面の下半は細い刷毛目をつける。

蓋A II（262）　口径21.8cm、宝珠形のつまみは横なでし、天井部も指おさえの上をなでるが、全体に磨滅しており調整は不明である。

皿A I（227）　口径34cm、高さ３cm、口縁部が直線的に外反し、内面に浅い沈線が入り、頸部に段をつくる。口縁部内外面を横なでし、底部はヘラ削り、内面はヘラ磨きした大形皿で、出土量はすくない。

皿A II（228）　口径21.8cm、高さ2.9cm、口縁部内外面は横なでし、底部をヘラ削りしたのち口縁部直下から全面をていねいにヘラ磨きする。内面は横なでし、口縁部に放射線状暗文、底面は二重の螺線状暗文をつける。底部と内底面に細い線を５～７本井桁状に刻む。茶褐色を呈し、胎土は精良である。

皿A III（229、230）　口径23.8cm、高さ2.5cm、口縁部が短く外反し、端部は丸く終る。口縁部内外面は横なでし、底部は不完全にヘラ削りし指おさえの凹凸が目立つ。この他、外面をヘラ磨

きしたものもある。

皿BⅠ（231、232）　口径15～16.5cm、高さ1.5～2.5cm、口縁部の横なでが強く段をなして外反する。底部は不調整で、指おさえの凹凸が目立つ。やゝ厚手のものが若干あるが、薄手が多く胎土は皿A類にくらべて砂粒が多い。淡茶灰色を呈するものが多く、口縁端部に付煤した灯明皿に用いたものも少数ある。B類では出土量が最も多い。

皿BⅡ（233、234）　口径15～16cm、高さ1.6～2.5cm、BⅠにくらべて口縁部横なでが幅広いもので、段が不明瞭な器形である。

皿BⅢ（235～237）　口径13～17cm、高さ1.2～2.2cm、口縁部横なでの幅が狭く、端部がやゝ立上る浅で、調整などBⅠ・Ⅱと同じである。

台付皿AⅠ（220）　口径約25cm、高さ4.2cm、大型の皿に外へふんばった長い高台をつけた器形で、磨滅のため調整は不明である。明橙色。

台付皿AⅡ（225）　口径11.2cm、高さ4.6cm、浅い皿部は口縁部内外面を横なでし、以下を指おさえし直立するやゝ太い高台をつける。

台付皿BⅠ（222、223）　口径18.8～19.8cm、高さ3.1～3.6cm、やゝ厚手で外面に刷毛目をつける。222は内面に右まわりの螺旋状暗文が2重にめぐり、223は内面を細くヘラ磨きする。

台付皿BⅡ（224）　口径16.8cm、高さ3cm、皿部が小さく薄手のもので、短く外へふんばる高台がつく。調整・色調など皿BⅢに類似する。外面は明橙色を呈し、内面は暗茶灰色で口縁部が付煤する。なお、BⅠ・BⅡは、灰釉陶器の皿に類似した器形である。

椀AⅠ（238）　口径15.7cm、高さ5cm、口縁部はやや内弯し端部をわずかにつまみ上げており、平底の厚手の土器である。体部は磨滅するが、底部は粗くヘラ削りする。

椀AⅡ（239）　口径10.6cm、高さ3.4cm、小形の椀で口縁部内外面は横なでし、他は不調整である。口縁部に灯芯を置いたため付煤している。

椀BⅠ（240、241）　口径11.7～13.6cm、高さ4～4.6cm、ゆるやかに外反する口縁部内外面を幅広く横なでし、底部は不調整の厚手のものである。淡灰褐色を呈し、粗砂を含む。

椀BⅡ（242～244）　口径12～13.4cm、高さ3.2cm、口縁部が直接的に外反し、調整、胎土はBⅠと同じである。

壺（263）　口径約15cm、やゝ内傾する短い口縁部に丸くふくらむ体部をもつ薬壺である。明橙色を呈し、胎土は精良である。

甕AⅠ（207～209）　209は口縁端部を内側へ折返して肥厚したもので、出土量が最も多い。体部内外面に刷毛目がつく。

甕CⅠ（211）　口径16cm、高さ約19.2cm、端部をつまみ上げた口縁部に、中膨れでやゝ長目の体部をもつ器形である。体部外面は細い刷毛目、内面は粗い刷毛目のあとを下から上にヘラ削りする。

甕CⅡ（210、212～214）　体部上半に最大幅をもつやゝ浅い平底の甕で、口縁端部の形態は一定しない。214は外面全体に細い刷毛目をつけており、ＳＤ313出土の甕（161）に類似する。210、213は刷毛目が粗く、内底面は横にヘラ削りする。

鍋AⅠ（206）　口径36.8cm、口縁端部をわずかに肥厚し、体部に角状の把手をつける。内外面に細い刷毛目をつけ、内底面は横にヘラ削りする。外面は付煤し、明茶褐色を呈する。

鍋BⅠ（204、205）　204は口径22cm、高さ約9.4cmで巻上げ痕がのこり、外面に粗い刷毛目をつける。

205は口径18.4cmで全面に細い刷毛目をつけ、体部下半はヘラ削りする。

鍋BⅡ　図示していないが、Ｂ遺跡出土の121と同形で、調整・胎土・色調は杯Ｂ・杯Ｃ・皿Ｂと類似する。

甑（215）　口縁部と底部の破片がある。口径29.2cmで垂直に立上る口縁端部をわずかに内折し、体部内外面に刷毛目をつけ、上半部に角状の把手をつける。底部は径18cmで、中央に蒸気孔にはさまれた幅5.6cm、厚さ0.7cmの部分をつくる。下半は刷毛目の上を横にヘラ削りし、内面も粗くヘラ削りする。

高杯A（216）　口径20.6cm、高さ10cm、巻上げ成形で、杯部は口縁部内外面を横なでし、稜から下方は横に幅広くヘラ削りする。脚部は筒部を刷毛状具で13角に面取りする。裾部内外面は横なでし、杯部と脚部の接着部をていねいに指なでする。脚部破片の多くはこのＡ類である。

高杯BⅠ（217、218）　218は筒部の面取り幅が大きく、粘土を棒に巻きつけている。裾部は磨滅するが、面取りのヘラ削りは上から下へ向う。出土量はごく少量である。

217は筒部を巻上げ成形し、細い刷毛目をつけ、下から上へ14角にヘラ削りする。

粗製鉢（264、265）　口径15～16.6cm、高さ５～６cm、Ｂ遺跡にくらべて出土量が多く、内面に粗い刷毛目を横につけるものもある。

黒　色　土　器（図版23，第29図）

高向Ｂ遺跡にくらべて出土量はすくなく、椀が10点あるほか、壺か甕の体部破片がある。大半が内黒のＡ類であるが、外面の一部が黒変するものも少量ある。

266は口径16cm、高さ4.7cmの椀で、口縁部内外面を幅狭く横なでし、外面は右まわりで４回で磨く。内面は底面を先ず細く往復して磨いたのち、壁面を磨く。内面全体と口縁部外面全周が黒変する。淡橙色を呈し、胎土は細砂を含みしまっている。

267は口径13.2cm、高さ3.2cmの椀で、外面は口縁部直下以下を右まわりでヘラ削りしたのちていねいにヘラ磨きし、内面もていねいにヘラ磨きする。内面全体と、体部外面の中ばまで黒変している。淡褐色を呈し、胎土は砂粒を含むがしっかりしている。

須　　恵　　器（図版24，第30図）

杯・杯蓋・壺・壺蓋・甕・高杯・水瓶・平鉢があるが、出土量はすくない。

杯A（280、281）　口径14.4～14.6cm、高さ３～3.6cm、底部を右まわりろくろでヘラ切りしたものである。内底面は、水びきのあとを小さく指なでする。

杯BⅠ（276）　口径17.9cm、高さ6.2cm、底部は右まわりろくろでヘラ削りする。体部は水びきの痕が目立ち、底面は指なでする。

杯BⅡ（277～279）　大小があるが、底部は右まわりろくろでヘラ削りする（336）。

杯C（282）　口径16.6cm、高さ5.7cm、水びき成形で体部下半はヘラ削りする。底部はヘラ切りのあとを指なでし、小さい高台をつける。内底面に同心円の叩目文をつけ、その上を指なでする。

杯D（283）　口径16cm、高さ5.4cm、端部を三角形につまみ上げた外反する口縁部で、底部は平らである。

杯蓋AⅠ（284）　口径18.5cm、つまみは欠失するが端部を三角形につまみ出して水びき成形し、天井部は右まわりろくろでヘラ削りする。胎土は砂粒を多く含む。

杯蓋AⅡ（285、286）　つまみは２種類あり、水びき成形で、天井部は右まわりろくろでヘラ削りする。

壺BⅠ（268、296）　268は口縁部を欠くが、長頸壺である。体部上半に稜をつくり、沈線１本をめぐらし、下半は平行叩目文をつけ下方をヘラ削りする。高台は外へふんばった大きなもので、底部はヘラ削りする。体部の稜から上部に灰黒色の自然釉がかかる。

296は口径13cmで、口縁端部は丸く終る。水びき成形で、内面の凹凸が目立ち、内面下部にシボリ目がわずかにのこる。全体に灰白色を呈し、外面に淡灰色自然釉がかかる。

壺D（270）　口径10.2cm、口縁端部を肥厚しつまみ上げている。水びき成形で薄手に作り、体部との接合は二段構成である。内外面に灰黒色の自然釉がかかり、丸い体部がつく器形であろう。

壺E（272）口径約14.2cm、底部は欠失するが、高台がつくものであろう。

壺F（274）　底径約3.4cm、底部に糸切り痕がある。

壺蓋AⅠ（288）　口径14.9cm、高さ4.4cm、薬壺の蓋で、大きい宝珠形のつまみがつく。口縁端部はつまみ上げられてやゝ内傾する。

壺蓋AⅡ（287）　口径12.2cm、高さ3.2cm、水びき成形による小形の薬壺の蓋である。外面全体に暗灰緑色の自然釉がかかる。

甕BⅠ（269）　口径28cm、外反した口縁端部は肥厚し、口頸部に巻上げ成形の痕跡がのこる。体部外面に平行叩目文、内面は細い同心円文がわずかにのこる。口頸部内外面に、暗灰黒色の自然釉がかかる。

高杯（273）　脚径7.5cm、高さ4.5cm、端部がわずかに隆起し、下方を三角形につくる。１点のみ出土した。

平鉢AⅠ（290）　口径29.3cm、高さ約８cm、全体に磨滅するが、底部中央がゆるやかに突出す

る大形の平底鉢で巻上げ成形である。焼成は悪く、小石を含み淡灰色を呈する。

平鉢A II（289）　口径27cm、高さ約8.6cm、290より小形であるが、成形、胎土、色調は同じである。

灰　釉　陶　器（図版24，第27・30図）

椀・皿・耳皿があり、出土量は須恵器よりすくない。

椀（199、291～294）　291は口径12cm、高さ3.1cm、直立する短い輪状高台をつける。胎土は灰白色で、内面全体に淡灰緑色釉がかかり、糸切底である。292は直立する短い高台をつけ、底部はヘラ削りする。全体に厚手で、内面に淡灰緑色釉がかかる。293は底部と体部下半をヘラ削りし、やゝ内弯する長い輪状高台をつける。内面と口縁部・高台の一部に淡灰緑色釉がかかる。294は口縁端部を短く外反し、やゝ外反する高台をつけ、外面の下半をヘラ削りする。内面の中央部を除き淡灰緑色釉がかかる。199は底部に「主」を墨書する。底部はヘラ削りし、内面全体に淡灰緑色釉がかかる。

皿（295）　口径15.4cm、高さ1.3cm、体部下半と底部をヘラ削りし、短くしっかりした輪状高台をつけ、内面全体に淡灰緑色釉がかかる。焼ね焼の痕跡あり。

緑　釉　陶　器（第25図）

椀の破片４と小形壺１のみである。椀は施釉前に内外面をていねいにヘラ磨きし、短い輪状高台を貼りつける。

小形壺（153）　口径3.1～3.3cm、高さ3.1cm、体部上半が強く張って稜をつくり、稜と口縁部の間に一対の把手をつけるが欠失している。手捏でつくり、体部下半は縦に指なでし、口縁部外面と底部を細くヘラ磨きする。全面に淡黄緑色釉がかかり、胎土は灰白色で軟質である。他に類例がなく、祭祀用か。

土　製　遺　物（第31図）

土錘（318～324）　A・B遺跡出土例と同じく、大小二類があり、両端部をヘラ切りしたものもある。322～324はＳＥ315の掘り方出土である。

石　製　遺　物（第31図）

石帯（298）　方形の石帯で、巡方と呼ばれているものである。一辺3.2×3.1cm、厚さ0.58cm。材質は粘板岩である。表面と周縁はていねいに研磨し、滑沢をもつ黒色を呈する。裏面は平滑であるが、周縁を幅狭く磨いて面取りする。装着用の紐孔は裏面にあり、四隅に２孔１対で貫通し８孔ある通有の形式である。

金 属 製 遺 物（第31図）

帯金具（299）　長さ4.25cm、幅3.15～4.1cm、銅製の帯金具頭部で、全面に緑錆が吹き出る。半球形の頭部と方形の尾部からなり、球形部と尾部との境目内外に留金具を挿入する小孔が相対してある。尾部の端部中央が細いのは、使用による磨滅であろう。球形部の内径は3.2cmを測るが

前述の石帯と同寸法であり、同規の革帯の付属品と思われる。

鉄鎹（303）　長さ8.2cm、両端を折り曲げた形式で、下端は欠失する。この他、鉄角釘の破片若干がある。

4．小　　結

高向C遺跡は、少量であるがＳＤ313・312出土の須恵器、包含層出土の須恵器に型式的に飛鳥時代にさかのぼるものがあり、７世紀後半頃既に集落が存在していたことが窺える。次いで、これも少量ながら奈良時代の土師器・須恵器がＳＤ312とＳＢ301～303から出土し、ＳＤ312は竪穴住居址を画するものであろうか。ただ、掘立柱建物址柱穴にも少量奈良時代後期にさかのぼる土師器も出土するので、竪穴と掘立柱建物が併存していた可能性もある。

平安時代では、掘立柱建物址、倉庫址、井戸址があり、数回の建替が考えられるが、桁行方向に一定の企画制がみられる。同時代の集落の中心は、路線西側にひろがることはＢ遺跡と同じである。出土遺物のうち多量の土師器は、宮川の氾濫を蒙っている包含層出土のものとはいえ、平安時代前期の様相を知りうる良好な資料である。

結　　語

1．遺　　物

出土遺物のうち土師器が9割以上をしめるが、奈良・平安時代の土器について述べる。

奈良時代

竪穴住居址（ＳＢ101)、溝址（ＳＤ313）の一群がまとまりをもっている。土師器は杯ＡⅡ・皿ＡⅢ・ＡⅣ・椀ＢＩが多く、いずれも厚手で口縁部内外面を横なでし、底部をヘラ削りする調整手法が特色であり、ヘラ削りには不完全なものもある。この特色をもつ土器は、Ｂ・Ｃ遺跡の包含層からも若干出土するが、手法的に外面をヘラ磨き、底部をヘラ削りし、内面に放射状・螺施状暗文をもつ杯ＡＩ（245）・皿ＡⅡ（228）に後出するものである。杯ＡＩ・皿ＡⅡ・椀ＢＩは、形式的に奈良時代中期と考えられるので[註1]、杯ＡⅡ・皿ＡⅢ・ＡⅣは奈良時代中期以降から後期に編年できよう。ただ、皿ＡⅣは同一手法ながら、口径が小さくなり、底部の凹凸が目立つのでやゝ後出のものであろうか。

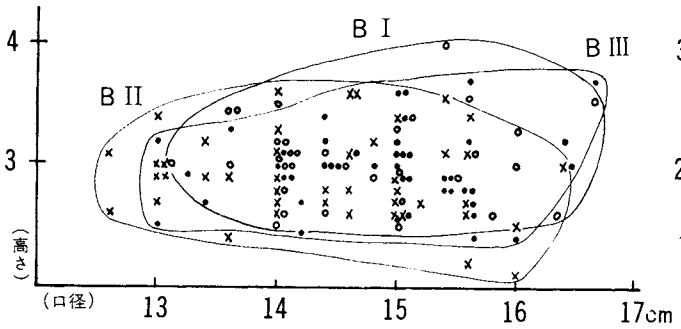
平城宮跡では、奈良時代後期から末期頃の土師器杯・皿・椀類に、口縁部外面から底部の全面をヘラ削りするｃ手法が盛行することが指摘されている[註2]。高向遺跡では、杯ＣＩ（257）が1点のみｃ手法によるものであり、放射状暗文を内面につけている。他にこのｃ手法による杯・皿・椀類が全くみられないことは、高向遺跡にこの時期の土師器が含まれていないことを示すものかもしれない。

一方、伊勢地方北部の智積廃寺[註3]・寺垣内館址[註4]出土の土師器杯にｃ手法のものがある。それ故、ほぼ同時期の高向遺跡にｃ手法がほとんどみられないことを、伊勢地方南部の地方色を示すものかとも考えられる。須恵器では、杯類は直に編年しえないので除外しても、奈良時代後期に比定しうる甕（125、128、130)、瑞（127）があり、伊勢地方南部における土師器のｃ手法の下限と、後述するｅ手法の上限と下限についての解明は今後の課題である。

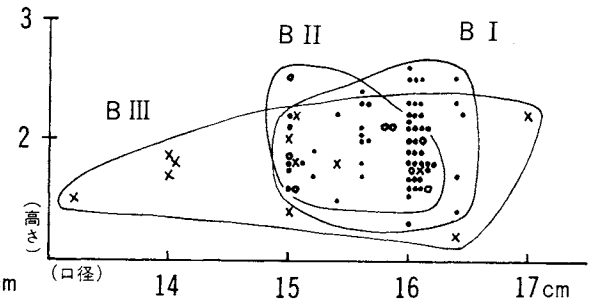
平安時代

平安時代の土師器は、Ｂ・Ｃ遺跡の包含層から多量に出土した。とくに杯ＢＩ・ＢⅡ・ＢⅢ、杯ＣⅡ、皿ＢＩ・ＢⅡ・ＢⅢが、8割以上をしめている。この一群の土器は、口縁部内外面を横なでし、体部外面は製作時の指おさえの凹凸が目立つ不調整のもので、器形や胎土、色調も共通性がみられ、平城宮跡で平安時代初期を中心とする時期に盛行するｅ手法とされるものである[註5]。

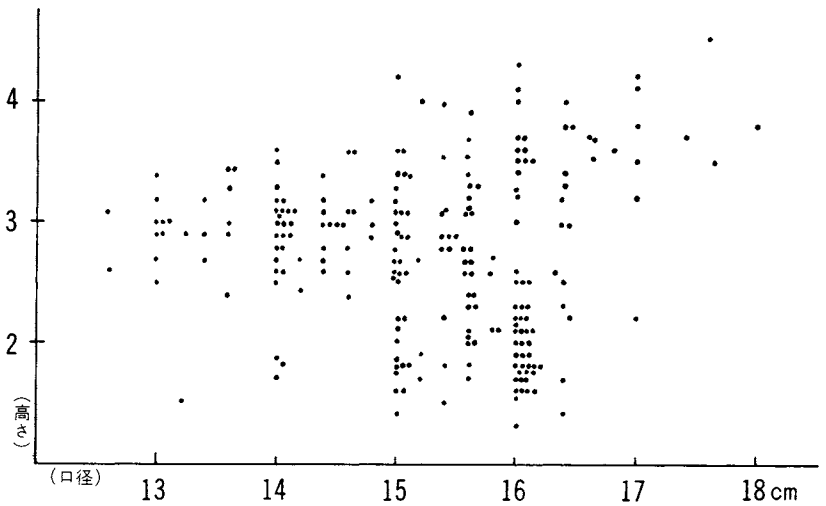
この特色ある土器を最も多量に出土した高向Ｃ遺跡のＭ—95地区を抽出して、法量、器形別に細分を試みた。



第５表　土師器杯ＢＩ～Ⅲの法量



第６表　土師器皿ＢＩ～Ⅲの法量



第７表　高向Ｃ遺跡M95地区　土師器法量と規格性

その結果、既述の細分を決定しえたのであるが、以下若干の特色を指摘しておきたい。（第５、６、７表）

杯ＢＩ・ＣⅡは、やゝ厚手で、後者には内面に放射線状暗文をもつものがあり、形式的にやゝ古いものと考えられる。皿Ｂは３分類しうるが、口径と高さを比較するとＢＩ・ＢⅡとＢⅢの２群にまとまる。この２群は、口縁部横なでの差から生じたもので、皿ＢⅢでは器形の倭少化がみられることも併せて、皿ＢⅢをやゝ後出のものとしうる。

これらｅ手法の土器に、若干の時間差を推定したが、破片を含めて数量を比較してみた。（第８表）

すなわち、大体の比率として杯Ｂ：杯Ｃ：皿Ｂは２：１：１となる。そのうち、やゝ厚手の杯ＢＩ、やゝ厚手で暗文をのこす杯Ｃの古い一群、さらに薄手で倭少化した皿ＢⅢを除外してもその比率は既ね２：１：１となる。

以上の比率は、供膳形態以外の使用を考えに含めてみても、ほぼ日常食器類の供膳形態を表わすものと考えられ、杯Ｃを「椀」とすると、杯２：椀１：皿１の比率を示し、この時期の宮廷以

名称 / 類別	杯 B	皿 B	杯 C	
I	83 (29%)	**80** (76%)	や、厚手（暗文）	26 (19%)
II	**108** (38%)	**13** (12%)	薄手	**109** (81%)
III	**89** (33%)	13 (12%)		
全体	280 (54%)	106 (20%)	145 (26%)	
類別	**48%**	**22%**	**29%**	

第８表　M95地区土師器数量

外の供膳形態の一つとしうるのではあるまいか。また、杯Cにのこる暗文は、使用時の機能をなお製作段階で認識していたことを表わすものと考えられる。このことは、第７表にみた相互の法量にみる規格性が、なお平安時代前期に遺存していたことを示すものとして、平城宮跡において指摘された土師器生産の時期的変遷[註6]と呼応する現象として、伊勢地方南部でも指摘しうるものである。

一方、須恵器、・灰釉陶器・緑釉陶器については、愛知県猿投窯、尾北窯の編年が指表となる。

灰釉陶器では、出土量はすくないが形式的に高台が短く直立するものと、やゝ長く内弯するものがあり、前者は９世紀中期の折戸10号窯形式[註7]、皿が出現していることを含めると後者は10世紀中期から後期（平安時代中期）の黒笹14号窯形式[註8]に類似する。一方、須恵器については、８世紀後期から９世紀中期の四日市々岡山１号[註9]・２号窯址[註10]出土例に近い。以上から、高向遺跡の土器を包含層出土遺物としていちがいに対比しえないかもしれないが、伴出する多量の土師器が共通するｅ手法をとることから、編年的に10世期後期頃の灰釉陶器の一群のみが混入したものとは考えられないのである。したがって須恵器、灰釉陶器は、すくなくとも９世紀中～後期の平安時代前期に編年しうるものと考えたい。

緑釉陶器については、Ｂ遺跡出土の陰刻花文をもつものが注目される。猿投窯では、陰刻文様をもち、輪状高台をもつ灰釉陶器は、10世紀後期から11世紀前半に盛行したといわれている[註11]。灰釉と緑釉の相違があるにしろ、この緑釉陶器を平安時代中期とした場合、土師器、須恵器、灰釉陶器の編年と約１世紀の差が生じることになる。

平城宮跡東三坊大路側溝の出土遺物の観察から、猿投窯の編年がさらにさかのぼるか、または猿投窯で11世紀とされている陶器の生産が、既に９世紀に畿内で始っている可能性について問題提起されている[註12]。

この東三坊大路側溝出土の土師器・杯・椀・皿はｃ手法で製作されており、９世紀前半と考え

られているので、c手法が杯CⅠ(257) 1点のみの高向遺跡出土の土師器群は、前述のように9世紀前半以降に編年するのが至当である。また、同じことは黒色土器が形式的に類似することからも考えられる。[註13] 前述のごとく土師器e手法の下限がなお不明な現在、早急に判断しえないが、また、畿内中枢部と伊勢地方南部における地域差を考慮するとしても、奈良時代以前を除く高向遺跡の多量の土器群を平安時代中期に編年し難いと考えるものである。

なお、畿内で生産された緑釉陶器の伊勢地方への搬入の一契機として、続日本後紀承和12年(845) 6月条の「癸未。勅。令下二齋宮寮頭幷助一撿中一校大神宮幷多気度會兩神郡雜務上。自今以後。立為一。」を無視し難いと思われる。

2. 集落の変遷

前述のように3遺跡は約180mの間隔をもって営まれており、その中間地域には当初の試掘によりなんら遺構・遺物を検出していない。それ故、すくなくとも奈良時代から平安時代前期の掘立柱建物址の主要な建物が、一定の方位に柱列を揃えていることを、この地域がより大きな土地区画に基いて設定されていたのではないかとも考えられる。しかしながら、単なる方位の一致乃至近似のみでは、各集落のまとまりを規制する主因とするにはきわめて根拠が弱い。

この時期の集落の性格を窺う上で、B・C遺跡出土の緑釉陶器と、C遺跡出土の石帯・帯金具の出土が注目される。同規の石帯が、6位～7位の下級官人が着用するものとされる平城宮跡の最近の研究成果[註14]からすると、高向遺跡においても下級官人の存在が推定しうる。また、同じC遺跡では井戸址をはじめ包含層中から、少量ではあるが同一の墨書銘を記す土師器・灰釉陶器が出土した。

以上を総合して、高向遺跡の一定部分が一般的集落というよりも、むしろ旧高向郷における官衙的性格を持つ集落として規定しておきたい。

高向郷については、現地名である御薗村が旧神宮領の「御薗」がそのまま踏襲されたとはただちに決し難い。ただ、高山寺本『和名抄』の度會郡郷名中に「多可无古」[註15]とあり、度会郡に同じ地名が他に存在しないことから、現在の御薗村高向の地に比定しうるものである。また、鎌倉時代の神宮領を記す『神鳳抄』[註16]にも「高向郷」があり、高向周辺の地名も現在残っているので、平安時代からすでに高向郷として存在していたことはまず誤りない。

一部では飛鳥時代に始った高向地域への定着は、奈良時代の竪穴住居址、小溝址などの形成を経て、平安時代には下級官人層をも含めた人々の居住する地域に変質していったものと思われる。ただ、B・C遺跡では鎌倉時代の集落の存在を見出していない。おそらく幾度もの宮川の氾濫が、集落の移転を余儀なくさせたのかもしれない。

鎌倉時代に入ると、A遺跡が生活の場として再登場する。この時期の住居址については明確にし難いが、室町時代をも含めた多量の土師質甕（鍋）の存在は[註17]、県下の中世集落遺跡から広範に出土していることからも、同一の日常雑器を使用しうるほどの村落への変遷を示しているのかも

しれない。

ＳＫ116出土の鉄滓は、中世村落における野鍛冶の一端を示すものといえるし、渥美・知多・瀬戸地方から搬入された多くの山茶椀類の日常雑器としての使用なども一般的である。

室町時代中頃の文明６(1474)年には、宇治山田の御師榎木蔵家から、高向郷々民11名が連帯して借金をしている。この頃には神宮の外港として隆盛をきわめた大湊の会合衆、門前町としての山田の三方衆などの自治組織と同じ郷民の惣的結向が、この高向郷にも成立していたのである。[註18] おそらく、その一端がＡ遺跡と重複する地域を含んでいたことが推察される。御薗村高向地区所有の年代不名の古絵図には、字上万條の地域に「古屋敷」という記載がある。おそらく、この「古屋敷」も室町時代以降における高向地区の集落の変遷の一端を示すものといえよう。

以上、高向Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡の調査結果を概括し集落の変遷を考察したが、将来宮川下流域における旧神宮領への考古学的究明を進める上で、この高向遺跡は重要な位置をしめるものである。また、推定斎王宮跡・古里遺跡などの実証的解明が今後進められるなかで、古代から中世にかけての畿内中枢地域、東海地域との関連についても、高向遺跡は政治的・文化的に看過しえない位置をしめるものと考えられる。この点で、既にバイパス路線下に埋没した高向遺跡の周辺の遺跡や、斎王宮跡・古里遺跡の調査と保存が急務であることを痛感するものである。

註

1.『平城宮跡発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所　1962
2. 前掲　註１
3. 小玉道明「智積廃寺」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会）　1970
4. 下村登良男「寺垣内館址」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会）1970
5. 田中琢『平城宮跡発掘調査報告Ⅳ』Ⅴ－２遺物　奈良国立文化財研究所　1965
6. 前掲註５、田中琢「古代・中世における手工業の発達―畿内」（『日本の考古学』Ⅳ　河出書房）　1967
7. 楢崎彰一ほか「黒笹・折戸地区の調査」（『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会）　1961
楢崎彰一・岩野見司・戸田紋平・若杉敬「古代・中世における手工業の発達―東海」（『日本の考古学』Ⅳ河出書房）1967
8. 前掲　註７
9. 山沢義貴「岡山古窯址群第１号窯」（『四日市市埋蔵文化財調査報告』四日市市教育委員会、四日市遺跡を守る会）1966
10. 小玉道明・山沢義貴「岡山古窯址群発掘調査報告」（『四日市市埋蔵文化財調査報告』5　四日市文化振興会）1971
11. 楢崎彰一『猿投釉』平凡社陶器全集31　1966、前掲　註７
12. 高島忠平「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」（『考古学雑誌』第57巻第１号）　1972
13. 前掲　註12
14. 奈良国立文化財研究所　佐藤興治氏の御教示による。
15. 池辺彌『和名類聚抄郷名考證』吉川弘文館　1966
16. 『群書類縦』巻第９、神祇部９
17. 鎌倉時代以降、神宮領経営（御薗、御厨）による消費ルートの確立が、山茶椀の流入を一層盛行させたとともに、在来の土師系工人集団の日常煮沸用土器生産への転換を保証し、製品の広汎な普及をもたらしたものと思われる。
18. 豊田　武『増訂　中世日本商業史の研究』岩波書店　1966
萩原龍夫『中世祭祀組織の研究』吉川弘文館　1962

Ⅷ 山 田 遺 跡

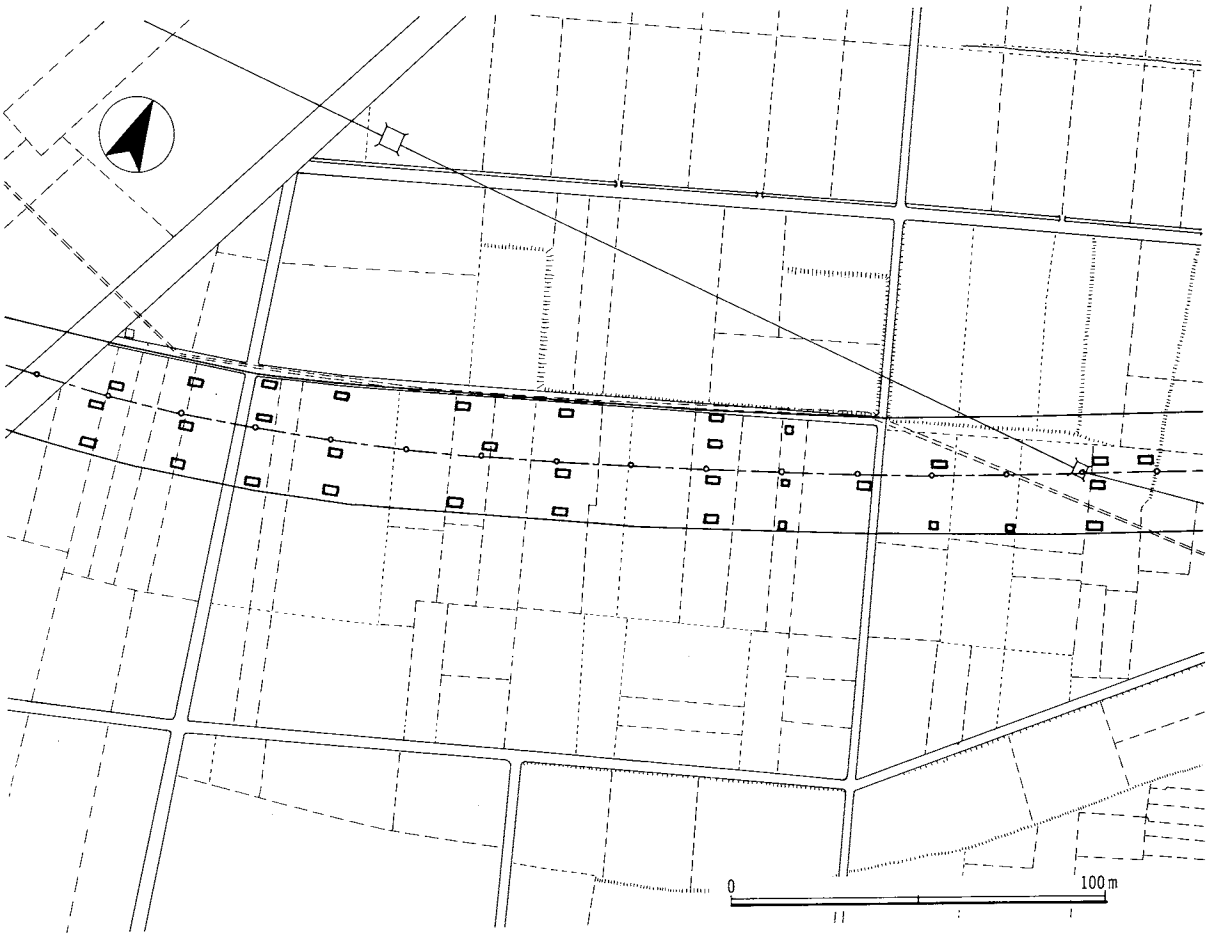
1．調 査 の 経 過

山田遺跡は、昭和46年７月三重大学歴史研究会によるバイパス路線地域分布調査によって発見された。当初計画では、高向遺跡の調査に引続き昭和47年度に本調査を実施する予定であり、同年５月に試掘調査を実施した。

その結果、40ヶ所にトレンチを設定したがなんら遺構、遺物を検出することができなかったため、試掘調査にとどめた。

2．位 置 と 地 形

山田遺跡は、高向Ｃ遺跡の東方約900ｍにあり、御薗村農協前の東側から中部電力山田変電所の間、バイパスセンターラインNo.109～No.129の東西約400ｍ、南北40ｍ、面積約16,000m²にあたる。現状は水田、畑地で、標高2.1～2.4ｍのやゝ西に高い東西に連らなる細長い台地状を呈し、北側と南側へゆるやかに傾斜する地形である。行政的には、度会郡御薗村大字長屋字桜本933～1,037に属する。



第15図　山田遺跡・立地と発掘区

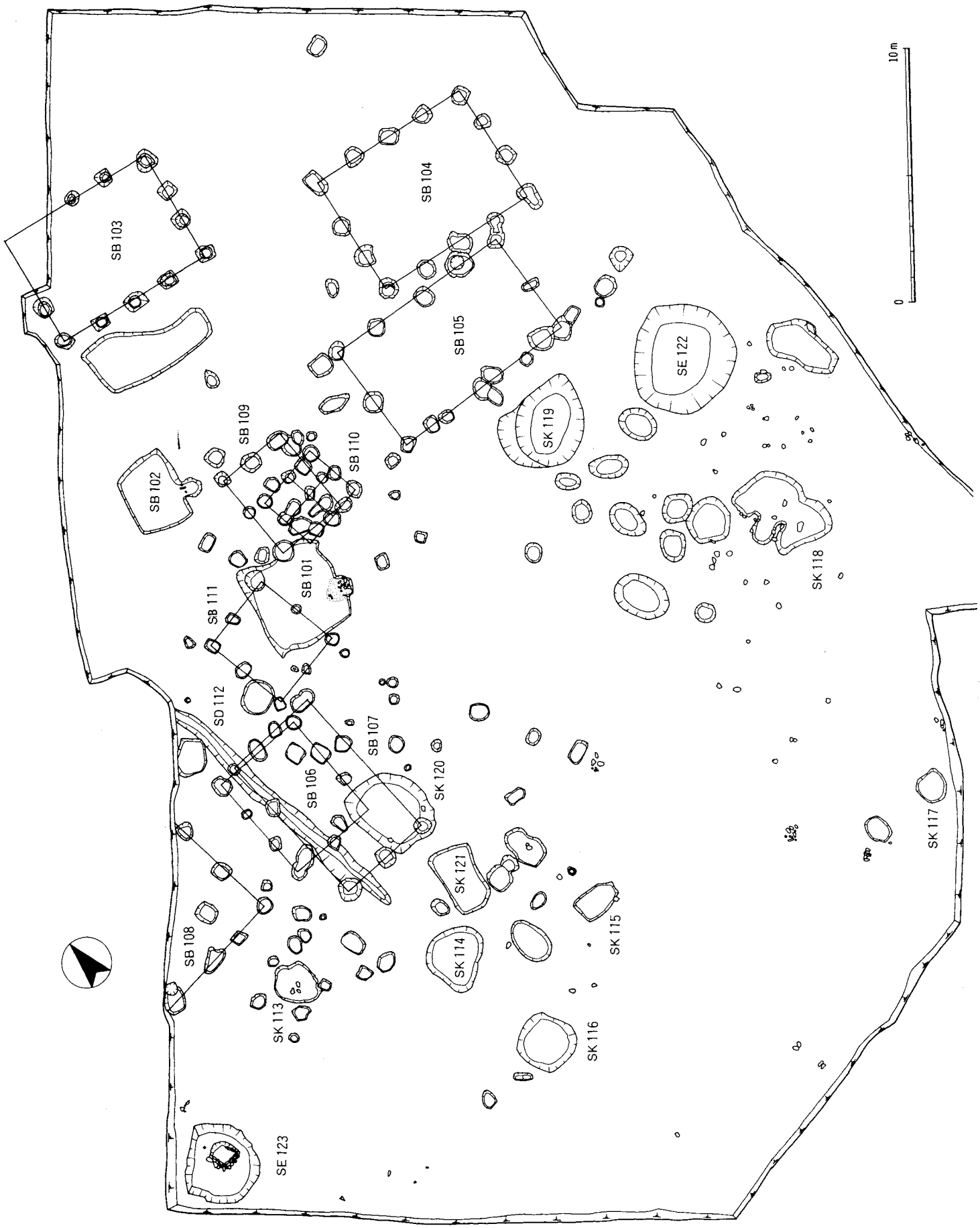
3．試掘調査の結果

分布調査によれば、中世の土師質鍋・山茶椀の小片がほぼ全域にわたって少量分布し、とくに東寄りにある高圧線鉄塔の周辺部に集中することが注意されていた。

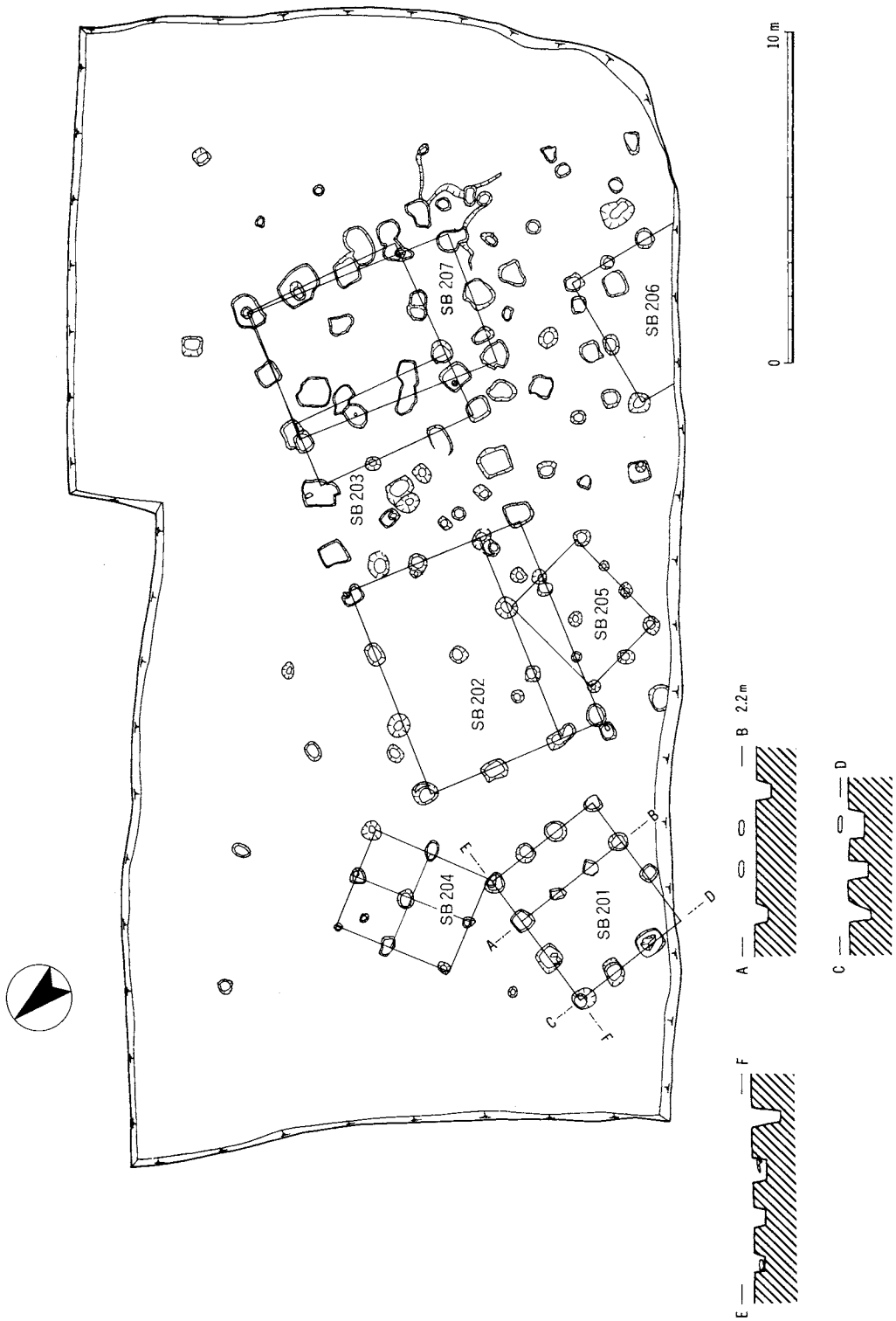
試掘調査は、未買収地域を除き原則的に東西20mごとに路線幅の南北に3～4ヶ所のトレンチ（2×4m）40ヶ所を設定した。その結果、南側全域にわたって表土下約20～50cmで礫層に達し、その間の茶褐色～茶黒色砂質土層にはなんら遺構・遺物を検出しなかった。礫は角の丸い直径10～15cmが最大で、全体に北に浅く南に深い状態で分布していることを確認した。なお、分布調査で土器が表面に密集していた地域においても、表土下約60～70cmで茶褐色に酸化した砂礫層に達した。

また、バイパス路線の北側に平行して、宮川用水路が東西方向に埋設され、ほとんど攪乱されていた。

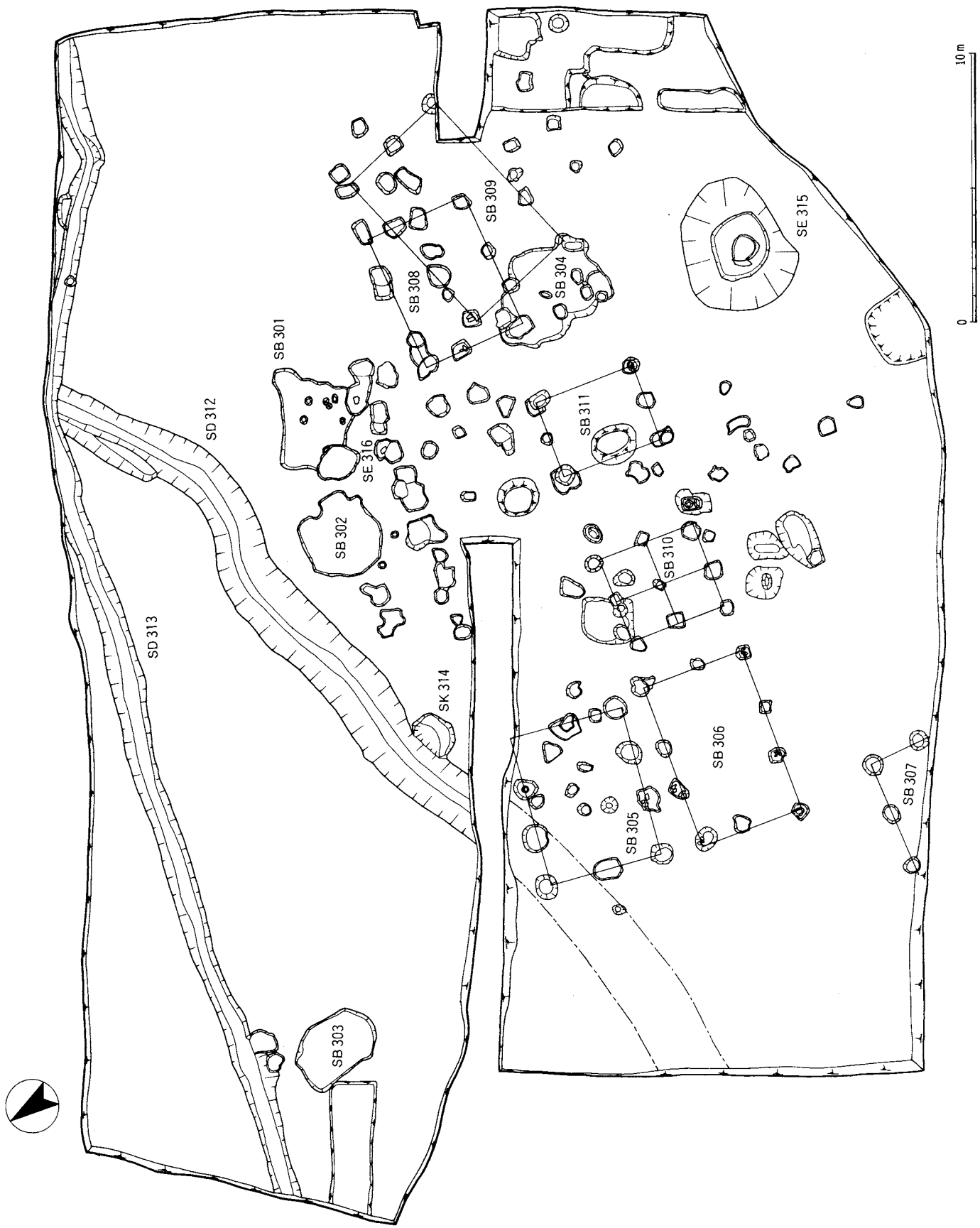
以上の結果から、この地域一帯は旧宮川の支流もしくはその氾濫原であり、中世の土器の分布は、おそらくさらに西方から流された二次的堆積の可能性が強いものと思われる。



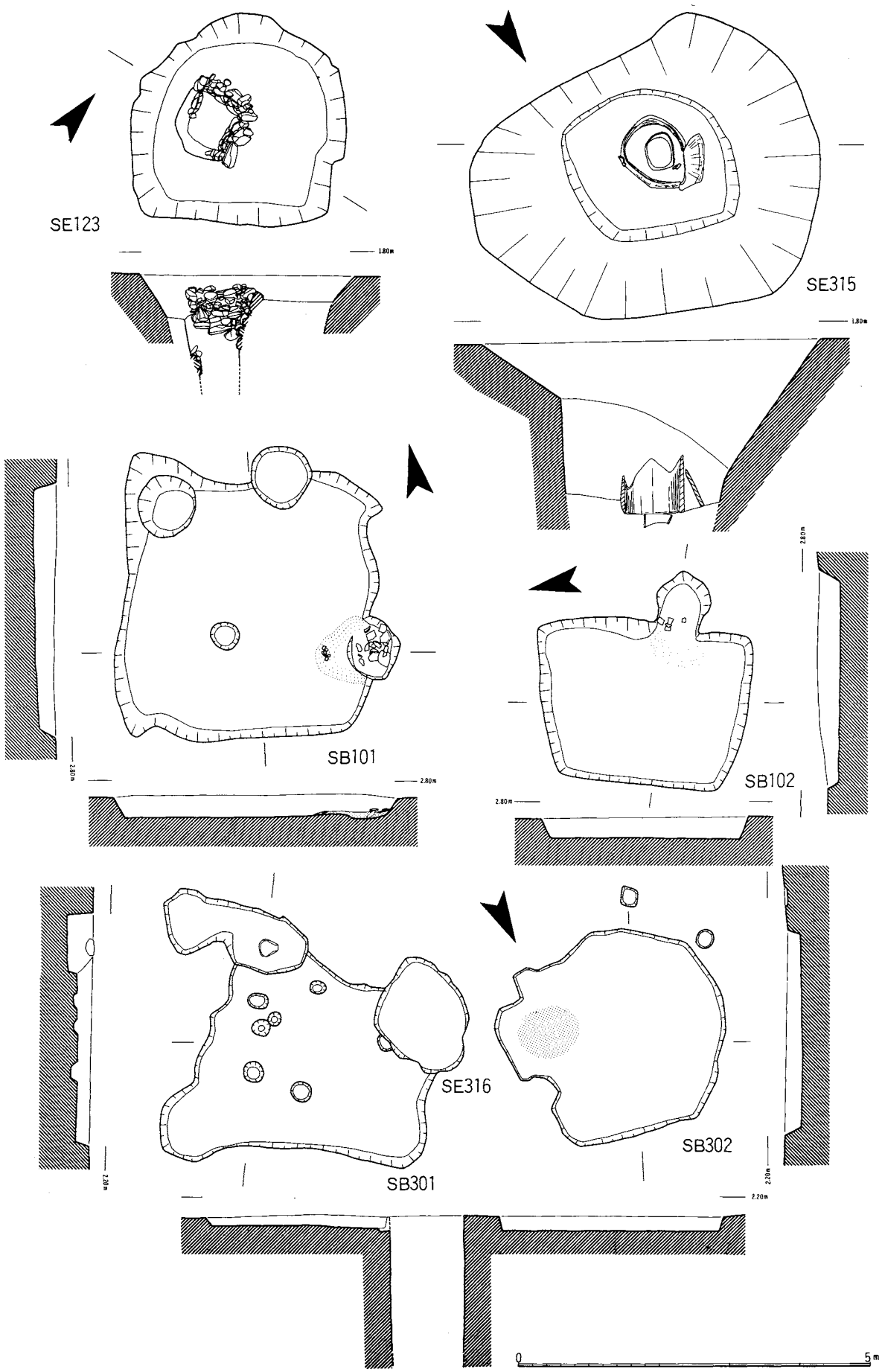
第16図　高向A遺跡　遺構平面図



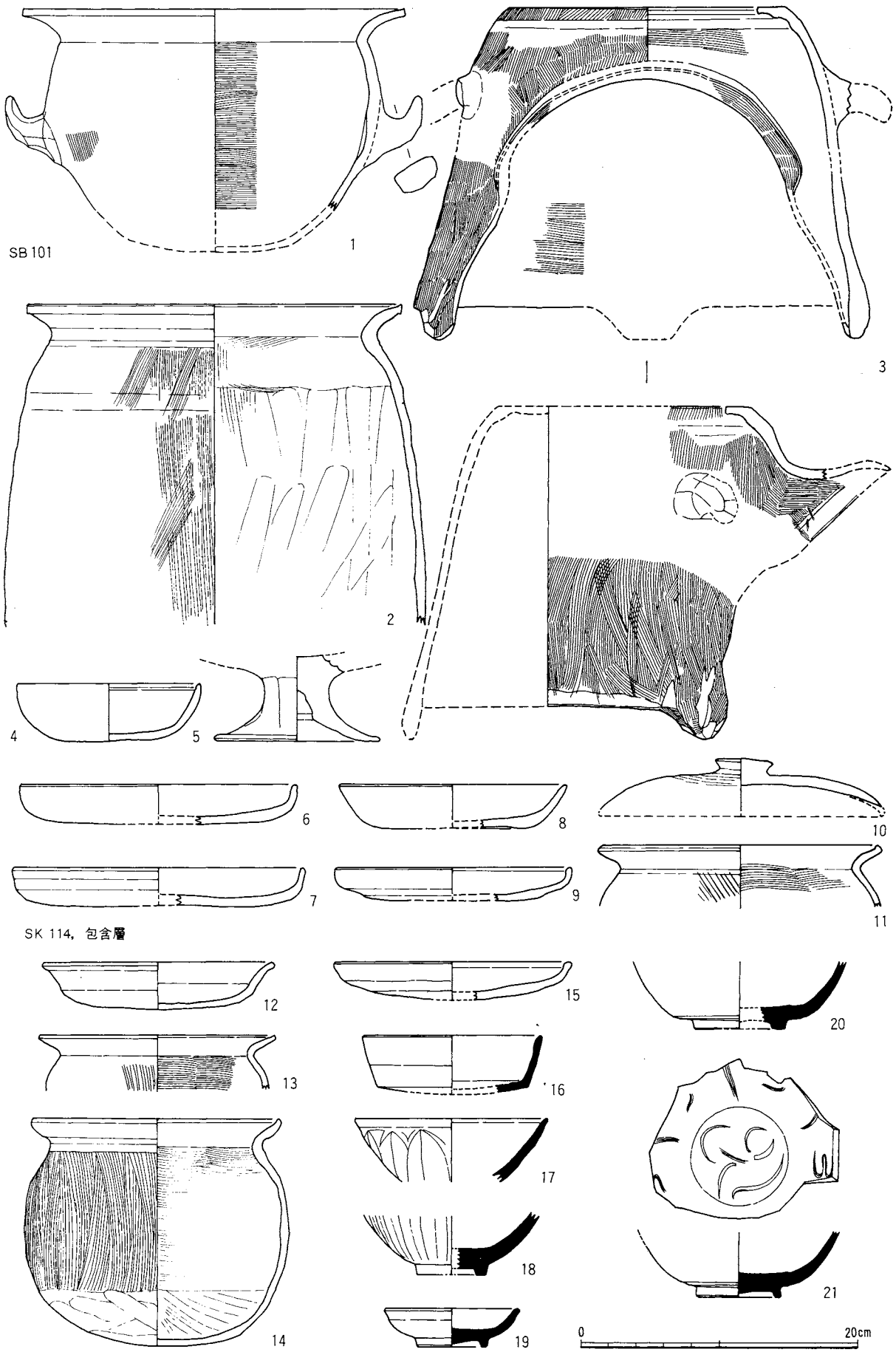
第17図　高向Ｂ遺跡　遺構平面図



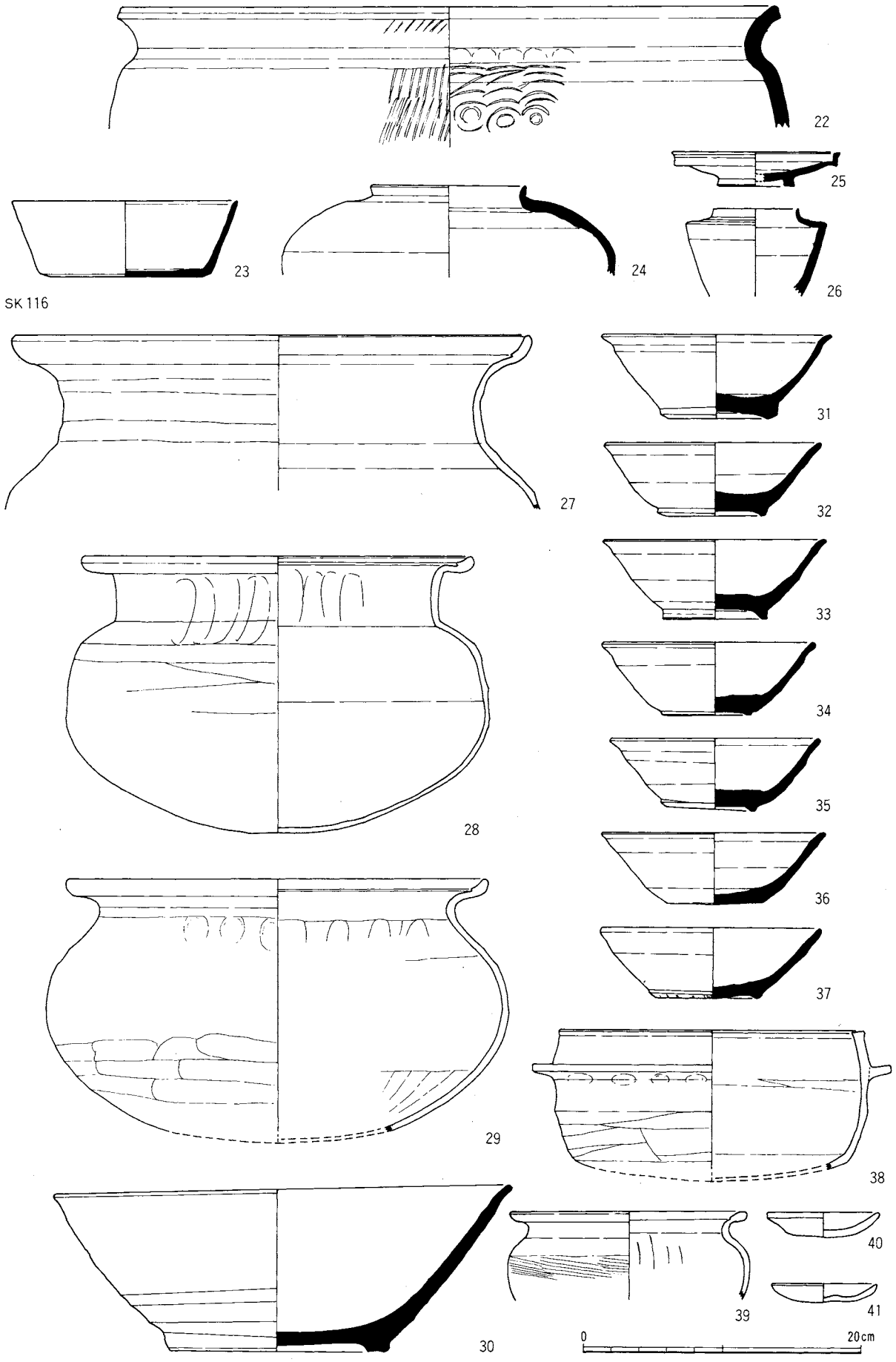
第18図　高向C遺跡　遺構平面図



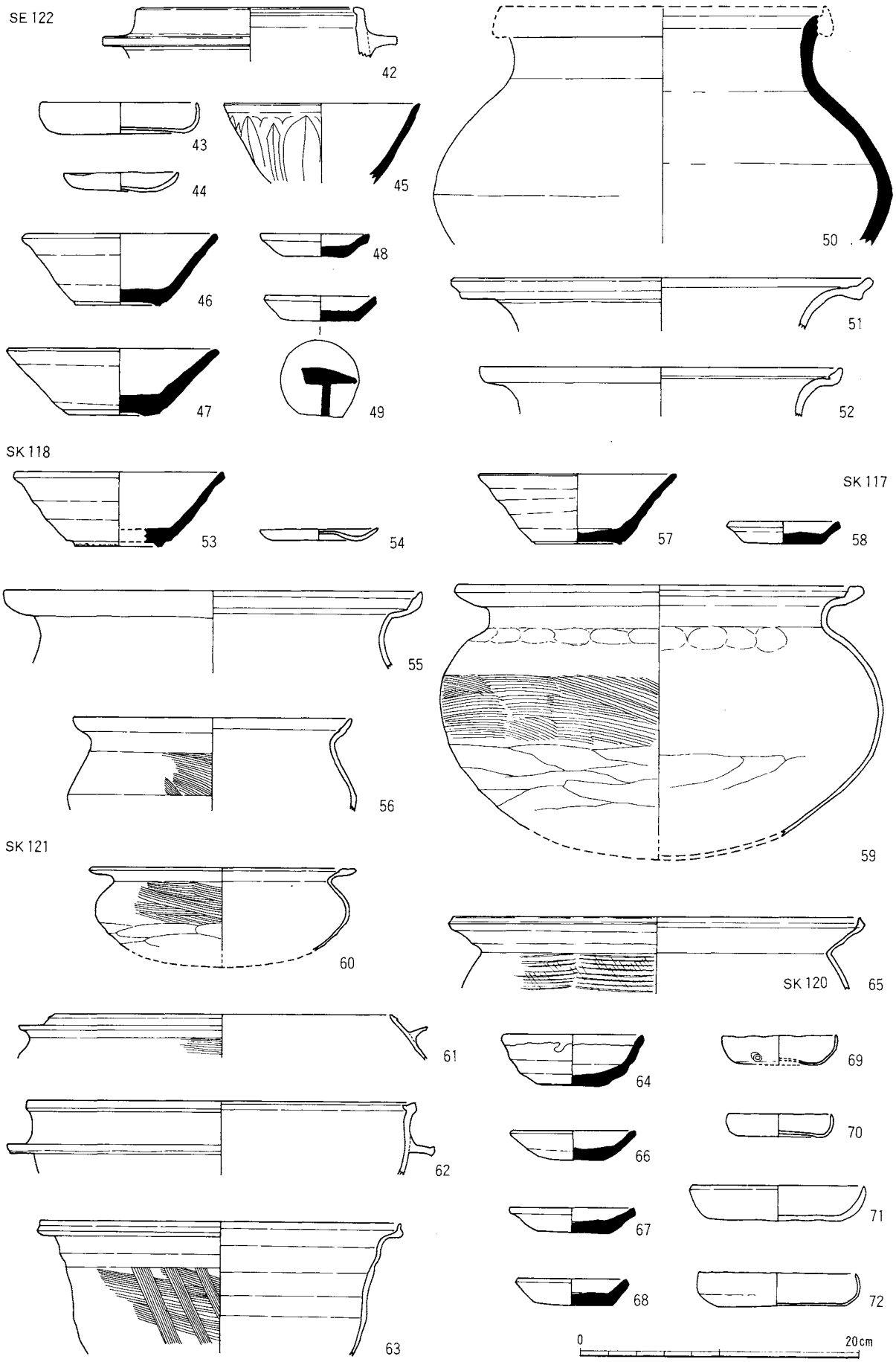
第19図　高向A・C遺跡　SB101.102.301.302, SE123.315.316実測図



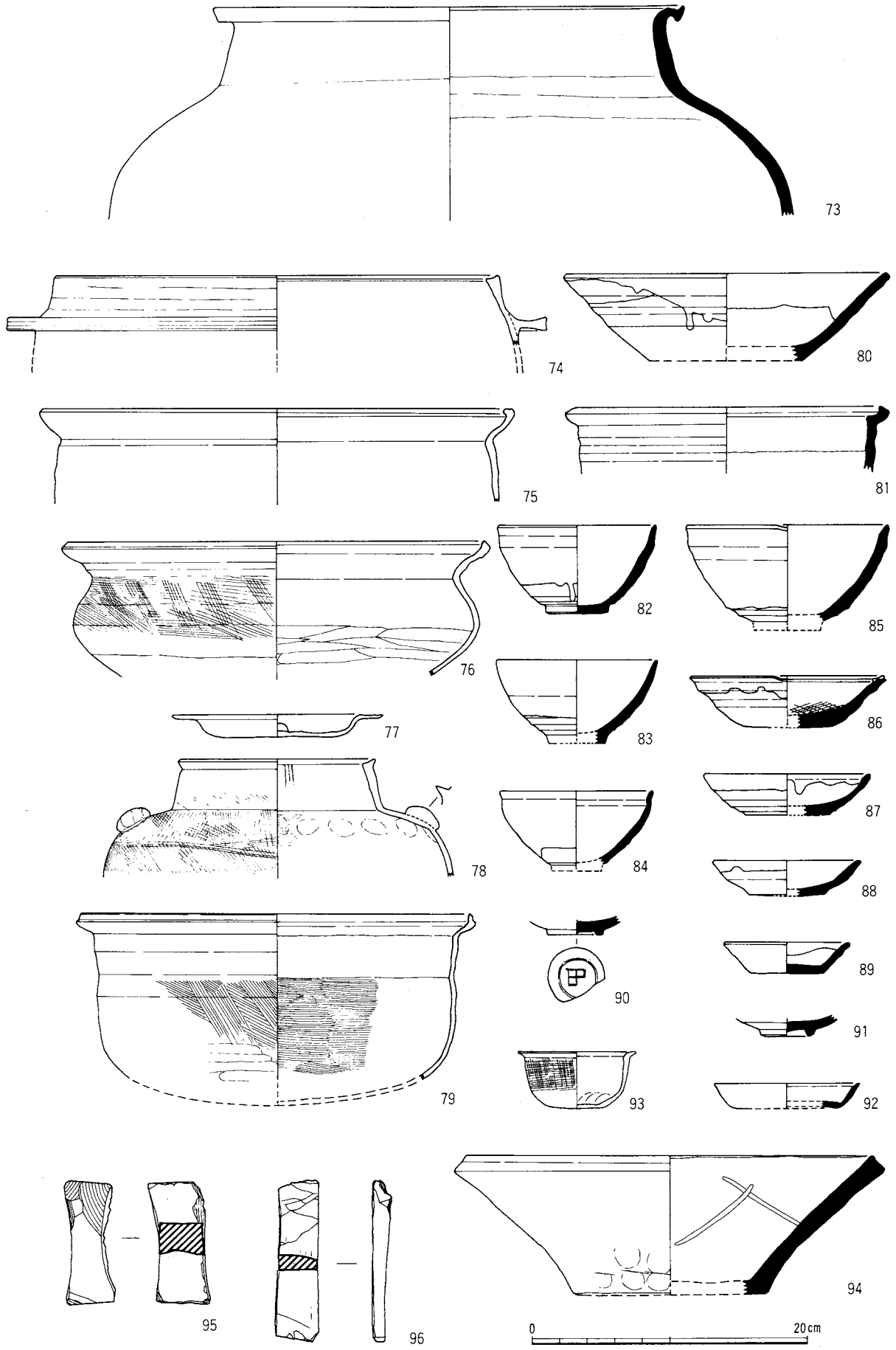
第20図　高向A遺跡　SB101, SK114, 包含層出土土器実測図（3—1：6）



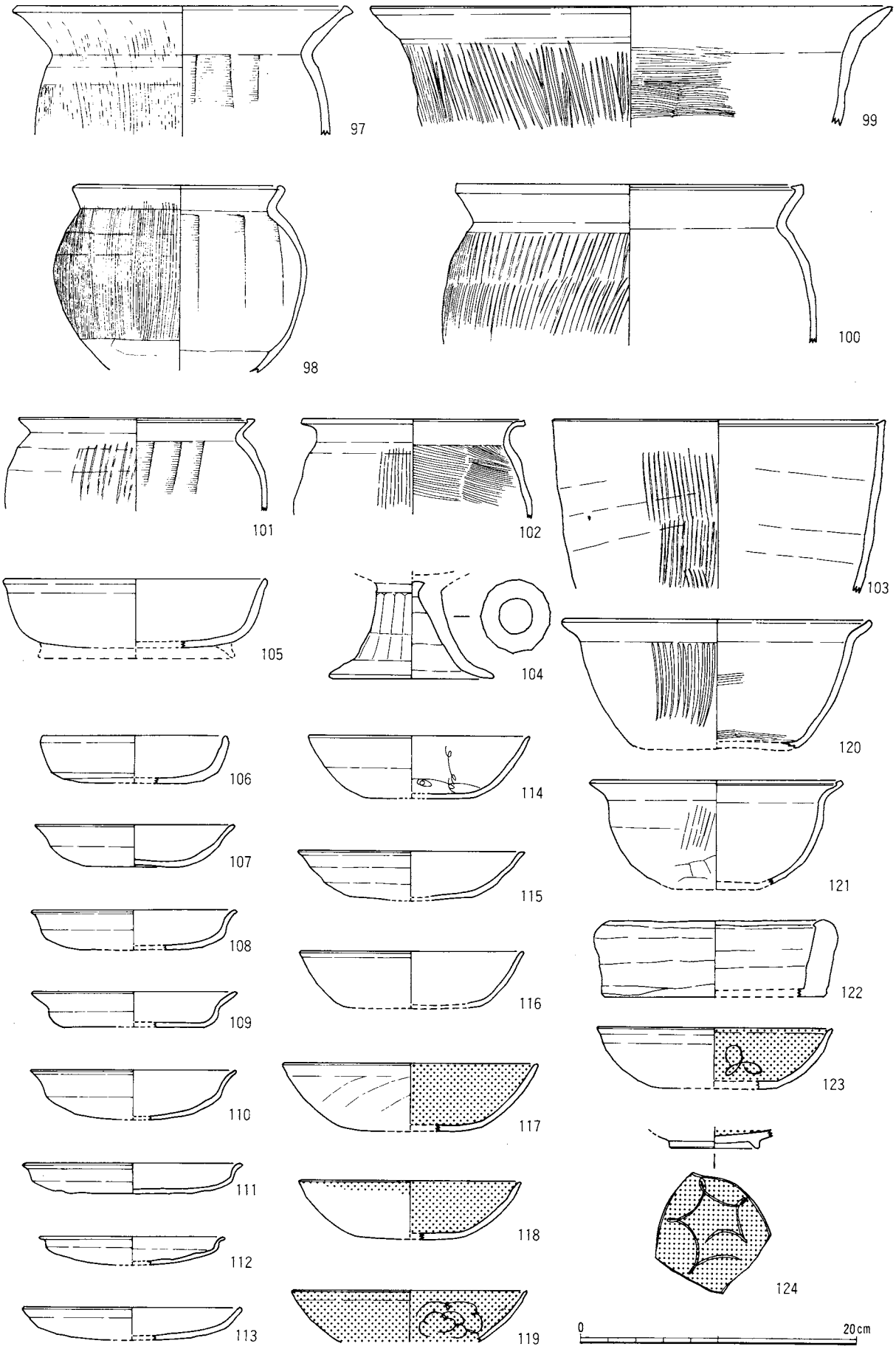
第21図　高向A遺跡　SK116出土土器実測図



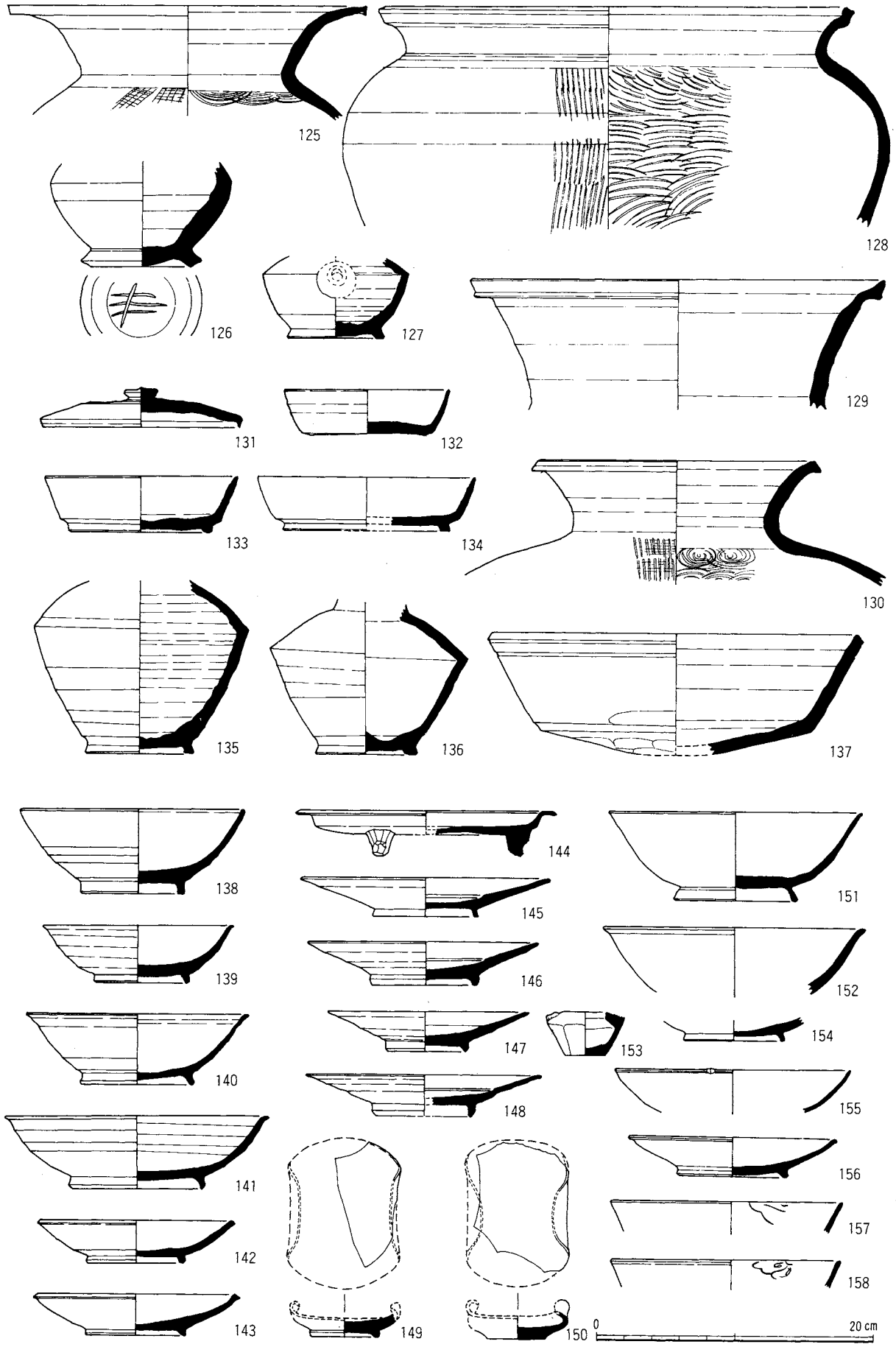
第22図　高向A遺跡　SE122, SK117・118・120・121包含層出土土器実測図



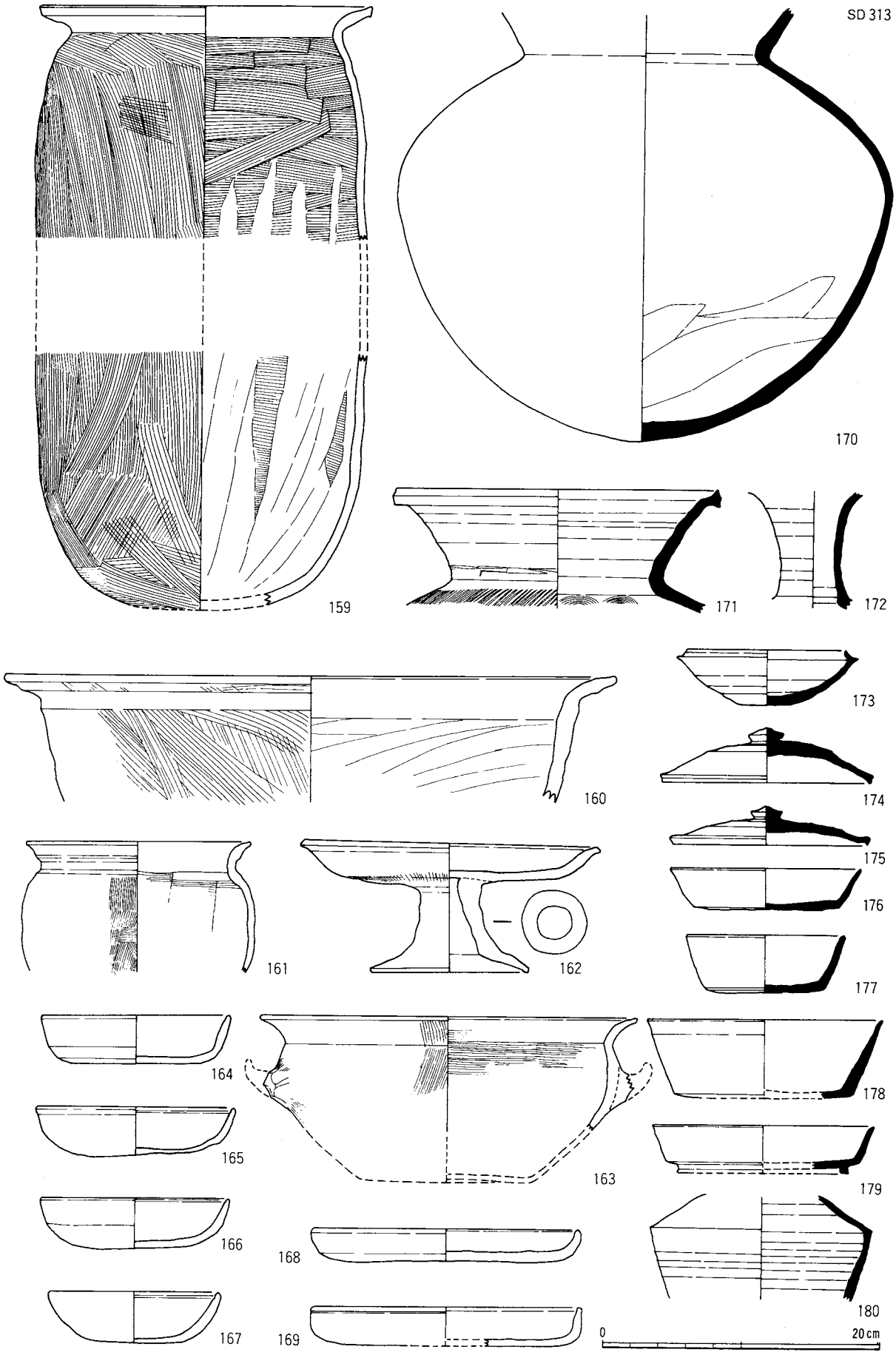
第23図　高向Ａ遺跡　包含層出土土器・砥石実測図



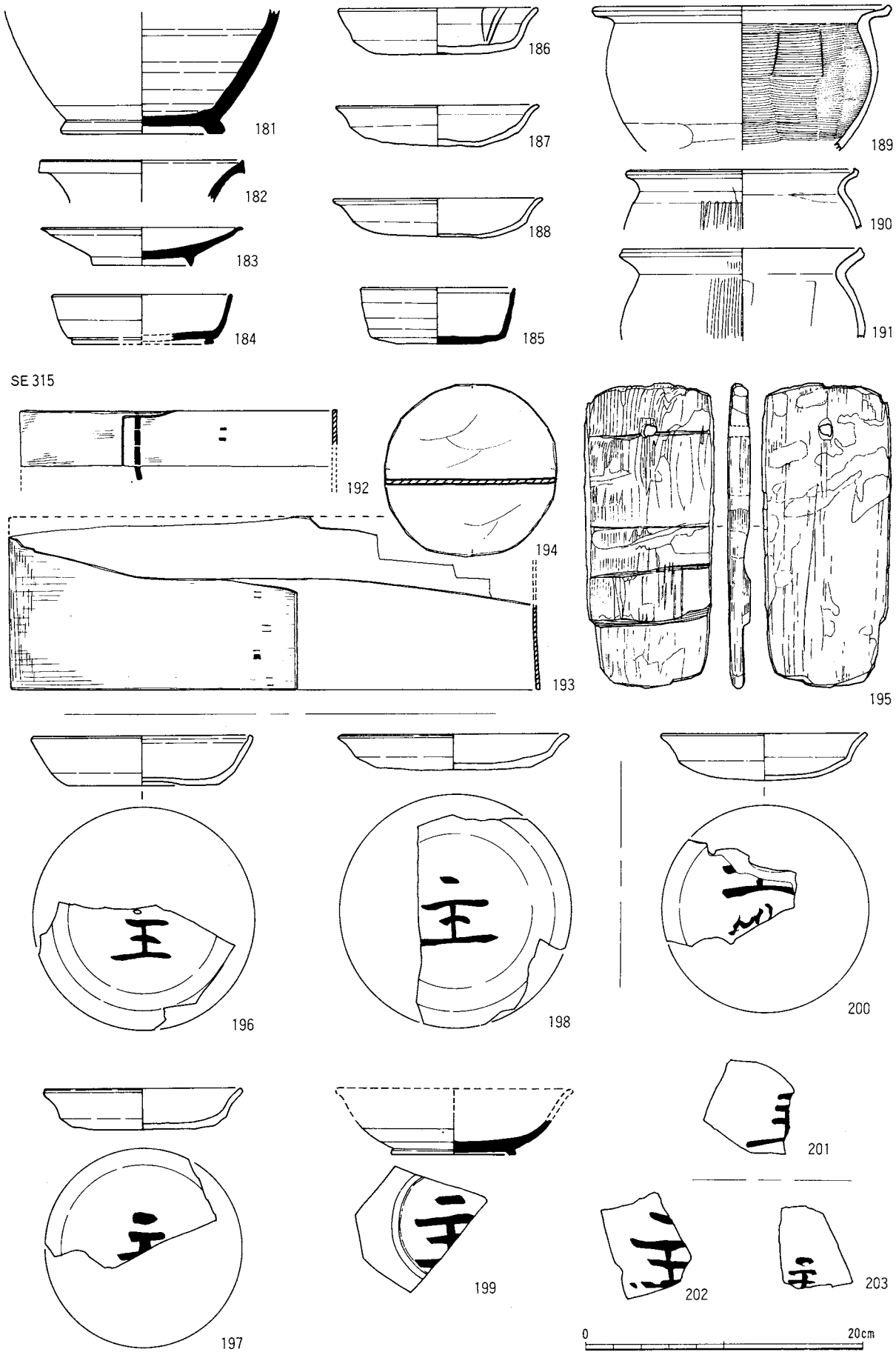
第24図　高向Ｂ遺跡　包含層出土土器実測図



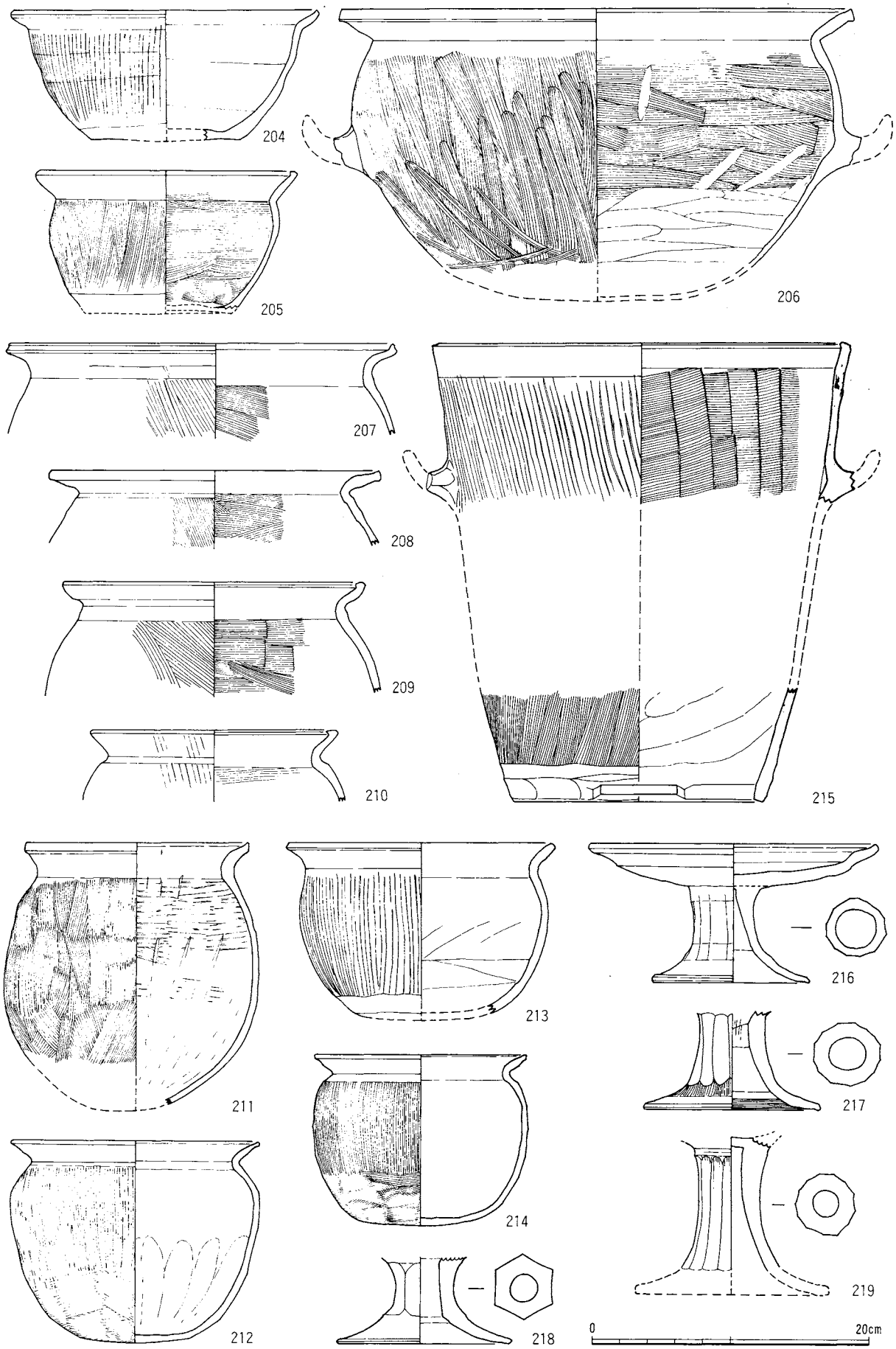
第25図　高向Ｂ遺跡　包含層出土土器実測図



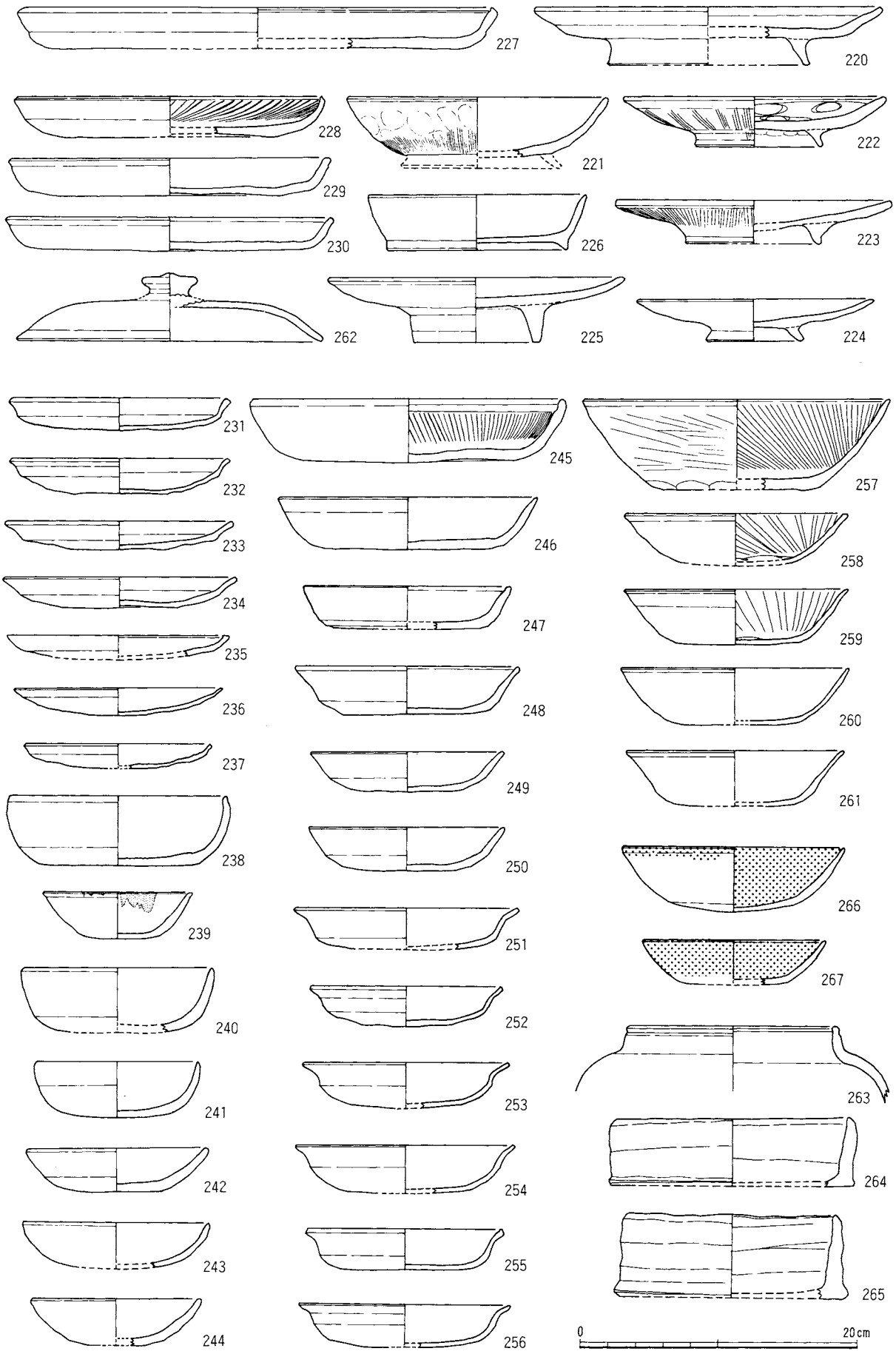
第26図　高向C遺跡　SD313出土土器実測図



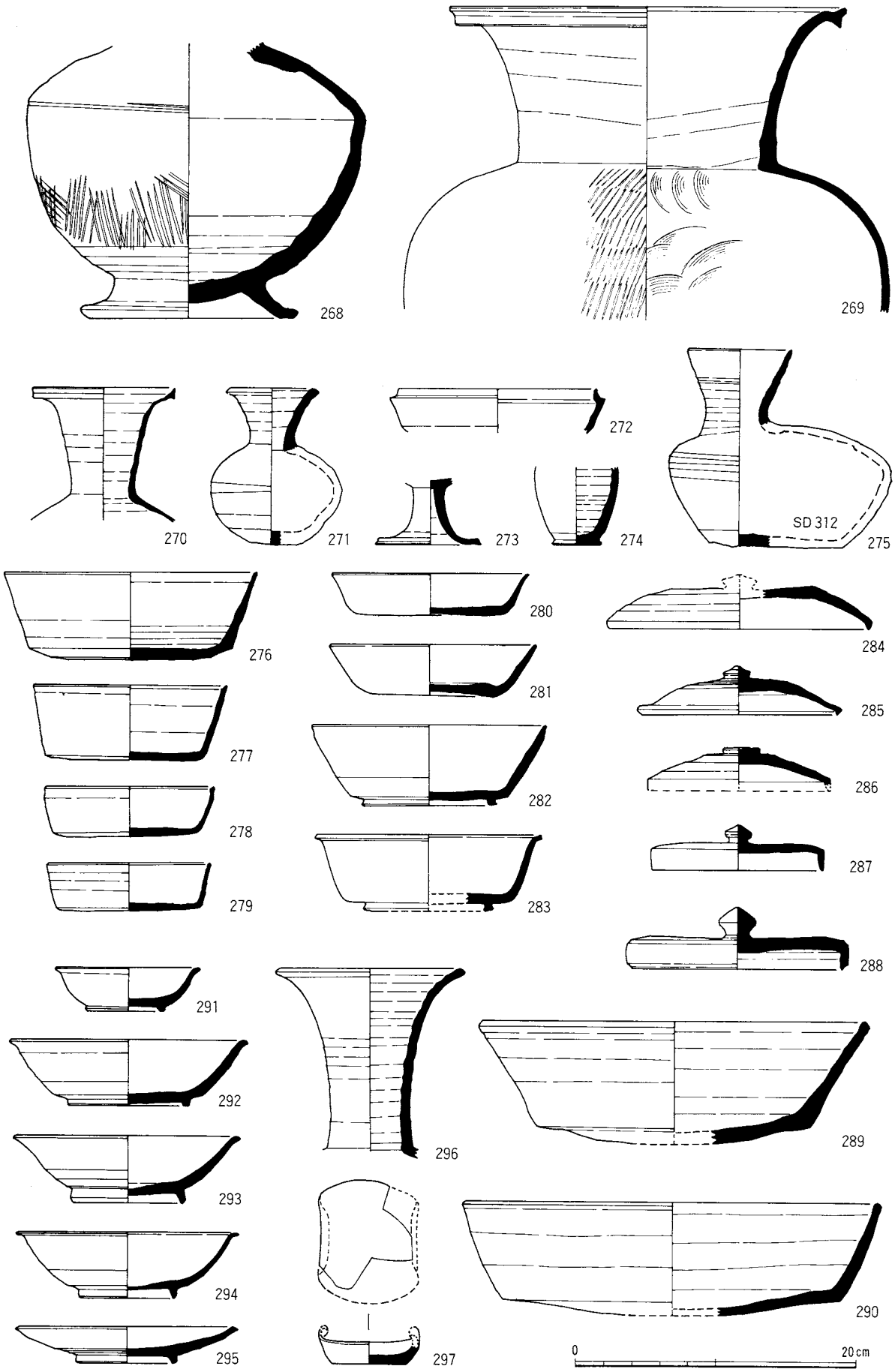
第27図　高向C遺跡　ＳＥ315,包含層出土土器実測図（192･193―1：6）



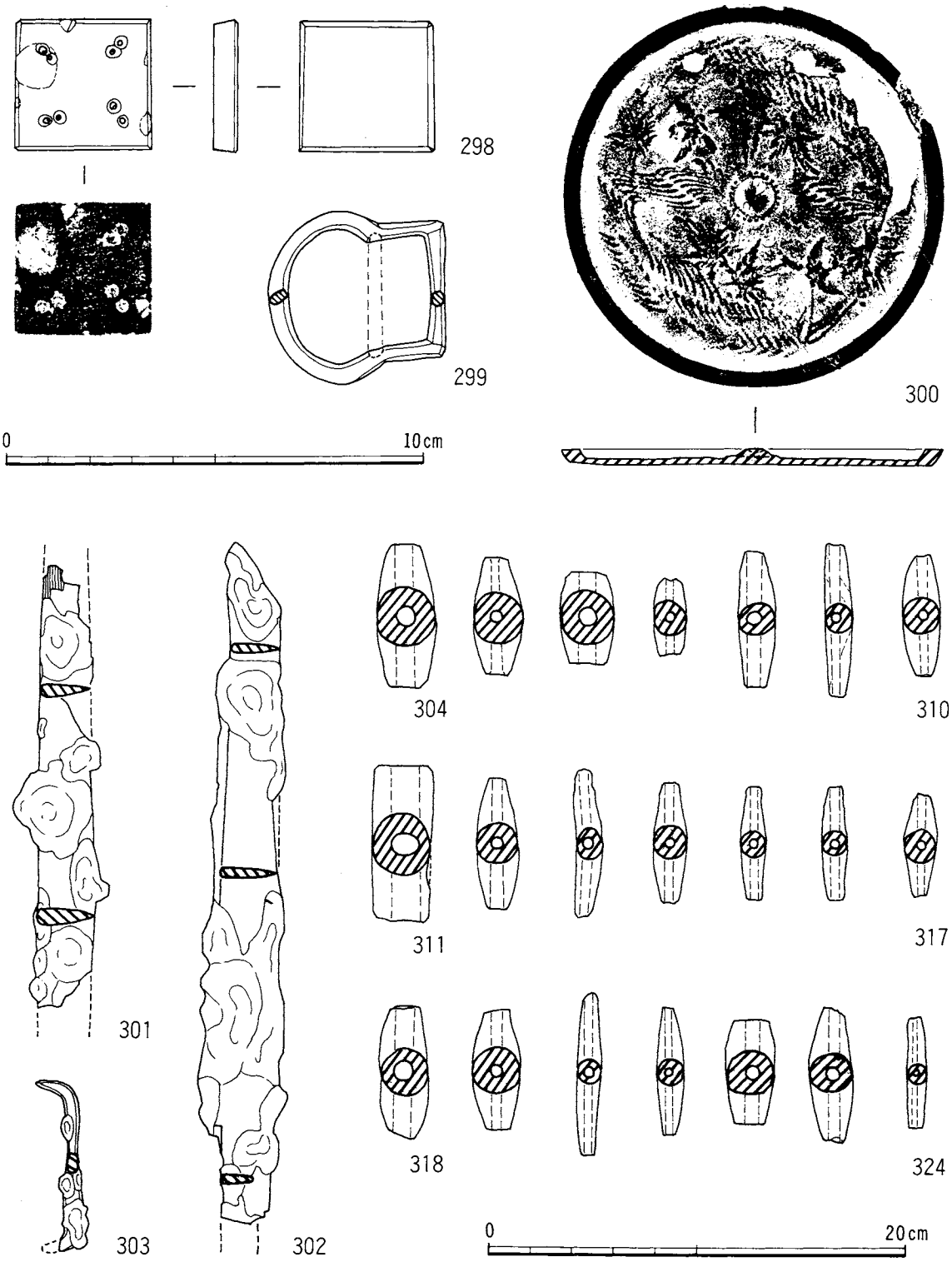
第28図　高向C遺跡　包含層出土土器実測図



第29図　高向C遺跡　包含層出土土器実測図

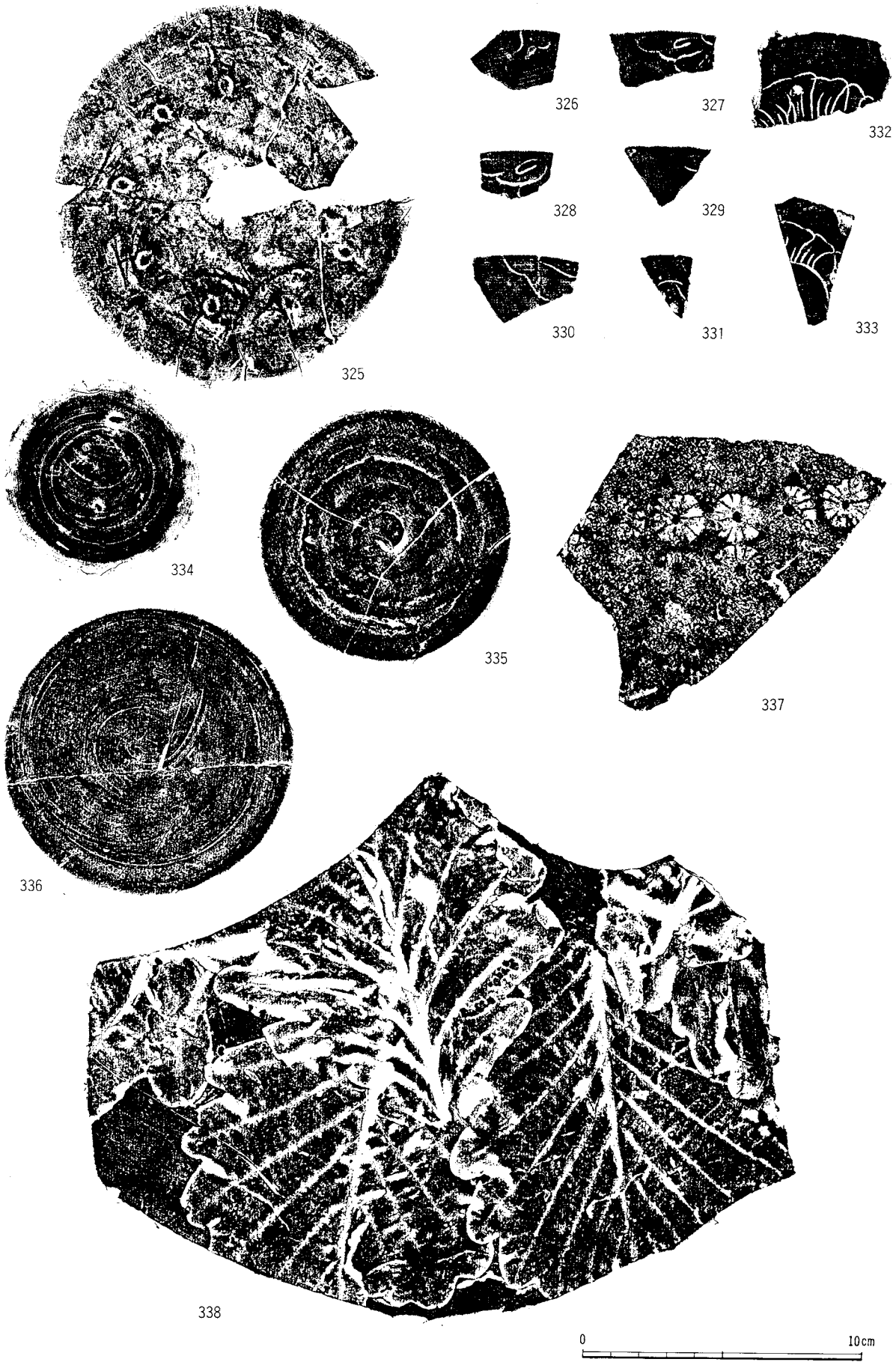


第30図　高向C遺跡　包含層出土土器実測図



309・310―ＳＢ101出土
322～324―ＳＥ315出土

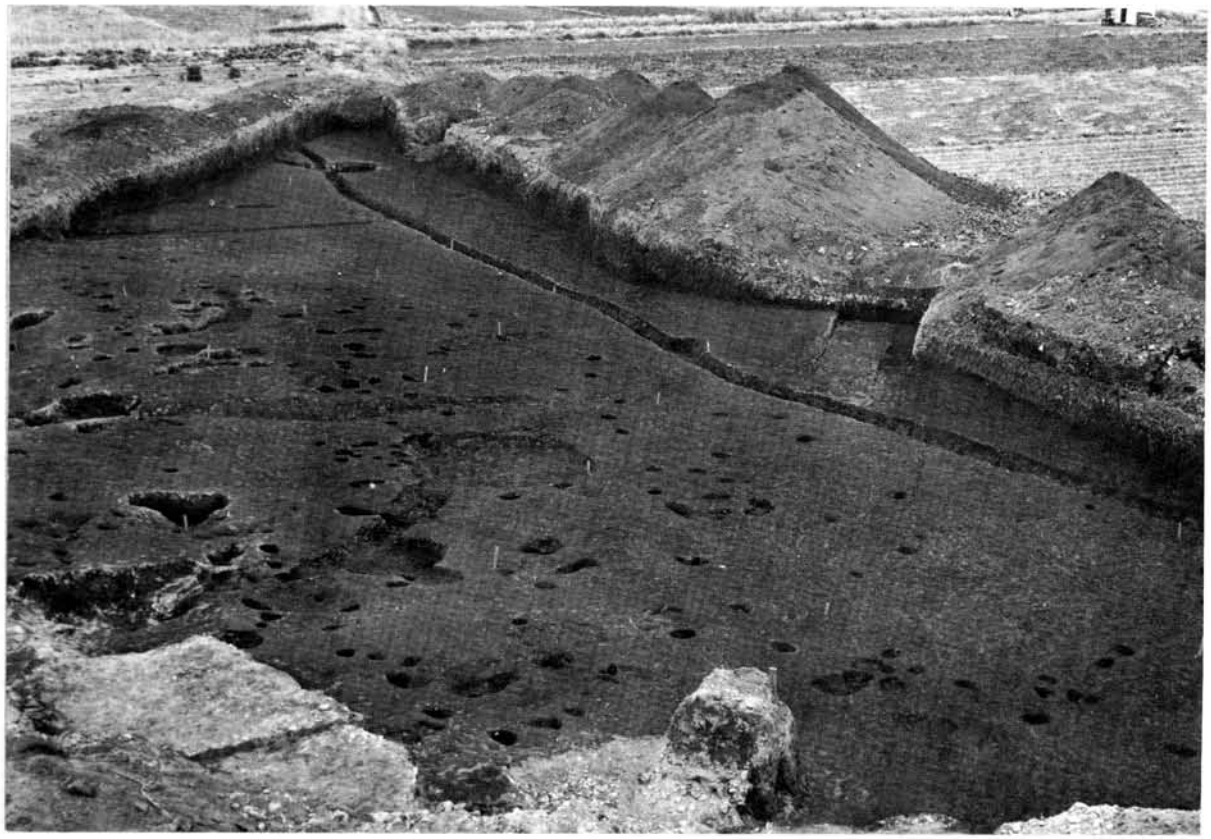
第31図　高向Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡　包含層出土遺物実測図・拓影



第32図　高向A・B・C遺跡　土器拓影

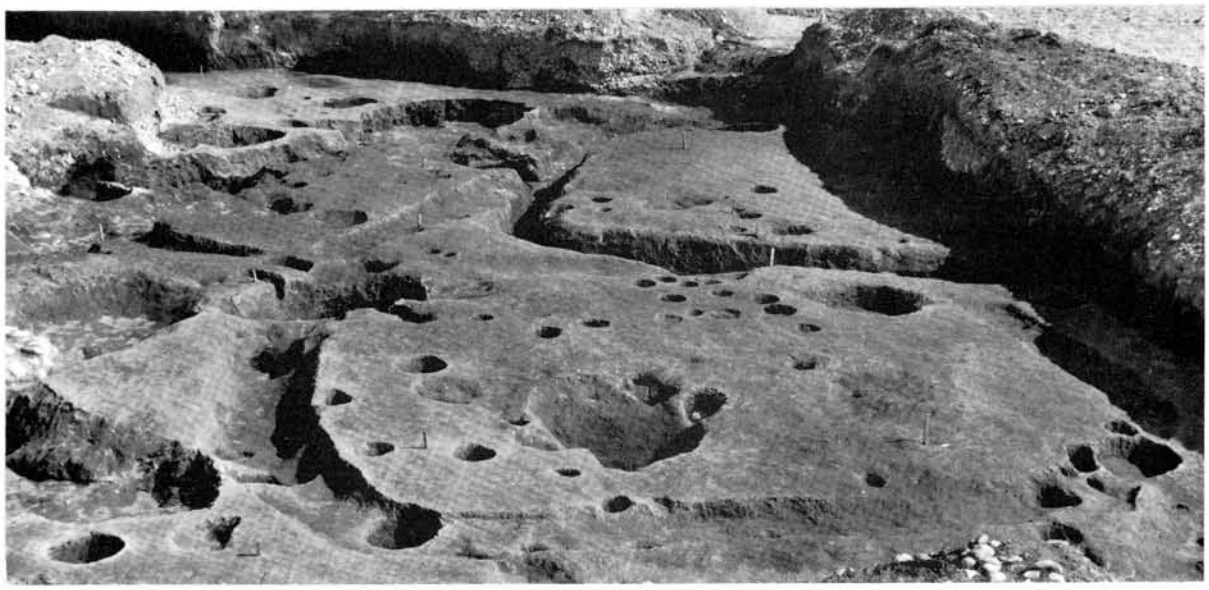
(1)　大藪遺跡・高向遺跡遠景（南方上空から）

(2)　大藪遺跡調査区全景（西から）



(1)　大藪遺跡調査区東半部（西から）

(2)　大藪遺跡調査区東半部（東から）

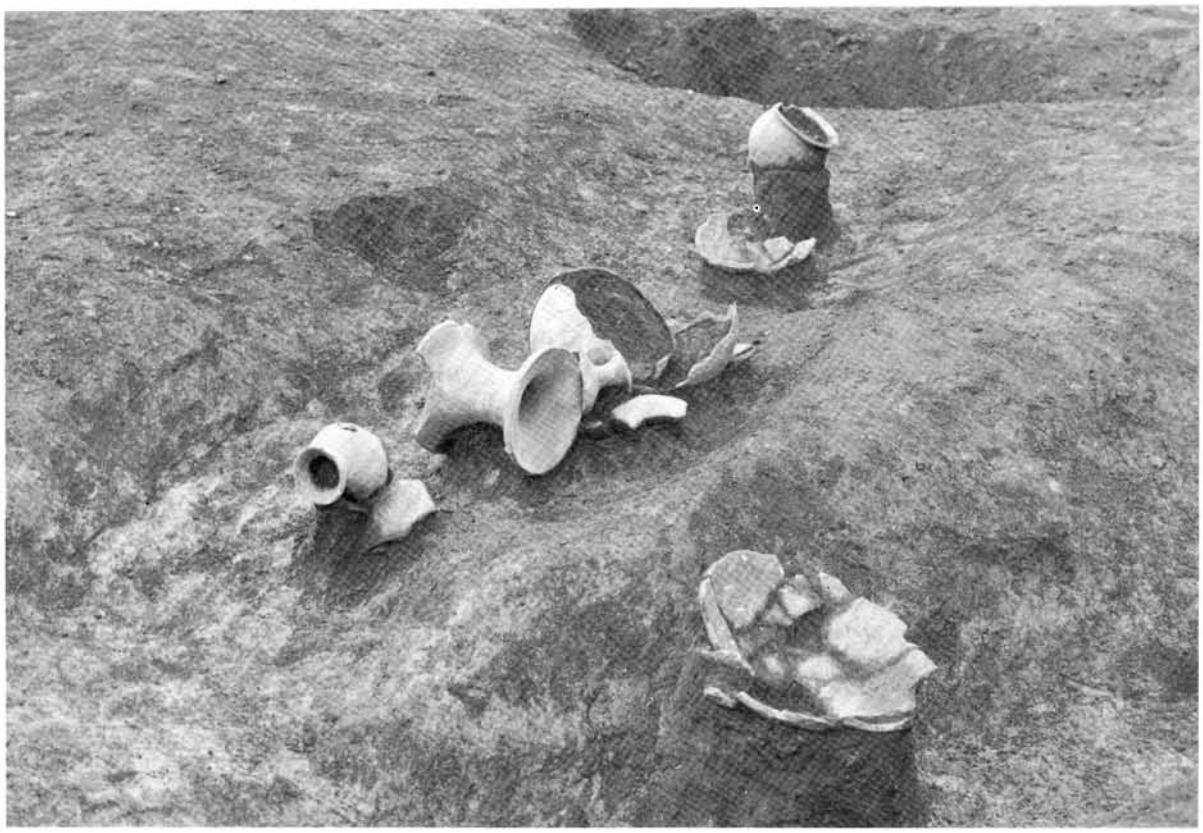


(1)　大藪遺跡ＳＸＩ．２．３（北西から）

(2)　ＳＸＩ．２．３（北東から）

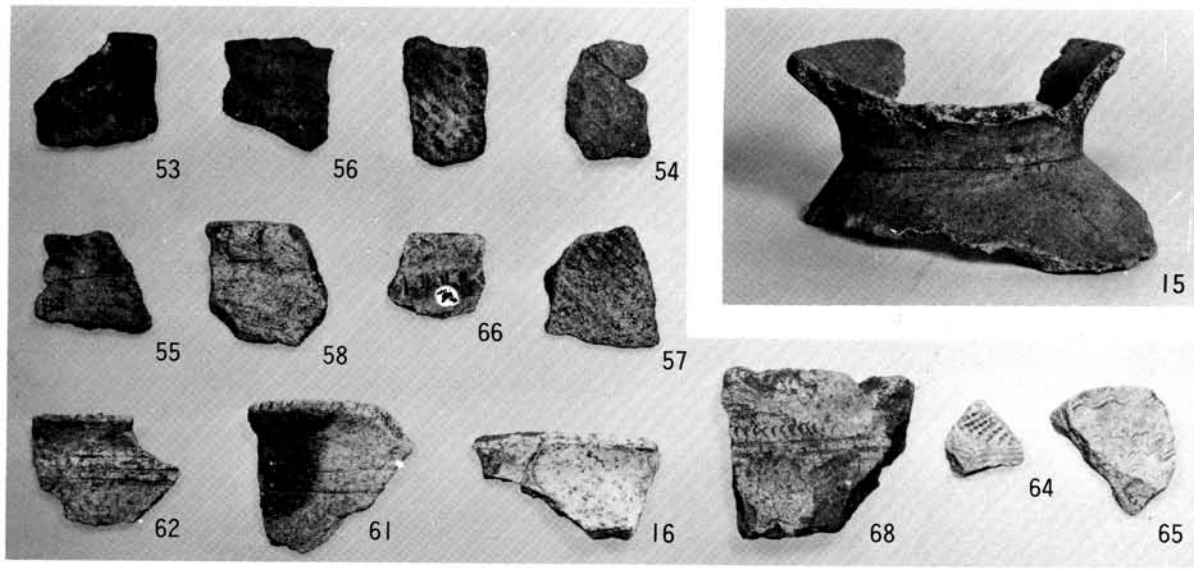
(3)　ＳＸＩ（北東から）

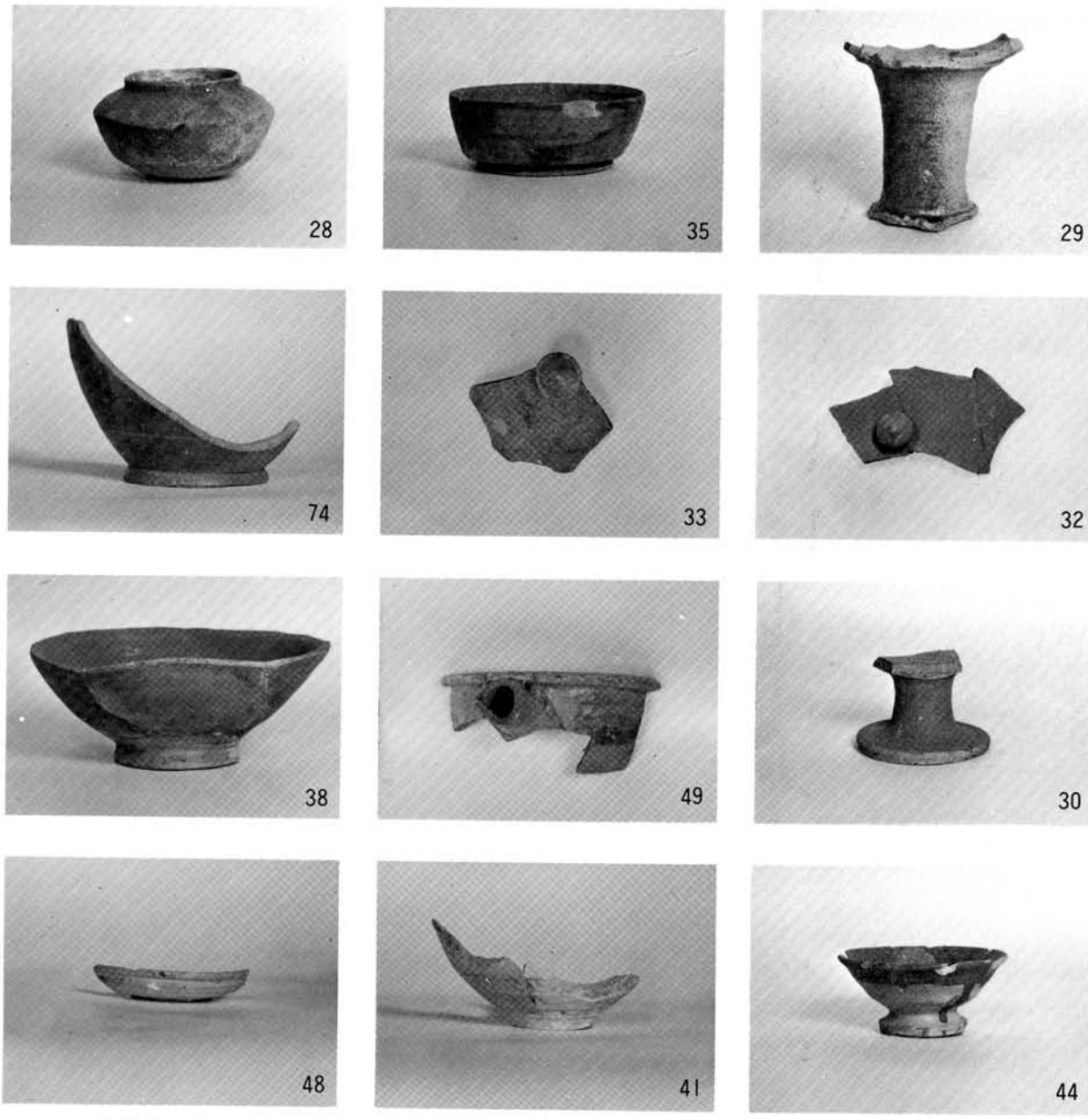
(1)　大藪遺跡ＳＸＩ．２土器出土状態（東から）



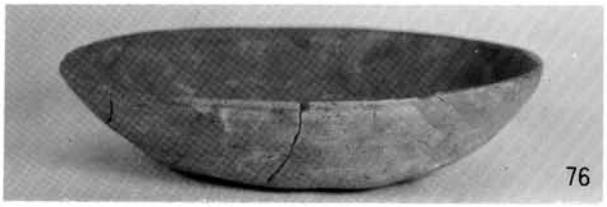
(2)　ＳＸＩ．２土器出土状態（南から）

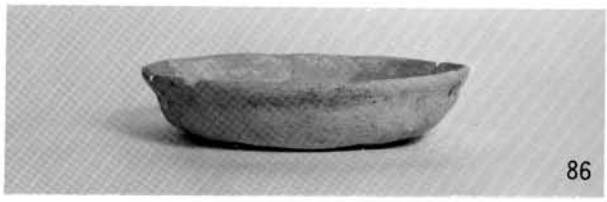
大藪遺跡　ＳＸＩ．２出土土器（１：４）

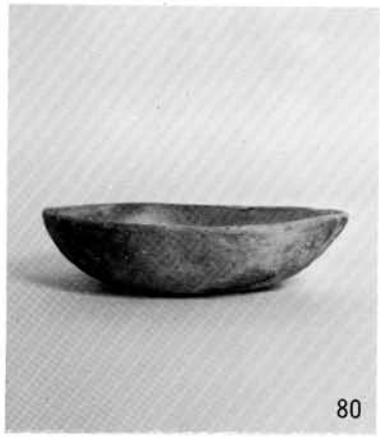


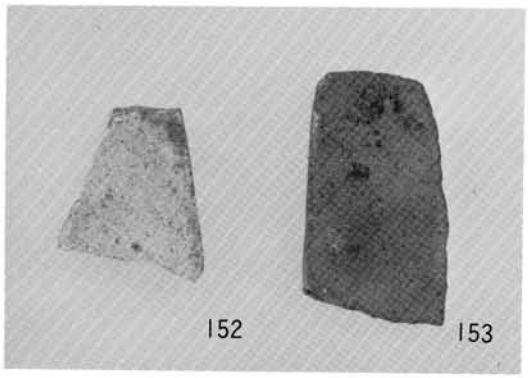


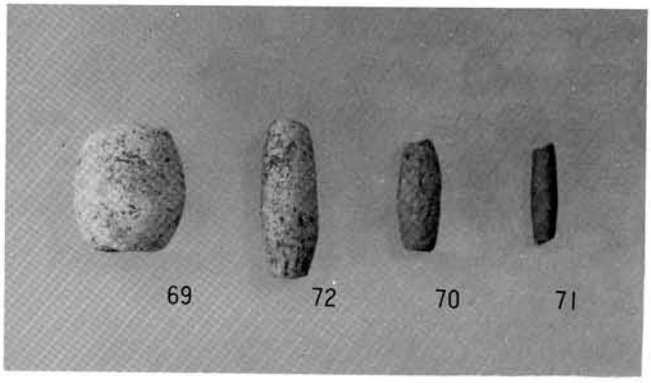
大藪遺跡　井戸・包含層出土土器（上段１：３，下段１：４）











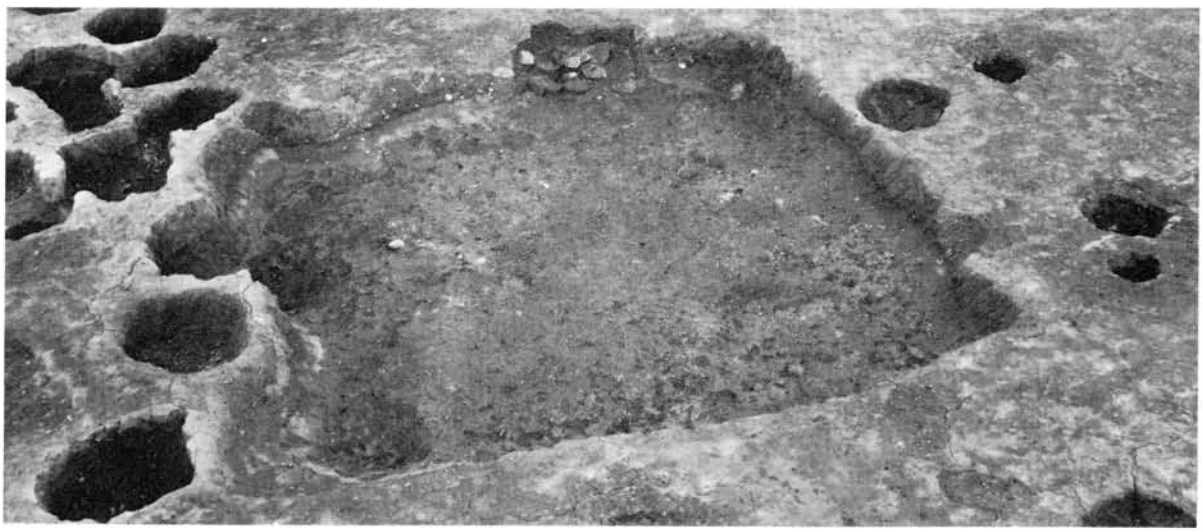
大藪遺跡　包含層出土土器・砥石・土錘（上段1：3，下段1：2）

大藪遺跡　包含層出土土器（鎌倉時代）（1：4）

大藪遺跡　包含層出土土器（鎌倉・室町時代）（1：4）

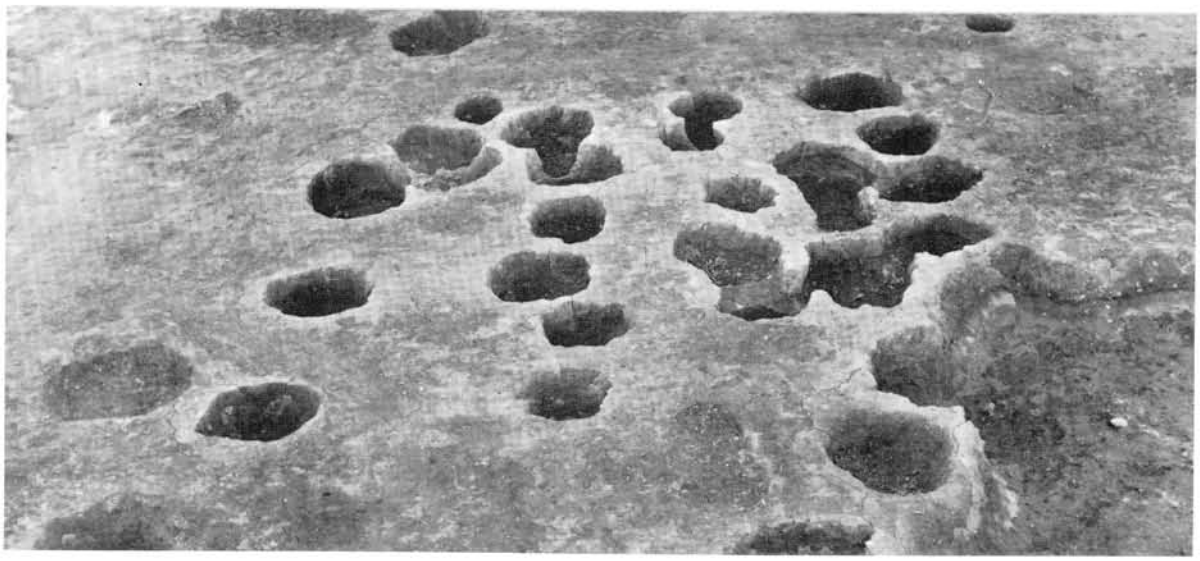
(1)　高向A遺跡全景（東から）

(2)　S B 105.106（東から）



(1)　ＳＢ101（西から）

(2)　ＳＢ101 カマド址（西から）



(3)　ＳＢ109．110（西から）

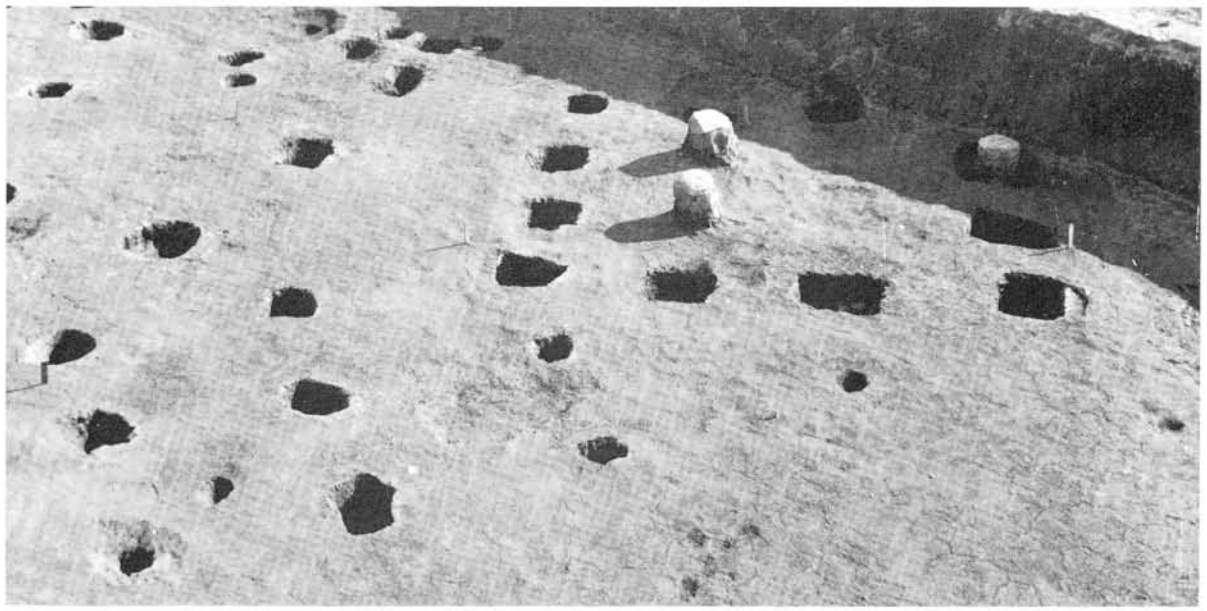
(1)　ＳＢ106．107、ＳＤ112（北から）

(2)　ＳＥ123（北から）

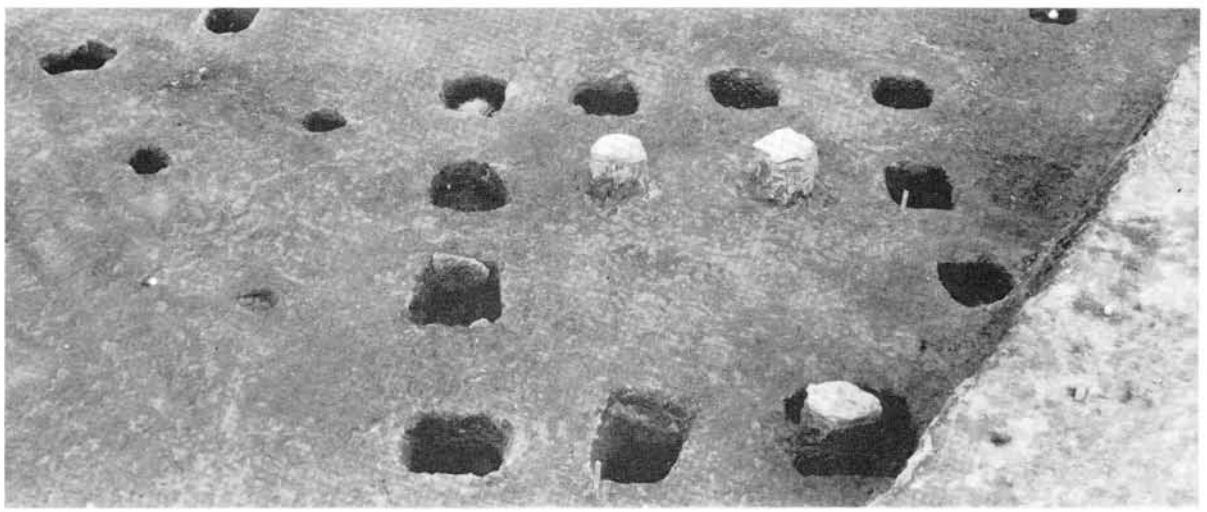
(3)　ＳＥ122（東から）

(1)　高向Ｂ遺跡遠景（西から）

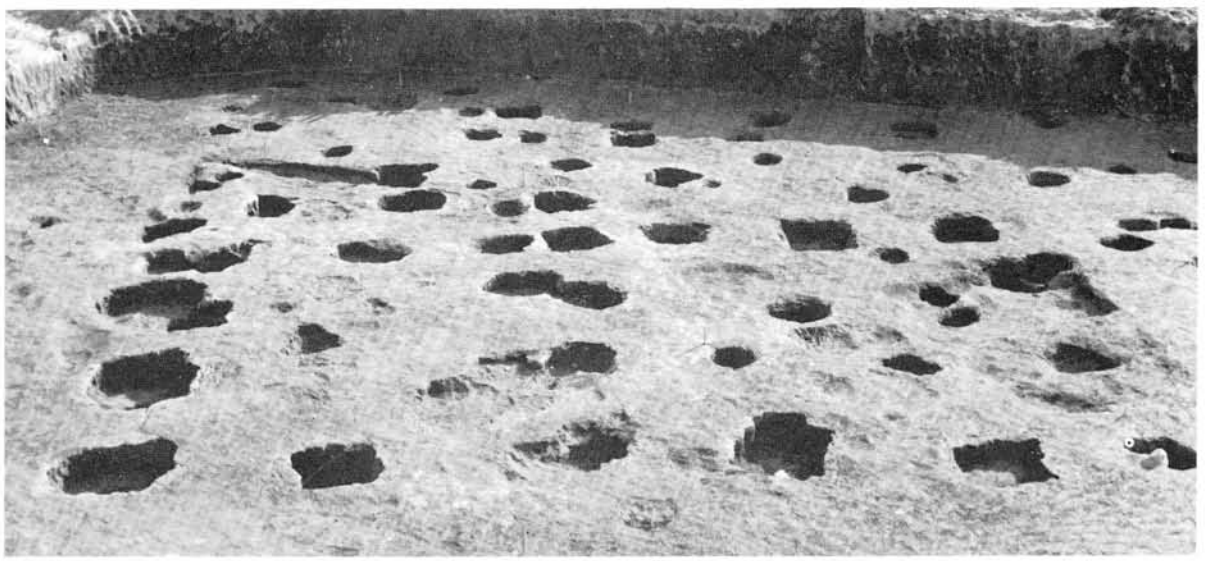
(2)　高向Ｂ遺跡全景（東から）



(1)　S B201．204（北から）



(2)　S B201（西から）

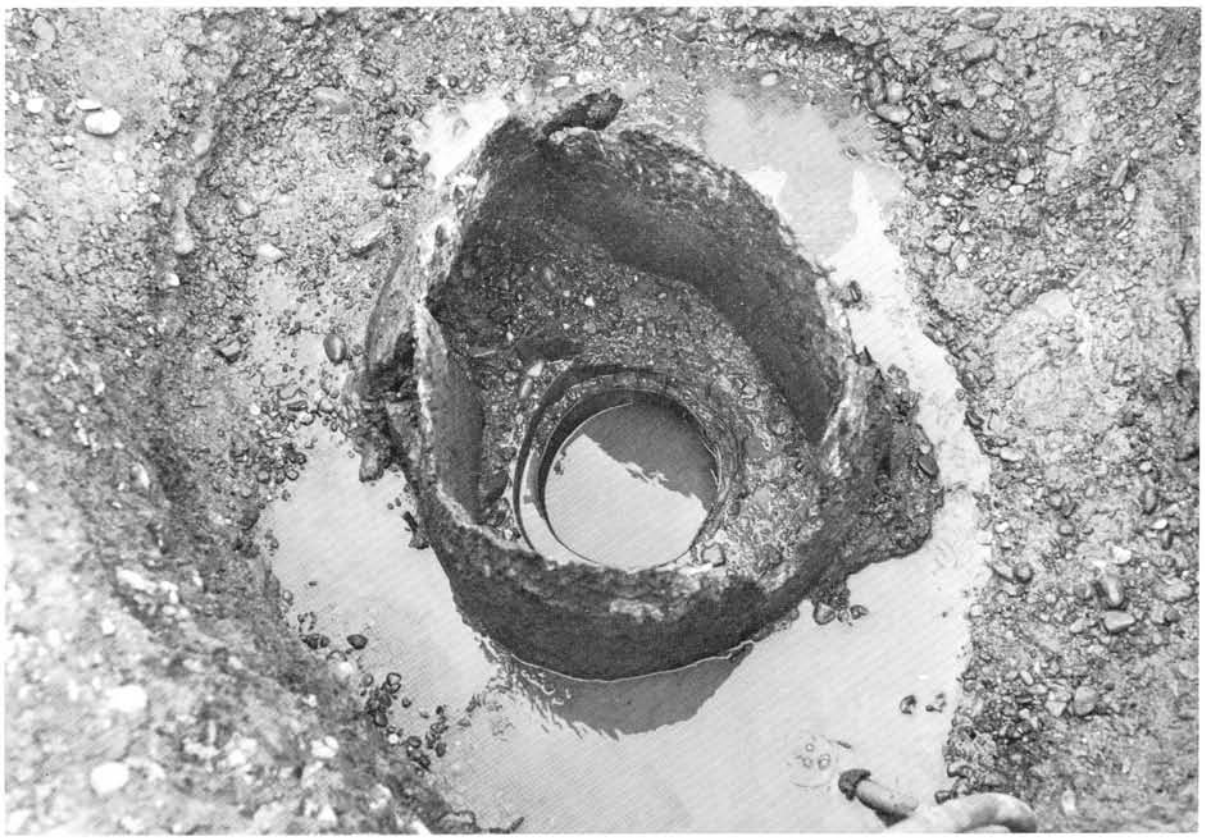


(3)　S B203．207．206（北から）

(1) 高向C遺跡遠景（西から）

(2) 高向C遺跡西側全景（西から）

(1)　ＳＢ304、ＳＥ315（北から）

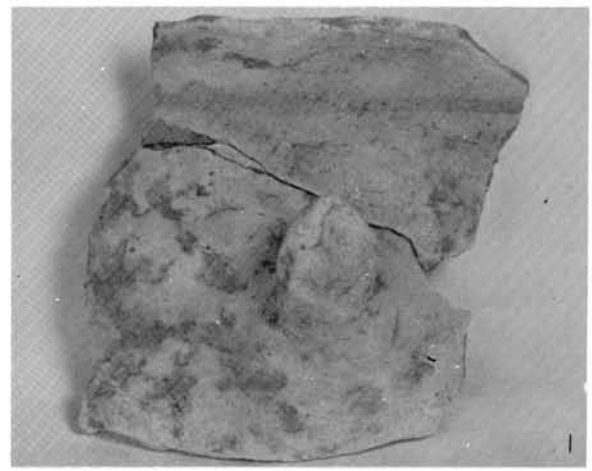


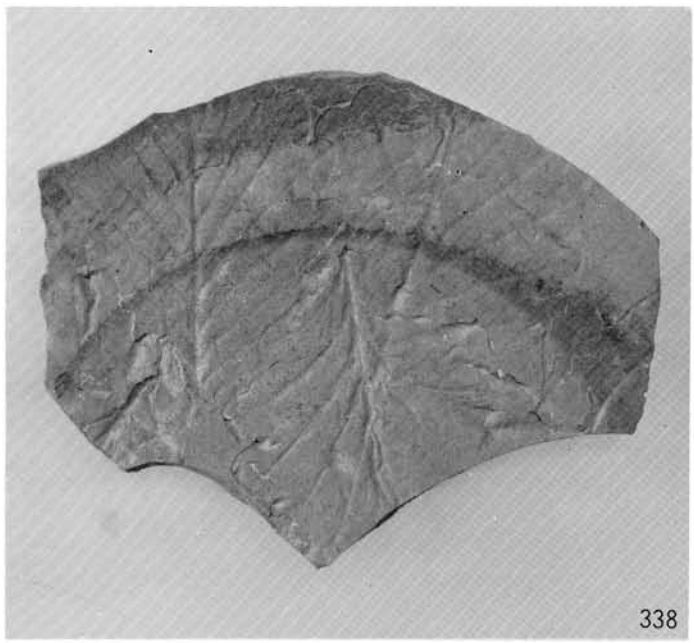
(2)　ＳＥ315（南から）

(1)　高向C遺跡東側全景（東から）

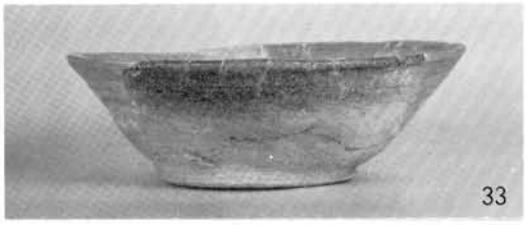
(2)　SB301．302、SE316（南から）

(3)　山田遺跡遠景（北から）





高向A遺跡　SB101カマド址出土土器（1：3，3—1：4）

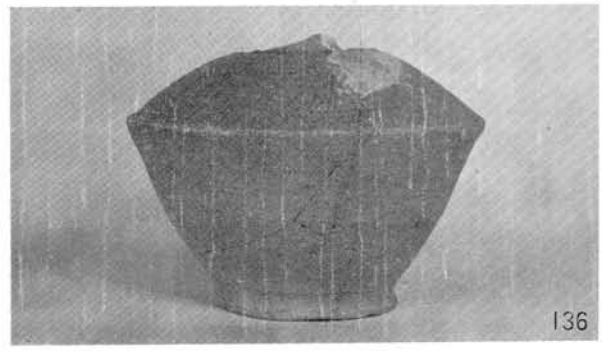


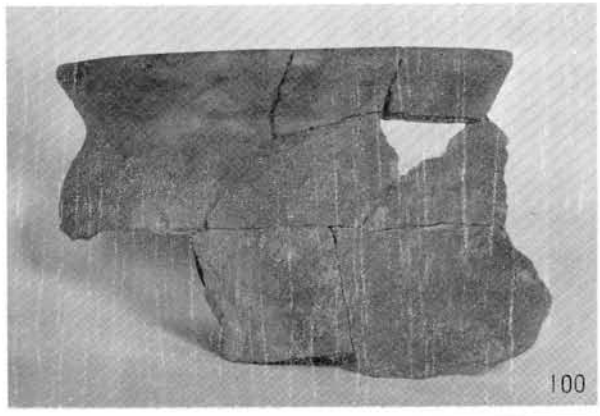
高向Ａ遺跡　ＳＫ116、包含層出土土器（１：３）

98

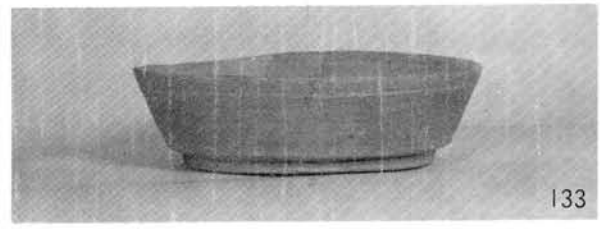
135

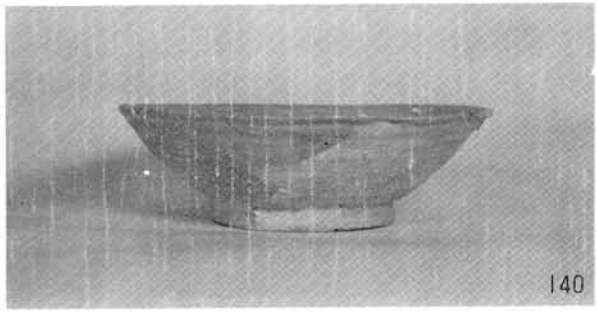
99

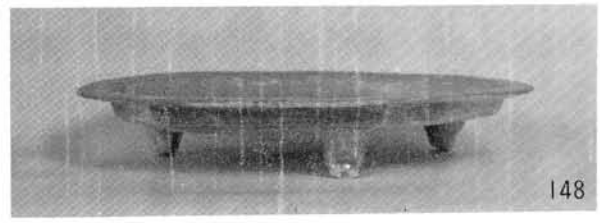

136

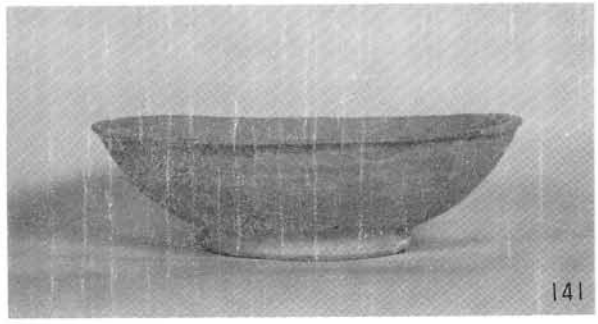

100

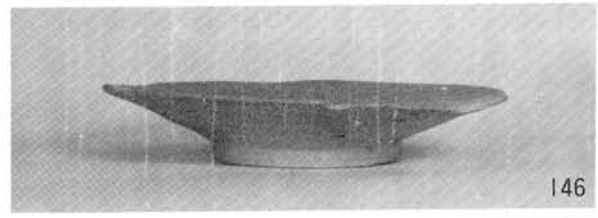
131

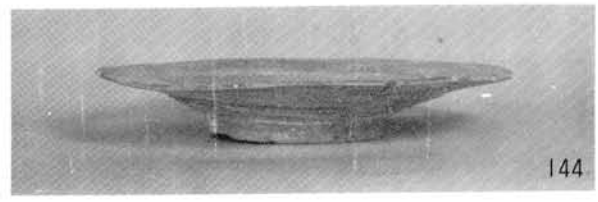

133


140


148


141


146


144

高向B遺跡　包含層出土土器（1：3）

159

162

169

165

166

167

174

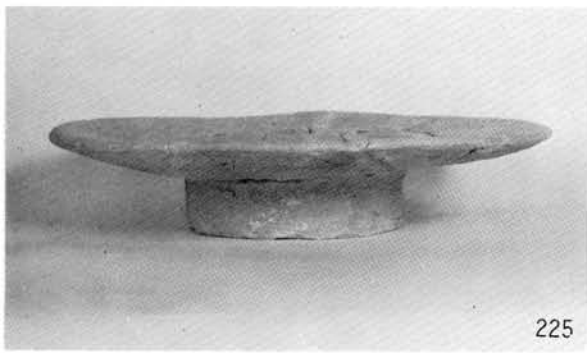
175

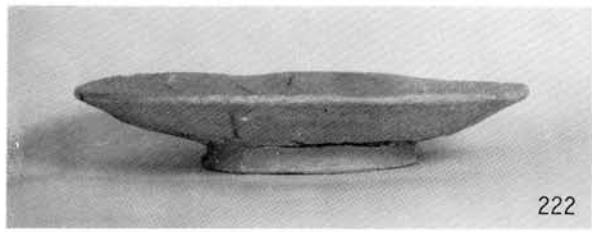
173

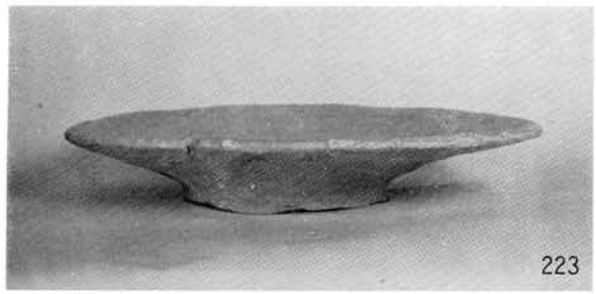
176

170

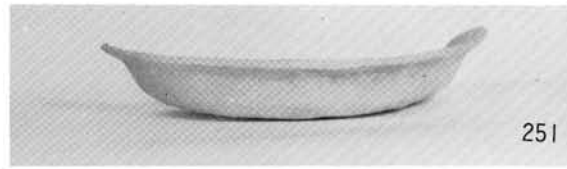
高向C遺跡　SD313出土土器（1：3，159—1：4）

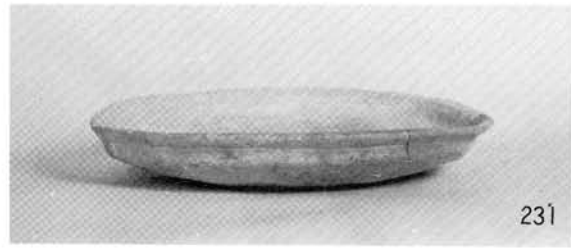


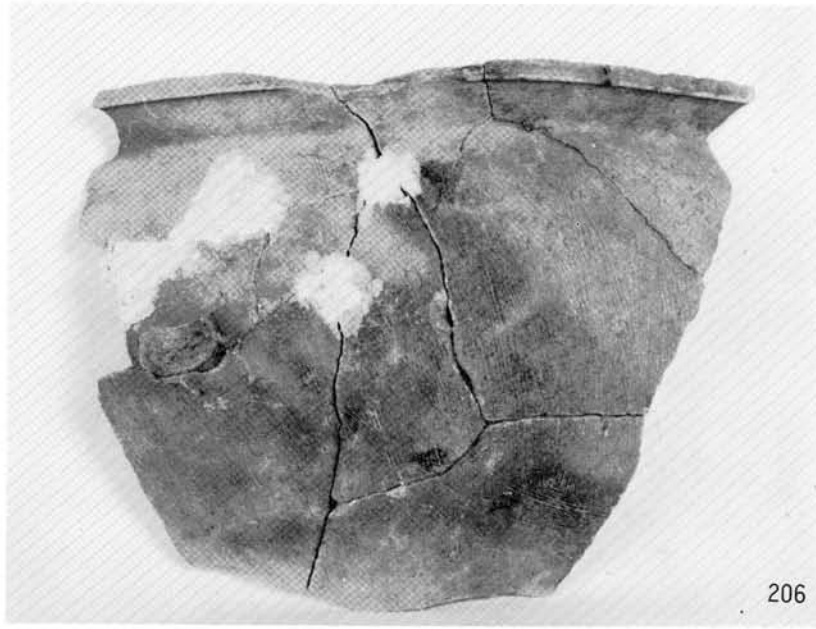




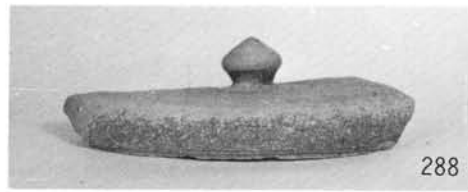
高向Ｃ遺跡　包含層出土土器（１：３）

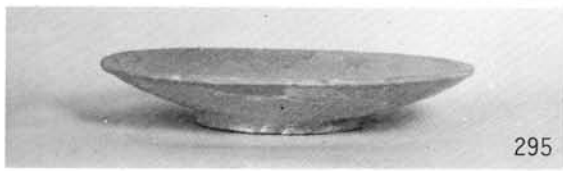


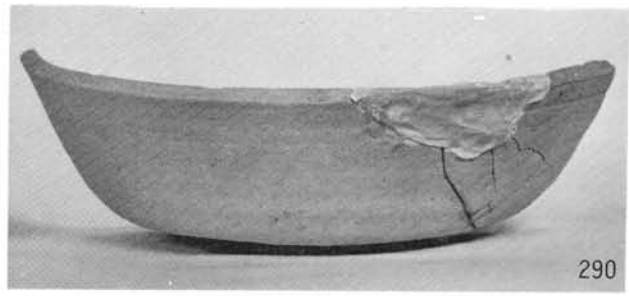




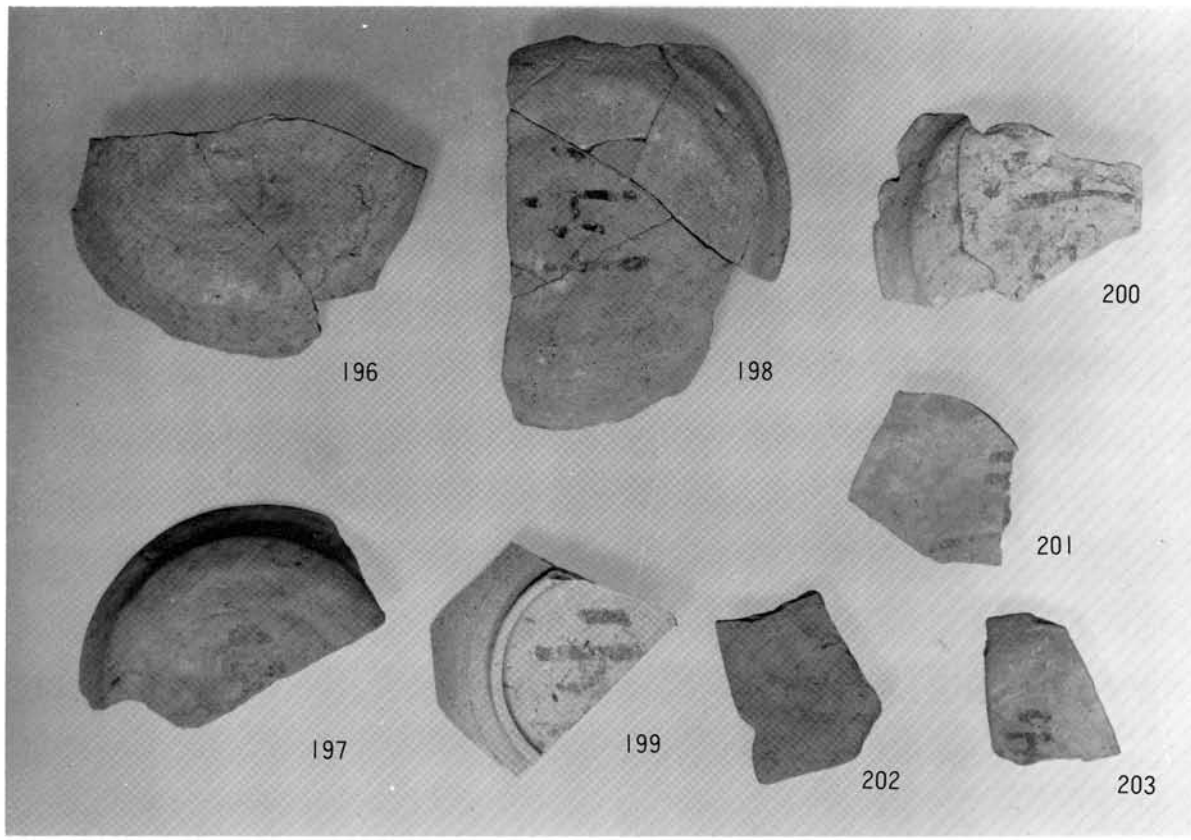
高向C遺跡　包含層出土土器（1：3）





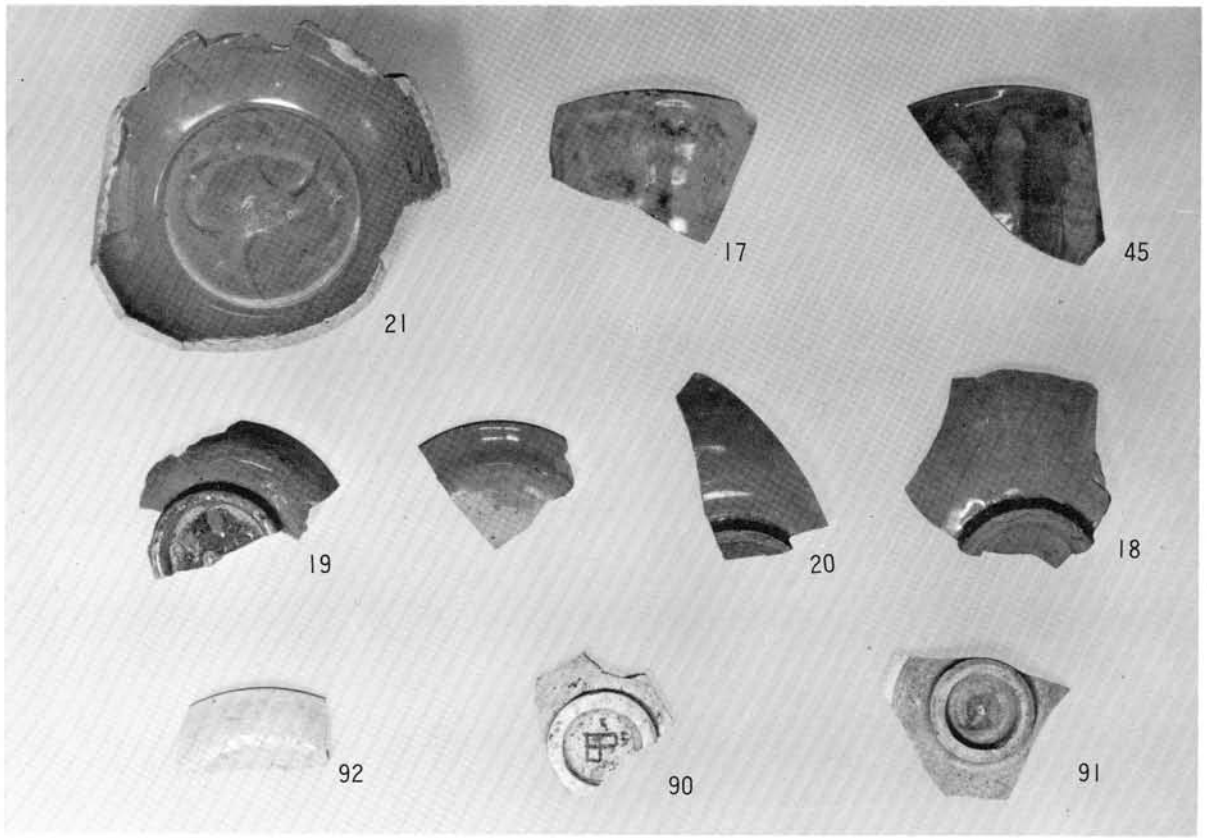


高向C遺跡ＳＤ312、包含層出土土器（１：３）

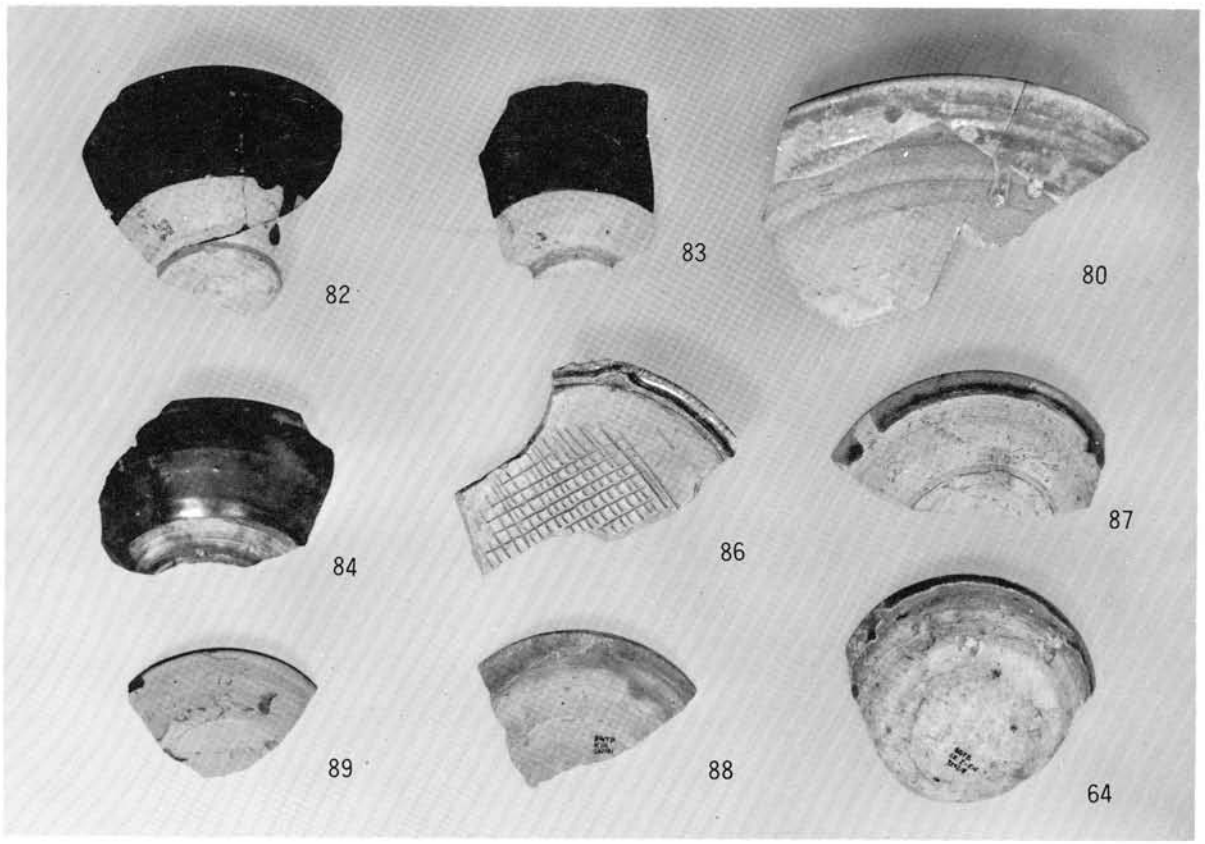


(1) 高向C遺跡　墨書土器

(2) 高向A遺跡　銅鏡



(1)　高向A遺跡　青磁・白磁



(2)　高向A遺跡　瀬戸焼

昭和48（1973）年３月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　18

南勢バイパス埋蔵文化財調査報告

1973年３月31日

編　集　　建設省中部地方建設局
発　行　　三重県教育委員会

印　刷　　津市栄町２丁目
　　東亜印刷有限会社